二つの加具土命【第一部完】

ノイラーテム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナルト世界に転生したものの、そこは原作と何処か違っていた。

例えばサスケに転生したのに、両目とも固有瞳術が加具土命だったことだ。

他にも、とある人物の性別が違うなどであるなど、少しずつ違っていたのだ。

目次

サスケ転生！ ―― 1
紆余曲折あったけど修業は終わり！ 18
コピー忍者！　それはカカシのことだけではなく！ ―― 35
炎の式 ―― 50
中忍試験編
気が付いたら差異は大きくなっていく ―― 74
大蛇丸を止めるのは…… ―― 91
幾つもの三つ巴 ―― 112
トーナメントでの読み合い ―― 123
予選と修業の終わり ―― 145
第七班の天覧試合 ―― 161
三代目の救援作戦 ―― 184
救出作戦は人柱力にこそ ―― 197
フェイク・フェイク・フェイク 210
サスケの忍伝 ―― 227
新しい道筋 ―― 247
後日譚。木ノ葉が茂る夏の季節 264

サスケ転生！

ナルト世界に転生した俺にとって良い事と悪い事が同時に訪れていた。

質問でどっちから聞きたいかと尋ねるネタがあるが、今回に関しては同時に記しておくとしよう。この問題は二つで一つだからな。

「サスケなのに……両目とも加具土命なのかよ」

大好きなナルト世界でしかも主人公格のサスケとあって狂喜すらしていた。

しかしせっかく万華鏡写輪眼を初期から開眼しているのに、固有瞳術が微妙系と言われる『加具土命』だったのは地味にショックだ。消費の大きい天照とセットならかなり使える瞳術とは言われているが、単独では意味が薄く、しかも両目が同じでは切り札の『須佐能乎』が得られないとあっては嘆くしかない。

「俺は原作のサスケほど強く成れるのか？」

アカデミーの時点で万華鏡に覚醒しているので序盤に関しては圧倒的に強いのは間違いない。だがその後の伸びしろが明らかに劣っている。せっかくナルト転生して浮かれた気分が台無しになるのも仕方ないだろ？　それよりもこの後、どうやって原作を乗り越えて行くのか不安でたまらなかった。

「落ち着け……天照が無いと越えられない壁はあったっけ？」
　ラスボス戦では付与術として利用できる加具土命の方が使えていた。しかしそれ以外はどうだっただろうか？　死ぬまでに何年も経っているし転生していることもあって記憶は曖昧だ。大好きだった漫画でなければ、ここまで覚えていたかも怪しい。
「ダメだ……思い出せない。だが里抜けしなきゃ何とかなるんじゃないか？　いや、それ以前に。瞳術に頼るべきじゃない？　あくまでオプションにしとけば……」
　脳裏に浮かんだのは我らが卑劣様だ。彼は誰でもできる事を極める事で、初代火影という異能者に並び称される存在となった。もちろん『卑劣様の事を扉間というのを止めてあげろよ』なんで不埒なギャグが流行るくらいである。その冷静で合理的極まりない考え方が大前提であり、注意が必要なのだが。
「よく見ると左右で色が違うんだな。オッドアイってやつか。……ちょっとだけ格好良いかも」
　写輪眼状態では変わらず万華鏡化すると左右の色が変わる。中二病ポイがまだまだ小学生なので気にしても仕方ない。むしろ普段は隠せることで格好良いとすら思っていた。やはり俺はうちは系なのかもしれない。
　長々と地味に修業するのは性に合わないし、万華鏡は使えば使う程に視力が落ちてしまう。そこで最初に数回使って傾向を掴むと、効率的な修行を始める事にした。時間を

傾斜させて忍術修行に特化させつつ、コツの方は『コピー』で済ませる事にしたのだ。せっかくの写輪眼、使わなきゃ損だろ？　修行と観察の過程で面白いことが判ったのはラッキーだった。

「軻遇突智とでも名付けるか。カグツチって読み方は同じだしな」

色々あったが実際に修業を始めると杞憂だったようだ。右目の万華鏡は従来の加具土命で形態変化特化型だが、左目は性質変化特化型だったのだ。右目が呪われし消えない黒炎をも操るとしたら、左目は浄化の炎である白炎を操るという差もあった。少なくともこれで須佐能乎を使える可能性が出たのはありがたい。とはいえアレは負担が掛かり過ぎるので、永遠の万華鏡を手に入れるまでは多用などできるはずもないが。

「しかし右目が邪ならば左目は聖を操る……か。ふふふ」

聖邪を見据える審神者（さにわ）の瞳という訳だ。これは中二病にも磨きが掛かろうという物。しかし審神者の眼といえば、異なる世界、異なる神を見据える能力だ。須佐能乎は別次元にエネルギーを投射するのだろうかとくだらない事を考える余裕すらあった。

「パンチ力が無いのは相変わらずだが、まあいいさ。今はこの『副産物』の方がよほど重要だ」

どこまで行っても便利系であり、パワー不足なのは否めない。だが現時点において、他にはない有益さを発揮していた。形態変化と性質変化の二つこそが忍術の基本であ

り、ソレのコントロールに特化した瞳術を得たことで、チャクラコントロールの観察が劇的に上手くなった。何しろ瞳術を使わずとも覚醒さえしていればちょっとした変化がリアルタイムで判るのだ。こと火のチャクラに関しては、影分身での修業に匹敵するかもしれない。

「絶えず修業は必要だし、俺専用の特殊な術も欲しい。その為の基本能力を底上げする時間が得られたのは行幸だぜ」

原作ではアカデミーなのに火遁が使えるのが凄い程度の強さだったが、チャクラコントロールの修業を並行する余裕ができた。この事で体術・幻術の底上げもできる。原作序盤くらいならば乗り切れるだろうし、このまま精密なコントロールを身に付ければ、終盤も何とかなるかもしれないと光明が見えたのである。後は右目と左目の特性を融合させた専用の術さえできれば、天照が無い不利を補えるかもしれない。

俺は目標を三つほど作ると日夜それに邁進した。

一つ目は基礎能力の向上、二つ目は体術・忍術・幻術の中で特に忍術を鍛える事、三つ目は独特の戦法に必要な術をコピーすることだ。アイデアはあるし後で思いつく事もできるが、この三つだけは一朝一夕に鍛えられるわけがない。時間を掛けるとしたら今だろう。

ああ、そうだ。眼の他にも大きな差があったな。忘れるところだった。
「なんだまた来たのか。どっか行っちまえよ」
「居ちゃ悪いか？　こっちは修行に来てるんだ。邪魔すんならそっちこそどっかいくんだな」
うちは一族の功績に対して与えられた土地は取り上げられたが、それ以外の資産は最終的に俺の元に入った。一斉整理で目減りしたはずだが、それでも修行三昧の日々を送ることができる。そんな中で、俺には新しい出会いがあった。原作にはなく、そしていつか原作で辿り着く出逢いである。少々早くても問題あるまい。
「ここはオレが先に居たんだってばよ！　どうしてもってんなら、オレよりも先に来やがれ！」
「お前は何時もここに居るじゃないか。ここでの修業が必要だから、俺も遠慮しないことにしたんだよ。ナルト」
言わずとしれた原作主人公のナルトに早い段階で出逢った。正確には出逢って無視するはずの状況で無視せず積極的に突っ掛かっただけだ。どうせ後に出逢って一緒に修業したり馬鹿をやるなら、早ければ早い方が良いだろ？
それに此処で出会っておく意味は大きい。修行時間が速ければこいつも強くなって後が楽になるが……例の事件で禁術の巻物を持ち出すからだ。そこで盗み見ても良い

し、影分身をこの段階でコピーするだけでも違うだろう。そしてもう一つ、大きな意味合いがあった。

「……てめー。オレの事を知ってたのかよ」

「知らない筈はないだろ？　俺は最後のうちは一族、お前は最後のうずまき一族。お互い似た環境だしな。意識すんなって方が嘘だ」

俺には兄のイタチが居るし、ナルトには血筋らしい香燐とかも居る。だが木の葉に居るかという意味ではいないと言っても良いだろう。子供の言葉の綾としては嘘じゃない。

「同情でもしたいのかよ……」

「鏡でも見て言えよ。お互いさまっつってんだろウスラトンカチ。まあ同病憐れみあう気なんざねーがな」

「ど、どうびょう？　ドジョウの仲間か？」

「……格好良いセリフを噛まずに言えたんだからそこは流しとけよ」

なんて馬鹿な事を言ってる内に仲良くなった。喧嘩友達レベルでしかないがお互いに寂しいガキのやることだ、外から見れば仲良く喧嘩しているレベルだろう。

「でもよー。修業って何してるんだ？」

「チャクラを使って歩いたり、他の連中がやってる忍術を盗んでるんだよ。いつか俺が

使う時の為にな」

原作でもあった木登りをやって見せるとナルトは凄い感心してくれた。何度も頭をぶつけながら必死で修業したのでこれだけは速攻で覚えたのだ。忍者が暗がりから壁を歩いて現れるとか、スゲー格好良いしな。

何日か掛けて仲良くなって、何日か掛けて一緒になって修行する。基本のチャクラ・コントロールを覚えて、そこから変化や分身の成長を競う感じだろうか。

「もしかしてお前、もう忍術使えんのかよ!?」

「変化や分身だって忍術だろ。まっ、うちは一族と言えば火遁を使えて一人前だがな」

フフンと胸を反らせば羨ましがるクソガキが一人。チョロイなと思う反面、俺も人の事は言えねえなあと後から当時の事を思い出す。黒歴史てのはこんなもんかと思う瞬間だ。

「スゲー!?　ちょっと見せてくれよ!　あ～オレも使いてえなあ!　忍法、バンバンバン!　とかよ!」

「バンバンバンってなんだよ。銃でも撃つのか?　でも、そういうの面白いかもな。覚えられたら見せてやっても良いが……」

何となくフィーリングで騒ぐナルトの言葉を聞いて、俺は思わずジャンプ漫画の金字塔を思い出した。指先から銃弾みたいのを撃つ奴が居たなーとか思いつつ、こういうの

はノリとインスピレーションなのかと思った。
「なんだ～？　てめえ本当は使えねえんじゃねえか？　だから使えるって嘘ついてよ」
「お前じゃないんだから嘘なんか吐くかよ。……単にさ、お前に向いた忍術もあるんじゃないかって思っただけ」
　少々苦しいが、もう一つの狙いであるナルトの性質変化に話を向ける事に成功した。ここまで数日掛けてそこそこに修業した。数日では大した事はないが、根本的なところで俺が嘘を吐いてないと思わせる事には成功していた。この性質修業へ導く事こそが、俺の修行の為にも必要だったのだ。
「オレ向きの？　そんなんあるのか？」
「地面から出て来る土遁とか水に潜る水遁くらいは知ってるだろ？　うずまき一族って言うくらいだから、水遁とか風遁の素質でもあるんじゃねえかと思ったんだよ」
　すみません。思いっきり原作知識からフライングしました。感心するナルトには悪いが、こいつに風遁を覚えさせて火遁と比較したかったのだ。将来的に五大性質変化を使えるようになるし、そもそも俺の眼の力を考えれば、『差』を比べて認識することはとても重要なのだ。
　幸いにもというか主人公格同士であり、サスケとナルトの才能は得意不得意はあっても均衡している。五大に目覚めるのも同じだし、参考にするにはちょうど良い相手だっ

た。俺の火と、こいつの風。どういう差があるのか、そして、苦手意識・得意意識を見ることで、修行の効率化を図りたかったのだ。

「よーし！　オレも覚えるぞ～。って、忍術って何があったっけ？」

「そこからかよ。土・水・火・風・雷の五つと陰陽、あとは個人的な素質もあるが忘れて良い」

そんなこんなで色々と教えることで、自分の未熟な部分を再確認しておく。ナルトはとにかくチャクラと体力のオバケなので、トライ＆エラーをやらせるには向いているのだ。中々覚えない事に腹を立てたりもするが、このまま行けばちょっとした術くらいは使えるだろう。

ナルトと仲良くなり修行を始めて暫く。後から気が付いたのだが、チャクラ・コントロールを教えて上手くなったら例の事件起きなくね？　とガバに気が付いてしまった。まだまだ原作には時間が掛かるし、テストの順番によっては一発合格もあり得るのだ。

しかしナルトのヘボぶりは安心できるレベルだった。同時に奇妙な作為性も見受けられて、陰謀を疑うレベルでもあったが。

（どういうことだ？　ナルトが飛び級狙ってしくじるのは良いとして、どうしてこうも苦手な術ばかり選ばれる？）

原作では運悪く苦手な術が……と言っていたが、実際に目の当たりにすると首を傾げざるを得ない。何がおかしいかと言って、ナルトが苦手な術そのものは幾つかあるが、苦手を克服した術はもう卒業テストにはでないのだ。

最初に一番苦手だったのは変化で、その年は変化だった。猛烈な勢いで練習してそれをどうにか克服すると、次の年は別の術。そして原作の三年目になって分身が選ばれる。もちろん全部できて当たり前なのだが、運不運では卒業できた可能性もある。

（例えばリーだ。あいつは瞬身で何とか合格している。他の連中もそうだ。もちろん役に立たなきゃ出戻りコースで再修業なんだが）

サスケは飛び級してないようだが、おそらくはイタチほど速くは無理なので比較を避けたのだろう。それと火遁を完全にモノにして豪火球を使いこなしてから卒業を狙ったようにも思える。

またナルト以外が全員合格している割りに、カカシは誰も選んでないほか、合格率の討論がある辺り、アカデミーの合格は最低ラインの合格であると思われた。だからこそサスケが焦っていなかったのだろう。ここで出戻りとかの方が恥ずかしいしな。

「気を落とすなよ。保留って話だったし、来年には合格できるだろ。アカデミー卒業で風遁使える奴なんざ殆どいねえ。十分自慢できるぜ」

「……オレはお前と一緒に合格したかったんだってばよ」

　これまで飛び級を狙って落ちては冗談みたいな行動を繰り返していたのに、今回ばかりは本当にショックだったようだ。まあ年齢相応の時間帯だし判らなくもない。特に……俺が言う事じゃないが、仲良くなった同級生とはできるだけ一緒に居たいしな。
「ナルト君。もう少しイルカ先生に掛け合ってみるかい？　サスケ君が言うように風遁できれば上等だよ。分身が苦手だと言ってもあとちょっとだったしね。補欠合格させてくれるかもしれない」
「諦めるくらいなら行ってみろ。それで駄目なら仕方ない。修行しかねえだろうな」
「あったり前だってばよ！　……行ってくる。絶対に合格してやっからな！」
　この後の流れを知っている上に、利用する気マンマンなので心が痛い。本当ならば付き添ってやりたいのだが、どうしても必要な用事があるので席を外すしかなかった。一抜けする為の用事を作ったんじゃねーからな。凄い気になってたんだ。今なら話しかけるのに都合がいい。
「いの。サクラと一緒の所を悪いが花を見繕ってくれるか？」
「何よせっかくサクラくんと……商売の話じゃしょうがないわね。何が必要なの？　花言葉とか色々あるけど」
　最初に知った時の驚愕が判るだろうか？　何故かサクラが男なのだ。中性的な顔だったので本当にござるか～？　と先回しにしていたのだが、どうやら本当らしい。こ

の世界は本当に、俺の知っているナルト世界なのだろうか？　木の葉のマークが渦巻きだけじゃなくて、三つ巴が加わってたし非常に怪しい。

「葬儀に使う系統なら何でも良いよ。二組くれ」

「せっかくの卒業式なのに……ってゴメン。判ったわ。サクラくんもゴメンね、家の用事があるからまた」

「……ああ」

ナルトの分もついでに頼むが、いのは失言に動揺して気が付かなかったようだ。しかしサクラの原作との違いぶりは大きく、男になっているほか凄くクールである。原作のサスケは似非クールだったが、シノと大して変わらないくらいの寡黙さである。それでいて人付き合いは良い中性的美貌キャラと、完璧超人ではないかと疑いたくなった。

他にも何か違いがあるのではないかと話したくなったが、いのの家に付いていって花を買わないといけないのが非常に残念である。そんな話題を振った自分も悪いが、他に都合の良いネタが無いので仕方あるまい。

「さてと。こっからどうしたもんかな。あっちに向かってるのは判るんだが」

写輪眼をオンにするとチャクラの流れと熱源の航跡が判る。普通ならば混ざり合って判り難いものだが、ナルトのチャクラは仲良くなってから何度も確認している。俺が

見間違う事はないし、あいつが修行の為に使う森なんか簡単に想像できるくらいだ。
「巻物も魅力的だが影分身だけなら後でも判るしな。……説得のフリして盗み見るのが一番とは判っちゃいるんだが……クソ！　悪人にゃなり切れねえ」
自分に言い訳を付けながら森ではなく、町の方向へ歩き出す。そこには原作にあった、ムナクソ悪い円陣が見える。こいつらがクソなのはこの世界でも同じようだ。
「どのみちロクな奴じゃねーんだ！」
「見つけ次第殺るぞ！」
「……聞き捨てならねえなあ」
俺はそいつらの前に出て行きガンを付けた。殺気だってる連中は俺をも殺しかねない雰囲気だった。写輪眼の幻術で押さえても良いが、それでは解決にならない。
「なんだてめえ！　ぶっ殺されたいのか！」
「おかしな話をおかしいって言っただけだろうがよ。前から変だと思ってたんだ。あいつは四代目の子だろ？　この里は英雄の子供を殺すのかよ？　この様子じゃ四代目も邪魔になったから殺されたのかもな」
「ガキが何を言ってんだ!?　何も知らねえ癖に！」
口にしてはならない掟だけに、さしもの連中も一度は黙った。だが緊迫した状態だというのに、次々に喋る奴が出て来る。

「何もかもは知らねえ。だが判ることはあるぜ。三代目はあいつの事も英雄だと言ってた。要するにあいつ自身が封印なんだろ？　やっぱりこの里は英雄を殺すんだな」
「そ、それを何処で!?」
「しっ。それ以上は喋るな！　誰が聞いているか判らん」
　三代目から聞いたってのは本当だ。ナルトと仲良くなかった事もあり、後見役みたいな三代目の方からやって来たのだ。あいつが孤立している事もあり、心情的にもフォロー策としても話しておくのは妥当だと思ったのだろう。
「待て、こいつ……うちはだぞ！　聞いたことがある。裏切者に弟が居るってな！」
「ああ、そういえば……。ふん。一族の仇討ちもできずに……」
「お前らがイタチの事を語るな！」
　話の矛先がこちらに来たので、思わずこちらも殺気返しをしておいた。おかしいと思ったのは、人相の照合が速過ぎる。流石に万華鏡写輪眼どころか、説得中に写輪眼も開眼させてない。気が付く速度がおかしいのだ。
　他にもナルトの試験や、秘密裏に探している禁術の書なのに真相が漏れている事、そして今回の人物照合。それらを総合すると一つの推測が浮かんできた。だが、今回はソイツを逆用させてもらうことにした。
「良い事を教えてやるよ。イタチは暗部。それも『根』に居た。その事を良ーく考えろよ

！」

「はっ！　何を言ってやがる。暗部くらい……根だと？」

「根、根がどうしたってんだよ！」

　話の中心に居た奴ではなく、その傍に居た奴がうろたえる。そして脇を伺う表情はどこか懐疑的だ。騒ぎに乗った物の、流石におかしいと本人も気が付いたのだろう。

「根はそんなに甘い場所なのか？　あのダンゾウとか言うおっさんがねえ？　それともこの機会に、英雄の息子も厄介な部下も殺そうってのかもな」

「……そ、そんなことは……ない」

「おい。ガキに付き合うな。同じガキならあいつを探すぞ」

「あ、ああ……」

　強引に話を打ち切りやがった。怪しいなんてもんじゃねえぞ。だが……ナルトが心配だし、書を盗み見るチャンスは欲しいしな。適当に迂回しながら森を目指すことにした。ナルトに同情的だった俺を付けているかもしれないからだ。

　まあそんな中途半端を繰り返した俺が、肝心な時に間に合うはずはないんですがね。

「……ようウスラトンカチ。合格したみたいだな」

「あはは！　見ろよコレ　オレに似合うってばよ！」

　グッタリした表情ながらナルトの顔色はスッキリしていた。原作よりも多少赤い髪

だが、その上にはもちろん木の葉の額当てがある。どうやら原作通りに行ったようで、俺はプレゼントをくれてやることにした。

「ホラよ。祝いだ」

「花？　こんなモン食えねーぞ？」

「ラーメンと一緒にすんなよ。奢ってやるからお前も供えに行こうぜ」

「……墓参りか。サンキュ」

親に忍者合格の報告に行くとしようか。その為に、いのに二組分ほど頼んだんだしな。

そして……俺はこの後、とんでもない勘違いに気が付いた。よく考えてくれ。サクラは男だったのだ。それが原作に起こす問題はどれだけある？　そして、最初に起きる問題は？

「え？　おん……な？」

「言ってなかったっけ？　オレってば女だってばよ」

「私とサスケが男でナルトが女ならば定型通りのスリーマンセルだ。おかしなところはないが？」

ええと……男だと思っていた友人は、ガサツなだけの女の子だったようです。ボーイッシュって言うのかなあ……。

こんな感じで色々と齟齬のある世界だが、原作知識がどの程度使えるのか、そして今後も上手くやって行けるのか心配でならなかった。願わくば楽しい人生になりますように。

紆余曲折あったけど修業は終わり！

第七班結成におけるサバイバル試験、その始まりだけはあまり変わらなかった。
カカシがナルトを挑発してクナイを投げようとしたところで介入開始する。用意するのは写輪眼で見せる単純な映像投射型幻術を二つ。一つは俺の指の先に絡めた鈴、もう一つはカカシのズボンを鈴無し姿に上書きするだけだ。
「そう慌てんなよ。まだスタートは……馬鹿な、鈴は此処に……」
「こういうべきかな？　そう慌てんなよ。ただの幻術だろってよ」
ナルトの後頭部に奴自身のクナイを突き付けさせる。その動きを止めようとして後追いで幻術をカカシに見せたが、実際には指先の映像を見せたいだけだ。
「ちっ。本当は離れたところで驚かしたかったんだがな」
「サスケ……お前。既に『開眼』しているな？」
原作知識でフライングした内容だが、写輪眼は一度消して驚かす悪戯として発言しておいた。だが、恐るべきことにカカシはたったそれだけの仕草で、俺が写輪眼を開眼している事に気が付いたようだ。
「咄嗟に幻術を思いついたセンスは良いな。だがよく考えて使わないとあまりにも多く

の情報を敵に与えてしまうんだよ」
　カカシはそこから目を閉じて一気に距離を空けたが、流石に写輪眼があると知っておどけた動きをする気はないのだろう。
「よーし！　今度こそドベなんて言わせ……」
「落ち着けナルト。そんなだから平均なんて嘘に騙される。忍者なら裏の裏を読むんだな」
「どういう事だ？　先生たちは確かに能力を均等に揃えたと」
　張り切って突撃しようとするナルトを言葉で制する。原作では断言されていないが、あえて説得する為に利用させてもらった。おかげでナルトだけではなく、サクラも相談モードに乗ってくれたようだ。
「本当に平均だったら猪鹿蝶の三人組を合わせるか？　そりゃ代々あんな感じの体形だがな」
「言われてみれば……知ってたってばよ」
「キバ達も怪しいか。感知系三人というのは異様だ。上忍が自分の得意分野で揃えたのか」
　ナルトは相変わらずだがサクラの方は言いたいことに気が付いてくれたようだ。カードゲームの遊び方の中に袋を開けた後、欲しいカードを順番に取っていくデッキ構

築ルールがある。あえていうならそんな感じで作為的に振り分けたのだろう。
「でも、結局どういうことだってばよ？」
「お前がドベって言ったのは煽りだってことだ。おそらくはこの試験もな。考えても見ろ。下忍が簡単に上忍に勝てたら苦労はしねえよ。飯や煽りは全部焦らせて個別に挑ませるためだ」
「なるほど。連携すべき所を分断すると同時に、それぞれの能力を見る気だな」
　……なんというかナルトと違って、サクラは一を語ったら十を悟るので怖い。このサクラさんってば、実は俺と同じ転生者じゃねえのか？　まあ今は心強い限りだがな。
「それぞれの得意技と忍具の余裕度合いを聞いておきたい。俺は火遁が少々に、封印と時空間忍術が多少。見ての通り巻き物に色々仕込んでる」
「影分身には自信があるぜ！　風遁がちょびっと？　あと腹が減ってる」
「……格闘・白兵・投擲を一通り。それと瞬身を多少。ただ忍具は通常任務用だ」
　サスケ奪還編を参考に可能な事と装備を確認しておいた。連携して攻め立てるとしても、何ができるかを知っておかねば意味がないからだ。しかしこのサクラさんは非常にストイックで強そうですね。実は俺らの中で一番、二部の強さに近いんじゃねーの？
「装備品はここから見繕ってくれ。ナルトはどうしてもってんなら兵糧丸でも食っとけ。今から少し作戦を考える」

「よっしゃ！　これで空腹が満たせるぜ。あんがとよ」
「忍具は助かるが……勝手に食べて良いのか？」
　サクラは何故か二部を意識して用意した忍刀とかを見て、面白そうにまとめて持って行った。クナイや手裏剣もあるので相当な量だ。ナルトに関しては無視しておこう。
「裏の裏を読めって言ってたろ？　あの弁当ならともかく、忍具なら構やしねえよ。それに……今のカカシは目を閉じてるはず。こっちが風下だから問題ねぇ」
「了解だ」
　写輪眼に速攻気が付いて目を閉じたのは恐ろしいが、それは再不斬がやった失敗と同じ事をやっている。カカシが気が付かない筈はないが……もしかしたら俺に作戦の組み合ってを教えようとワザとやってる可能性もあった。
「よし。だいたいで良ければ思い付いた。おそらくは連携戦闘と個性が見られれば問題ねぇはずだ。二人とも耳を貸せ」
「んー」
「聞かせろ」
　作戦としてはオーソドックスだ。それぞれの特徴を出しつつ、互いに連携して連続で繰り出していく。重要なのは順番と、それぞれが互いの牽制になる事だ。ガチの殺し合いじゃないし、意表を突くのは一度で良いだろう。

必殺技を言う言葉がある。そんな物は存在しないが、そうあろうと組み立てを考えて理想形を目指すコンボであり連携こそが必殺への通り道だ。たとえナイフでもクリーンヒットしたら人は死ぬ。相手の防御をこちらの攻撃で消費させ、その次の攻撃を防御させなければ勝てる。

「「いくぜーー！」」

「分身じゃなくて影分身？　驚きはするけど馬鹿正直に来てもお前の実力じゃ無理だよ」

まず最初に突っ込むは原作通りナルトだ。川に落ちてからやるのではなく、最初から一斉に突撃する。ただしコレはただの囮である。カカシの思い通りに動いて奴の一手目を消費させる為でしかない。

「サクラ！　行くぜーー！」

「喋るな。気づかれた」

「全部偽者？　何……っち！」

サクラが投げつける無数の手裏剣とクナイ。それをナルトの風遁が後押しして、一気に加速させていく。連続攻撃でカカシに息を吐かせない構えだ。しかも一発一発が必要に強力で、クナイなどは木に穴をあける勢いである。

しかし弾ける煙幕と共に奴の姿が消える。流石に変わり身を入れる暇はないという事だろう。だが俺の眼はソレを追尾することができた。二つの加具土命は俺に熱源探知を与えてくれている！

「見えてるぞ！　火遁……豪火球の術！」

「ナルトの風遁と言い、もう火遁まで。だが……二人で来るんだったな。それなら当てられたかもしれん。所詮一人じゃそこまでだよ」

ここで放つ豪火球は範囲を強化したモノだ。こっちに来て確信したのだが、忍術は印の組み合わせで色々と強化ができる。再不斬の非常に長いアレは流れる水を利用したり、範囲拡張・威力強化などを織り交ぜた結果だと思えば納得できようという物だ。パソコンで言うとＥｘｃｅｌの関数みたいなもんだな。

「火遁は風遁と混じり合う事でより能力を……」

「だろうな。俺が本命ならそうしたさ。俺が本命ならな！」

火遁と風遁を同時に使えば威力も範囲も強化される。だが俺は本命じゃない。牽制でありカカシに勝利を確信させ、心の動きを縛る為の『偽りの本命』だった。炎は視覚・嗅覚・聴覚を誤魔化す為でしかない！

「ナルトか？　いや、違う……この居合いはサクラか!?」

「獲った」

ここまでの段取りはカカシの動きを消費させ、同時に臭いと音をかき消す為のものだ。こちらの行動が全て攻撃であると錯覚させて、サクラがチャクラで足場を作り、ナルトが放つ二回目の風遁で加速を掛けたのだ。そして攻撃はリーチの長い忍刀で行ったという訳である。

「合格。本当は連携をすれば認めるつもりだったんだが、お前たちは良くやったよ」

「やっりー！　これは槍だけどな！」

「……」

カカシは溜息を吐いて笑い、ナルトは予備武器と罠を兼ねて入れておいた短槍を振り回す。サクラがその様子を見て黙っているのは、冗談をつまらないと思ったのか、それともツボに嵌ってしまったのだろうか？　もし笑いを堪えているのだとしたら、俺たちの中で卑劣様に一番似ているのはこいつかもしれない。

その後は波の国編までは下積みしながらみんなで修行モードだ。木登り修業はもうやってしまったので、サクラが見せたチャクラの足場であるとか、俺が用意したような装備の巻物をみんなで覚えたり相互共有するとかな。

そうそう、これが重要なんだが封火法印と影分身も覚えた。もっとも影分身はナルトほど使いこなせないので、カカシと再不斬が水分身を使ったら火遁分身でも編み出そう

と思っている。今のところの成果としては、火遁を使うから消火用に覚えたいとせがんで教えてもらった封火法印の効果が大きい。なにせ新術をようやく『創れる』からだ。

「ようやくスタートだ。今は天照には遠くとも一つずつ積み上げないとな。問題は……再不斬戦までに幾つ用意できるかだが」

さて、ここから俺専用の新術を披露しよう。感覚的には二つの加具土命を組み合わせた炎遁のバリエーションと、それを『リサイクル』するというものだ。

炎をリサイクルできるはずはないって？　それは他の奴に言ってくれ。俺の瞳術は地味で微妙だが、二つ連ねると新しい境地が見えて来る。

「まずは防御を兼ねた攻撃だな。雷影戦で使ったあの状態をモデルにしてっと」

右目の加具土命で自分の周囲を覆う螺旋状の縄を作り上げる。黒炎は燃やし尽くすほど出力は高くせず、瞳力の消費と失明進行を抑えておく。そしてここからが真骨頂。左目の加具土命……軻遇突智と名前を付けた方で性質の変化を実行。俺にとって加工し易くチャクラを変質させる。

さあ、ここからが勝負だ！

「行くぞ！　封・火・法・印！」

ワザワザ黒炎でやったのはこの炎は消えないという事だ。つまり封火法印で一時的に存在を消し、これを開封する事で爆弾のように利用できる。だが、それでは先に消費

するだけで応用性を欠く。だからこそ、左目の軻遇突智が重要になって来る。

「ここまでは成功だ。こいつをリストに登録して……」

長い巻物を用意してそこに封火法印を登録する。そして口寄せの要領で登録番号と内容を設定。これで自分の名前を登録者として記載すれば、口寄せによって何時でも再利用できるという事だ。

通常はまず封印する前に消えてしまうし、万華鏡で使った膨大なチャクラを制御できない。だが、軻遇突智の力で加工し易くしているので、他人はともかく俺のチャクラに適合している。少なくとも俺と俺の血族は利用できるだろう。

「二つの加具土命を使った須佐能乎モドキ。そうだな……火産霊とでも名前を付けておくか」

加具土命・軻遇突智・火産霊。どれも同じ神の名前であり、炎の霊威そのもの。不浄の炎であり同時に浄化の炎である。まあ須佐能乎がロボットと言えるほど強いのに対して、武器レベルだけどな。

ただ参考にしたのはカグツチという名前に関する一説だ。カーンと澄んだ音を立てて火花が散り、『ツ』と音を立てて得物を振る。『チ』は確か霊とか神の古語だったと思う。感覚的には北欧の『ガングニル』とかがガンガン音を立てて火花をあげて貫く。なのと大差はないのだろう。火山とか鍛冶とかを民俗学的に絡めると、もうちょっと変

わって来るのかもしれないが。

「こいつが上手く言ったら、次の型に行くか。原作と同じ雷遁を速攻で覚えられるとも限らねえし、火遁モードか炎の剣、あとは範囲攻撃かな」

炎を強化する火遁モード、白兵戦用の炎の剣。もちろん火遁分身を覚えたらそれも登録したい。ある意味、範囲攻撃は今すぐ登録できるが必要性から言えば低いものだった。

「とはいえ沢山作っても使いこなせねえし、消耗が低いと言っても視力も落ちるからな。パターンは十もあれば良しにしとくか」

型を増やすのは簡単だが、使いこなせなければ意味がない。そういう意味でやはり範囲攻撃の優先度は低いし、何度も使いそうな火遁分身や炎の剣の方が有効だろう。特に火遁分身は影分身のバリエーションである為、登録すれば口寄せレベルのチャクラで実行可能なのは大きかった（経験値は吸収できないが）。

そして此処まで考えてメモ帳を見比べた時、ようやく意味の無い考えに思い至る。

「手裏剣影分身の応用で数を増やせば良いよな？　範囲型要らねえじゃん。それだったらまだ結界で仲間を守ったり、敵を閉じ込める方が向いてるよな」

何というかできるからと言って無制限にやっては駄目だな。こうしてメモを見比べる以上に、ジックリ考えて作らないと。イタチと会った時には失明してましたなんて洒

落にもならない。こうしてみると考慮すべきことは多かった。炎の剣だって原作の千鳥で造った剣を参考にしただけで、剣ではなく扇や籠手でも良いはずだ。ここから先は熟慮が必要だろう。悩み過ぎて進まないなどという事が無い程度に考えておこう。

そして……。

「サスケェ……それ何やって、ん、だってばよ」

「喋りながら話すな。印の省略を覚えて片手印とかできないかと思ってな。前から思ってたんだが、結局うまくいかねえ」

「省略？」

「片手印？」

波の国へと向かう道すがら俺が四苦八苦してるとナルトがツッコミを入れる。面白いのはサクラとカカシで目の付け所が違う事だ。

「忍術用の印って、必要なものと余分なものがあるだろ？　火力を上げたり範囲拡張で増やせるなら……逆にチャクラ・コントロール覚えたら不要なのを減らせないかってな。片手印はその応用系だよ」

「へー。そんな印もあるのかーって、みんな知ってたの？」

「ああ。しかし印を減らすというのは面白いな」

「減らさないでも片手で出来るだけでも違うっしょ」

まず『チャクラを練り込めばね練り込むほど強くなる印』は術によっては必要ない。また『精度を上げる為の印』なんかは自分が上手く成ったり、チャクラを捨てる気で行けば不要だろう。他にもこうやって使うモノだと教えられている中に、不要な物は結構あるはずだ。大蛇丸とか後半のサスケは結構多用してるしな。呑気に聞いてるナルトに対して、サクラとカカシは微妙に違う反応を返した。

「まあお前らにはまだ遠い技術だよ。俺でもそんなには中々お目にかかったことはないけどね」

「ってことはカカシ先生使えんのかよ!?」

「……ナルト。お前意外と鋭いな。俺もそこまでは気が付かなかった」

ナルトの何気ないツッコミに相乗りして、この話を利用する。おそらくはあの術の難しさをネタにするだろうし、しなければ誘導するまでだ。……しかしこう繋がるってことは、さっきの片手印はあの術を知っているからこそか。

「そんじょそこらの忍びにはまず使えないよ。生兵法は怪我の元って言うでしょ?」

「という事は火影クラス術ってことか。判った。目標にはするが迂闊には真似しねえ。それでいいだろ?　見せてくれよ」

「そーだそーだ!　ここまで話したんだから教えてくれよ!」

「……」

話を誘導しているとサクラが秘かにナルトへ同意している。こいつ結構ムッツリだなとか思いつつ、カカシを説得しようと七班全員で迫る。

「判った判った。とはいえ俺にもできるのは真似事だけだぞ？　四代目も完成まで至っていなかったからな」

「四代目の技なのか!?　早く見せてくれってばよ！」

「……落ち着け、ナルト。気持ちは判るけどな」

ナルトがどういうつもりで螺旋丸の事を習っていたのだろうか？　自分の出自を知れば宿命だと思ったかもしれないし、知らなくとも里の英雄の術だとは思っただろう。その場合でも容姿が似ているし、自分と重ねていたかもしれない。

「すごかったてばよー。あの螺旋丸っての！　あれで未完成だなんてよ！」

「……サスケ、どう思う？」

「どうしたもこうしたもねえだろ。上には上が居るって知れたし……コピーの限界も見れたからありがたい限りだぜ」

ナルトが感激するのはいつもの事として、サクラは略印とか片手印に絡めて聞いてきたようだ。最初にインスピレーションを沸かせたことになってる俺に聞く辺りちゃっかりしている。

「コピー？」
「そういえば真似事だっていってたな」
「コピー忍者のカカシって有名らしいぜ？　ただコピーってのは、未完成部分や不要な追加印に関しても丸っとコピーするみたいだ。まあチャクラ配分やコツごと真似れるなら十分なメリットなんだけどな」
　千の術をコピーし、必要な時に組み立てられるのが一番の強さだ。しかし不要な部分をコピーしたり、十分に強力な術だと認識した場合には弄りもしないのだろう。その点は大蛇丸やカブトが穢土転生を『僕の考えた最強軍団製造術』としか思っていないのと似ている。

　余談。話が飛ぶが今後を先取りと別の術へ応用する為、『穢土転生』に関する考察を述べておこう。まず卑劣様によるとこの術の本質は『情報の抜き取り』と『リサイクル』こそ本質らしい。色々な応用をする為の基本形でしかないということだ。
　そして重要な点を俺は考察してみる。
（この術……本当に一つの術だろうか？　そうでないなら都合良過ぎる部分に説明が付けられる）

　印がそうであるように、複数の術の複合系ではないだろうか？　大蛇丸たちは最終系の印と法陣を覚えて、それが短縮形であると気が付いていないのかもしれない。複数の術が組み合わさって一つの結果を生み出し、知られている印は必須部分が露出しているとしてもおかしくはないのだ。
（肉体構築とリサイクル部分はゴーレム系が近い。生贄として人間一人だけってのは、あくまでエネルギー確保として『最上級の犠牲』を用意したに過ぎないと考えればどうだ？）
　ファンタジーで定番のゴーレムだと思えば、穢土転生の効率的過ぎる部分が見えて来る。最上級のゴーレムは元から再生するとされる存在だし、穢土転生とよく似ている。そして儀式魔法に生贄というのは、それこそファンタジーの定番ではないか。
（大蛇丸が最初に使った『口寄せ、穢土転生』は単純に儀式で契約した穢土転生体を呼んだだけだ。残るはどうして『情報体』が無いと使えないのか、そして『魂は何処にあるのか』という疑問だ。これも降霊術の応用だと思えば不思議じゃない）
　つまり穢土転生体とは情報体を設計図にしたゴーレムであり、降霊術で魂を呼び寄せコントロールを代用させているのだ。その降霊術自体にも情報体が関わっており、何処にあるかもわからない魂を、情報体をベースに一本釣りするという段階的な物だ。ただ一系統の印と、ただ一つの情報体しか使わない事になっている。それが穢土転生という

忍術を欺瞞しているのだ。この術はおそらく二つから三つより成る複合忍術なのだろう。

（他の話から飛び火するとは思わなかったが、おかげで穢土転生のシステムにアタリを付けられたな。知りもしないのに真似ることなんざ無理だが……俺が失敗している『あの術』を完成させるには良いヒントになってくれたぜ）

どうしてこのタイミングで穢土転生に付いて考え始めたか？　そりゃ頭が冴えている時は指定できないからで、トイレや風呂の中で素晴らしいアイデアを思いつく学者先生と同じってこともある。だがもう一つ、重要な事は俺が自分専用の術の開発に行き詰っているという窮地だった。

（複合術！　他の術を組み合わせりゃあ良いんじゃねえか。よく考えたら封火法印と口寄せ混ぜたのも似た理屈だしな）

先に行っておくと大見え切って挑んでいた『火産霊』系の術開発に失敗していた。正確には後一歩だったのだが、都合よくコントロールできなかったのだ。呼び出せるだけで定型化し過ぎてしまっていた。これではカードゲームのように特定の状況には使えても、幅広い応用など不可能だろう。まあ黒炎を再利用できるだけで便利と言えば便利なんだが。

（再不斬戦も控えているが、終わったら中忍試験だ。基本形の開発自体は終わってるん

だ……上手い組み合わせを思いつかねえとな）

今の火産霊はカカシがやった真似事の螺旋丸と大して変わらない。術そのものが未完成の段階でコピーしたままだし、そこから風遁螺旋丸みたいな術には発展できないからだ。加具土命を知っているマダラが見たら情けない劣化品と呼ぶ可能性すらあった。しかし今回の件で術の複合をヒントにすれば、完成も遠くないだろう。

コピー忍者！　それはカカシのことだけではなく！

波の国への道中、依頼主の爺さんは殆ど喋らない。
周囲を警戒しているのと難易度詐欺がバレないようにしてるからだろう。五影の話から忍者対決の話になった時、所々違和感が出始めた。そして例の水たまりが出た時……。
「サスケ何見てんだ？」
「……いや……国といやあな。渦の国ってのがあったのを思い出しただけだ。そこには渦潮隠れの里があったんだが……」
俺が目線を動かした事にナルトが気が付いた。本当はカカシが見た光景を自分でも見たかっただけだ。それなのにコイツはなんで俺の視線変更に気が付きますかね。仕方ないのでナルトに関わるセンシティブな話という事にして誤魔化す事にした。
「渦……それってもしかして……」
「そうだよ。だから言いたくなかったんだ。余計な事を口に出させやがって」
サクラの他に爺さんもナルトを見たということは、自然な流れで話を変えられたようだ。もしかしたら渦潮隠れの里を知っていたのかもしれないが、敵に気が付いたことは

誤魔化せただろう。
「なあなあ。渦潮隠れの里ってどんな場所だったんだ？　教えてくれってばよー」
「教えてやるからまとわりつくな……。まあ、あんまり知ってるわけじゃねえけどな」
　興味があるのはまあ当然だろう。ナルトは俺の袖を引いて滅びた里の事を知りたがった。正直、この後の展開を知らなかったら本気で邪魔に思っていたかもしれない。だが、流れからするとこの方が一石二鳥で一手分稼げるのだ。
「うずまき一族の里の他は大渦でもあったんじゃねえか？　詳しくは知らないが、うずまき一族ってのは千手一族の分家で、親戚っぽい所が生命力が強かったこと。そのせいかチャクラが多かったりコントロールが上手い奴が多かったらしい。コントロールといやあ封印術と金剛力だ」
「チャクラのコントロール……オレってば苦手なんだよなー」
「金剛力……桜花……」
　ナルトが食いつくのは当然として不思議とサクラも興味があったようだ。写輪眼で読んだ唇の動きから桜花衝の事を言ってるようだが、もしかして五代目ともう会ってるのか？
　更なる話を要求されそうになった時、頃合いと見たのか、さっきの水たまりから鬼兄弟が出現する。二人を一人と見せる姿で現れる辺り、小技とはいえ中々考えられた動き

だった。
「一匹目……」
「何っ!?」
「え?」
　鬼兄弟はそのまま流れるような動きでカカシを殺そうと動き、次のターゲットにナルトを狙う。そのままオレに連続で来ようとする当たり、中々良いコースだ。もっとも俺がカンニングしたせいで、台無しなんだけどな。
「二匹目と……」
「三匹目!」
「勘違いだ」
「サスケェ!?」
　鬼兄弟の攻撃に対しオリジナルの術を用意しつつ、幅の問題でナルトに急接近した。以前に言ったと思うが、新術は開発途中で失敗していてまだサイズ調整とかが効かないのが欠点だからだ。
「忍法・火産霊の術。一の式!」
「馬鹿な!　こんな火遁知らんぞ!?」
　ナルトと強引に接近しつつ、そのまま自分の周囲に黒炎で造られた縄を出現させる。

威力を下げているので延焼するほどではないが、周辺を焼きながらチャクラを放出するので鎖を弾くくらいは可能だ。
「黒い縄が鎖を弾いてるってばよ！」
「鎖にもチャクラを練ってるのか？　裏目に出たな！　この黒縄炎は俺を守る盾であり矛だ！」
　イメージしたのは須佐能乎による攻防一体の力だ。威力も強度もあそこまでないが二つの加具土命を使って作り上げてしまえば、口寄せだけで成立するのでコストの点では申し分ない！
「サクラ、そっちは任せた！」
「……了解」
　黒炎を消して手裏剣とクナイを取り出し、原作と同じ流れで相手のチェーンソーを固定。ナルトを守る手間と相手を蹴る手間を短縮し、サクラに依頼主を守る指示を出すことで大幅に有利な状況を引き寄せた。
　しかし原作知識によるカンニングでおごってしまった事。小さくとも介入しているのに起きることは全て原作と同じと思った事が、俺に油断とミスを呼び起こさせていた。
「サスケ！　挟み撃ちだってばよ！」

「っ！　くそっ。了解だ！」

それはナルトの成長を無視していたことだ。原作での出会いよりも先に一緒になってバカやって修行の真似事までやってた。それなのに俺はナルトがちゃんと戦えることを考慮せず、原作と同様にビビって動けない物だと思い込んでいた。だからもう一人を俺が倒せばそれでコンプリートだと思っていたのだ。

「この位置だとサクラやジーさんに当たっちまうってばよ！」

「判ってる！」

一瞬だけ手裏剣を投げまくれば間に合うかと思ってしまった自分が居るが、意外にも冷静にナルトは同士討ちの危険まで考慮していた。後ちょっとでノーミスクリアして原作よりもマシな状況に出来たと思う自分が恥ずかしい。自分が速攻で突っ込んでいれば、ナルトに怪我をさせなかったはずなのだ。

「痛っ……！　でも、これで終わりだ！」

「寝ていろ！」

反撃の爪はナルトの方へ。よりによってどうしてそっちに行くのかと焦ったが、よく考えなくても当然だ。さっきの黒縄炎を考えたら俺に攻撃するのは意味がない。むかつきながらブン殴り八つ当たりまでしてしまう。

「オレ抜きでよく頑張ったな。咄嗟の連携にしちゃあ上手くできていた。こいつらは

……霧隠れの中忍ってとこかね？」

ここでサクラの援護へカカシが出てきて状況終了。原作と違ってナルトへの煽りと反省を求める声が無く、爺さん相手に色々と愚痴を言っている。

「ナルト、手を」

「こんなん舐めときゃ直るってばよ」

「ダメだ。こいつらの爪には毒が塗ってある。早く傷を開いて毒血を抜かないとな」

「……っ」

サクラがナルトの手を取って治療を始めるのだが不思議と腹が立った。ノーミスクリアに失敗した事か、それともゲーム感覚で仲間の意思を無視してしまったことが原因なのか。カカシの説明を聞きながら苛立ちを抑える。

「なんだか恥ずかしいってばよ。でもサクラって医療忍術覚えてたんだな」

「それならサバイバルの時に言ってる。……これは姉さんの看病用に教えてもらった程度」

「そういやサクラには姉が居たっけ。確か綱手姫でも……」

「……」

傷口を切り開いたがチャクラで毒抜きするほどの術はない。だから口を付けて吸い取るわけだが、ますます腹が立つのを自覚する。原作との差異を確認できたのにムカつ

いたのはどうしてだろう？
（原作との差……。そういや原作だとカカシが毒抜きしてたな。……俺には口を出す資格はねえ）
　カカシの功績をサクラが奪ったことに腹を立てたのだろうか？　むしろ自分こそが本物のサスケから功績を奪って成り代わっている。そんな思いが腹を立たせていたのかもしれない。
「そういやさっきの凄かったな。あれが新術ってやつか？」
「……まあな。とはいえ前に言った通り全然未完成だ。あれじゃ見る奴が見たら何をやってるか丸判りだからな」
　ナルトの問いに頷くが、完成はまだまだだ。巻き物の登録番号までは簡略化することができたので、何番目の術かは見破れない。だが口寄せという時点で『未知に警戒する』なんてことは当たり前だ。結界か何かで時空間忍術を対策されたら一発で使えなくなるしな。
「他にも……。あー。最初、守ってくれて悪いな」
「気にすんな。……次に俺の反応が遅れたら代わりに動いてくれりゃあいい」
　ナルトが意外にも素直にお礼を言ったので俺の方もムカつきが少しだけ収まった。どうせもう終わったことだ。次から同じミスはしなきゃ良いし、転生までしたのにこい

つらの決断を無視するのは駄目だよな。

　その後は原作通りマングローブを抜けて波の国へ。どこもかしも水ばかりで霧隠れにはホームグラウンドのようなものだ。まったくよくもまあ原作では無事に解決できたものである。

「全員伏せろ！」

（来たか！）

　カカシの忠告と共に林の向こうから飛来する大刀・首切り包丁。原作で見た光景ではあるがこれほどの得物を投げ飛ばすとは、忍びらしからぬ体力だと最初は思っていた。後にチャクラ・コントロールで剛力を出せると知りはしたが、鬼人・再不斬の個性としてはよく表している。

「お前らは下がって居ろ。こいつはさっきの奴らとはケタが違う」

　原作通りの煽り文句の後でカカシは写輪眼を開放する。俺が既に見せていることからナルトが疑問を覚えたりはしない。

「卍の陣だ。タズナさんを守れ。お前たちは戦いに加わるな。それがここでのチームワークだ」

「でもよ、でもよ……」

「言うこと聞いてろ。このウスラトンカチ。バックアップが隠れて居たら厄介だ。それと……」
「私たちがバックアップになる」
ナルトも口では加勢したがるが俺やサクラの言葉で引き下がった。相手の動きに合わせて即座に護衛の陣を敷く。
「あそこだってばよ!!」
「だが水の上?」
「水面歩行の術だな。時間があったら修業しようぜ」
援護し易いように俺とサクラは手裏剣を持ちナルトは印の準備を始めるが、影分身……いや風遁か。この後は霧隠れの筈だが……。
「忍法・霧隠れの術……」
「消えた!?　でもこのくらいの霧なら……」
「待て、ナルト。飛ばすのは後の方がいい。奴が図に乗った所で『組み立てた』方が確実だ」
作戦的にも霧は消せないと思っている所で、一気に消し飛ばした方が速い。それともう一つ、俺の目的からすると霧はあった方がいいんだ。
（さてと。水分身をコピーさせてもらいますかね。このレベルの霧ならカカシでも見切

れる）

　万華鏡写輪眼をオンにして相手の熱源とチャクラの航跡を追う。再不斬の印とそれを追い掛けるカカシの印。この両方を見落とすことはあり得ねえ。確実に記憶しつつ影分身との差異を確認。時間があるときに火遁分身を覚えておくとしよう。

「……終わりだ」

（こいつも水分身。瞬身を使う段階で仕込んでたってわけだ。本体はあそこだが危険地帯に飛び込ませるにゃあ分身は便利だよな）

　再不斬が動き始めるが、この段階で既に水分身。通常の分身と違い実体を持つのは影分身と一緒だが、チャクラを均等に分担する影分身と違い水分身はコスパが良い。何が凄いかって水遁最大の特徴は水そのものと追加印を使って、チャクラの消費が抑えられることである。

「来たぞ！」

「ホウ……。だが遅い」

「お前がな！」

　突っ込んで来るのに合わせて腰を落として依頼主を動かす。それが精一杯のところへ首切り包丁が迫り、カカシの水分身がその後ろに付けたのが見える。ここでの経験は水分身の使い方だが、再不斬の動きも凄い。

（写輪眼を使ってるのに動画再生で見るコマ落としのようだ。体術に使う緩急がスゲエ。伊達に鬼人とは言われてないってわけか）

漫画では判らなかった強敵の凄さ。ホンの小さな動きの中に沢山の経験とコツが詰まっている。それを造作もなく使う再不斬の経験は流石に忍び刀七人衆だ。それを追うカカシも凄いが、霧の中の戦闘という点で一手劣っている。

「終わりだ」

「スッゲエ！」

「カカシ！　そいつも水分身だ。本体は……そこだ！」

キョロキョロと動いて見せることで万華鏡写輪眼の力だとは思わせないでおく。手裏剣を投げつけて隠れて様子を伺う本体へ！　普通に放つ一枚と、水を跳ねて飛ばす石切り投げの二枚で追いかけた。

「なん……だと。いや、まさかこいつも……」

「ヒュウ♪　さすがは本家写輪眼だな」

「ベラベラしゃべるなよカカシ。まあバレて当然か」

一部始終を見れたので満足して原作介入。当然のように再不斬にも写輪眼だと見抜かれるが、カカシで慣れていたので俺も驚きはしない。念の為に防御用の術を用意するが無駄になりそうだ。再不斬は自ら後方に下がり水の上へいったん距離を置く。

「しかし騙され掛けたよ。だが二度も同じ手は通じない。さて、どうする？」
「フン。ここは水の上。オレの手の内だ」
　原作の流れを大幅にショートカットし、カカシと再不斬の水遁合戦が始まる。異様に長い水遁・水龍弾を放ち合い、周囲に水が満ち溢れ始める。
「嘘だろ……こんなことできんのかよ」
「異様過ぎる」
「前に言ったろ。追加印があるってよ。あの異様に長い印と、お互いに水の上に移動してるのはそのせいだ。見た目ほどチャクラも使ってねぇ」
　ナルトとサクラには新鮮だったのだろう。チャクラの消費を減らす印を入れ、そこに水が前提という印を組み合わせる。同じように範囲拡大・威力拡大などの印を組み、同様に水を前提とする印を合わせることで猛烈な術が組みあがるわけだ。卑劣さまに対する『水の無い所でこのレベルの水遁を』って台詞は増幅無しで強化しているのが凄いと思えば別におかしくはない。
「前にカカシが言ってたろ？　迂闊に術を使うとモロバレになっちまう。もっとも、あそこまで印が長いと何かあるって考えた方が速いけどな」
「なるほど。しかし術に寄りそうだな」
「なあなあ！　オレのはどうやりゃ同じことできるんだってばよ！」

サクラは同じことをするとしても長すぎるし水前提という事に難色を示していた。むしろナルトの関心ぶりが清々しいくらいだ。

「……読み取ってやがる？」

「っ!?」

そんな中で対決している二人の動きは変化し、次の術に変化していた。

「次は、むなくそ悪い目つきをしやがってか？」

「～っ!!　……フッ。しょせんは二番煎じ！　お前は……」

「お前はオレには勝てねえよ。猿野郎！」

原作の煽りを見ながら様子を見ていたが……印とは違うがあの動き、もしかしてあれも印の一種なのか？　そういえば霧隠れの時も妙なポーズだったが。だとしたらこれも良いデータだ。

「てめーのその猿真似口！」

「二度と開かねえようにしてやる！」

「水遁・大瀑布の術!!」

カカシが再不斬の口調を真似ながら術を放つ。そのまま互いの大規模水遁がぶつりかりあうが、先ほどのレベルではない水が飛び交う。その勢いはもはや津波と津波のぶつかりあいで、凄まじいというレベルですら生温い！

「うわっ!?　爺さん大丈夫かよ」
「そのまま爺さんを守ってろ！　誰か居た！」
「了解……援護は任せる」
　修業の成果かナルトが爺さんを確保に行き、サクラは自分の陰で二人を守った。俺は周囲を見渡し、風魔手裏剣とクナイを用意する。
「終わりだ……。今度こそ水分身じゃあるまい」
「何故だ。お前には……」
「カカシ！　バックアップだ！　援軍に気を付けろ！」
　カカシが再不斬に詰め寄った所で、忠告と同時に風魔手裏剣を投げる。ブーメランのようにタイムラグを利用。そこでカカシが咄嗟にクナイを投げつけ、俺もタイミングずらして投げつけておいた。
「再不斬さん！　全部は……」
「くそっ!!　もういい、撤退する！」
　仮面を付けた白に牽制で投げた風魔手裏剣。それを処理する為に、白は原作と違って再不斬へ飛ぶクナイの処理を行った。カカシの投げたクナイと俺の投げたクナイの両方を防ぐことができず、かなりの怪我を負いつつ即座に撤退していく。この辺りの判断は流石に速い。

「ヤレヤレ。助かったよ。お前らはとっくに一人前だな」
「それならこいつに言ってやってくれ。以前なら依頼人をほっといて飛び出てた」
「へへーん。オレだって成長してるんだってばよ」
「えらいえらい」
　意外だったのはナルトの急成長だ。要所要所で爺さんを庇ったり、射線などを配慮した位置に立っている。原作だと勝手に飛び出て勝手に怪我している印象が強かったが、俺が成長している様にこいつも成長しているのだろう。
「なんだったら今度、防御とか護衛用の術を覚えても良いかもな」
「いーじゃんいーじゃん。オレってばうずまき一族でチャクラスゲーかんな！」
　みんなに認められてナルトの嬉しそうな顔を見ながら、俺も今回コピーした成果に満足していた。

炎の式

チャクラを使い切ったカカシと負傷を追った再不斬の回復には時間が掛かる。
ゆえに一週間ほどの暫定休戦期間が生じている。数日の誤差はあれおそらく原作とさほど変わらないだろう。
「一週間……薬で無理やり抑える可能性を入れて余裕は五日ってとこか？」
「そんなところかな。お前らもう木登りはできたよな？　それなら臨界行と限界行をやろうか」
「何々？　何教えてくれんの!?」
臨界行というのはこれ以上はできない所で限度を超えて出そうとする努力だ。筋肉疲労を溜めて負担を増やし、更なる筋肉を付けようとするのに似ている。限界行というのは自来也が初期にナルトへやらせたチャクラの使い切り修行を思い浮かべれば良い。
「こないだ使った水面歩行の術は木登りの応用だ。自分を浮かせる程度にチャクラを一定量放出しそれの状態を保つ。お前らの実力で言えばそれだけなら簡単だよ」
そう言ってカカシは印を組むと原作の木登り修業の様にヒョコヒョコと水の上へ歩いていく。

「知っての通りオレはチャクラを使い果たして限界だ。ここから自然回復する最低限のチャクラだけで行動できる様に成れば、自然とコントロールが上手くなる。並行作業だってへっちゃらだ」
「スゲー水に浮かびながら分身や変化してるってばよ」
「水分身を水の上で造ったのを見たばかりだろうが。慣れりゃなんだってできるようになるさ」
　この作業は省エネと精密コントロールの為の修行。もちろんナルトにとっては九尾のチャクラを理解し易くする為にもなる。カカシにそのつもりはないのだろうが、おそらくこの修行そのものが木の葉の教えの一つなのだろう。
「じゃあまずは俺たちもチャクラを使い切らねえとな。……火遁分身の術！」
「よーし！　オレだって影分身しちゃうぞー」
　俺が分身二つにチャクラを分け与えたのに対し、ナルトはいつものように無数の陰分身を作り出した。そして次々に水面に移動し、制御しそこなってレミングの行進の如く入水していく。
「……ナルトは多過ぎ。並行作業なら何でも良い」
「サクラは盃で水芸か、器用だな。オレはいつも崖を片手で登るけどね」
　何というかサクラは無駄に凝り性だった。水の上にシャンパンタワーを立てて、上か

らチョロチョロと水を出している。使えることは使えるが俺の火遁ほどの才能はないので、どちらかといえばシャンパンタワー維持のついでなのだろう。

「そろそろ一体減らしても良いかな。封火法印！　駄目か……もう一回！」

「分身を封じても意味はないぞ？　咄嗟に連携取ることが前提だからな。再不斬の分身が厄介だったのは作戦を組み立てられたからだ」

仙人モードから還元する為の影分身を見た時、なんで予め増やしておかないのか不思議に思った事がある。分身を使う時にすべき行動を念頭に入れて分身すると、何をやるかを分身体が覚えている。慣れればナルトがやったように変化を同時に行う事もできるだろう。だが巻物に封印すると、意思疎通ができないので囮にしかならないのだ。

「難易度調整に丁度良い術が他に無いからだよ。まあデコイくらいにはなるさ」

通り一辺倒の事を答えつつ俺はこれから作る新術・火産霊の練習をしておいた。穢土転生を参考に三つ以上の術を一つにまとめる事にしたのだが、その一角に火遁分身を応用する。

呼び出した分身に即座の命令ができないのは知っている。だが、そこに穴というか思わぬ用法というか裏技があるのだ。できれば山中一族から伝心系の技をコピーしたいところだが、無理なら別にハンドサインでも良い。忍刀持って突撃するだけなら別に片手の指示で出来るからな。

（封火法印・火遁分身・伝心、そして二つのカグツチ。この五つの合わせ技なら、他人から見られてもバレることはねえ。ここでコントロールを高めて完成させてやる！）

分身体を何に使うか？　それは単純に武装ホルダーであり攻撃用の端末（ファンネル）であり、同時に強化用の素材でもある。ナルトが影分身と変化を同時進行している様に、火遁分身なら別に『炎の剣』や『炎の盾』に変化しても不思議じゃないだろ？　ナルトが手裏剣に化けるのと、最終戦の加具土命・手裏剣の中間だと思えば判り易いか。

（これでこの間の失敗を上書きできる。あの時は範囲固定だったからな。もし二人突破されていたら同時にやられてたし、水分身の再不斬には使えなかった）

鬼兄弟の時は狭いからナルトの傍に寄る必要があったし、逆に分身の時はジーサンを巻き込まないように離す必要があった。だがこの方法でなら、伝心で一言伝えるかハンドサインで変更すれば良いのだ。加具土命で作り出す武装と違って火遁分身なら万華鏡の使用時間が短くて済むからな。

五日を掛けてそれぞれにコントロールを強化し並行作業を覚えて行った。ついでに俺は新術を作り直し込みで三つまで増やした。サクラは追加印と省略印に興味を持ち、延々と一つの技にチャクラを練り込む修業を始めている。そしてナルトなのだが……。

「サスケー！　変化しながら歩けるようになったってば！　約束通り教えてくれよ！」

「判った判った。教え得てやるから買い出しに付き合え」
　原作を大幅にショートカットするのはやるのは自分ではなくとも楽しみではある。カカシに真似しないとは言ったが、修行の過程で実行してしまう『似て非なる失敗行動』ならば教えても問題ないだろう。約束通り防御向きの術を教えておこうじゃないか。
「久しぶりに買い物だってばよ！　カップラーメンだろ、袋麺だろ、あとあとお菓子を……」
「物価が高いからそういうのは諦めた方がいいと思うぞ」
　何しろこの波の国では物価が止まって大変なことになっている。流通の停止は商業の停滞を意味し、仕事が無いわ商品はないわそれなのに物は高いわと大変である。
「ウゲー！　本当だってばよ。なんでこんなにって……あー。どうにかならねえのかコレ？」
「直ぐに片付けるのは難しいな。まあだからこそタズナの爺さんが橋を作ってるんだが」
　どうやらガキ……イナリの言葉を聞いてしまっているのだろう。色々とナルトは苦い表情で何かを思い出すようにしている。おそらくは親が居ないとか処刑された話を、自分の事に置き換えてクヨクヨしているのだ。やめろよな……うちはの心は硝子だぞ。
「例えばこの旨そうな魚。俺だったら十倍の値段で売れる。だがそれは木の葉に持って

行く手段があるし、加工するための物を揃えられるからだ。おっちゃん、店先借りていいか？」

「……買ってくれるなら問題ないよ。汚すんなら多めに払いな」

俺は写輪眼で魚屋のおっさんの動きをコピーした。皿の上に丁寧に刺身を並べ、次に手持ちの薬草から香辛料として使える物や薬味といった物を並べて行く。

「ほう……小僧やるじゃねえか」

「おっちゃんの真似をしただけだよ。あんたが上手くなきゃ真似したってマズイだけだろ？　それでだ、この技に値段を付けてくれる人がここにはいねえ。俺以上の名人がここに居るってのにな」

「よせやい。わしは息子と大してかわりゃしねえよ」

まんざらでもなさそうな魚屋親子を無視し、ラップを掛けて保存できるようにしておく。後で封印……いや刺身は少し寝かせる方が旨いんだっけか？

「ここの魚なら一流の料亭に持って行っても問題ねぇ。早飛脚を雇えるなら木の葉にだって持っていける。逆にあっちからこういった薬味やなんかを持ってくることもな。……おっちゃん、これの半身を戻したらまけてくれるか？」

「そっちの香辛料や薬味も置いて行ってくれるならな。全然入って来やしねえ」

「スゲー！　一気に値切ったてばよ！」

正確には値引きさせたのではなく、交渉で香辛料や薬味を代価にしただけだ。写輪眼でコピーしただけなので刺身の技は魚屋と同レベルだしな。
「さっきも言ったが橋ができれば何とでもなる。だが俺らが運んでも無駄だぜ?」
「へ?　なんでさ。そりゃ任務の途中だからやれないけどよお」
次の店に歩きながら話しているとナルトが首を傾げた。まあ気持ちは判る。俺たちだけでなく、腕利きの忍者が何度も往復すれば、物は売れるしガトーだって戦力が増えてそうで焦るだろう。だがそれではダメなのだ。
「自分で考えてみろよ。今回はいいさ、お前から教えてくれっていったからな。だが他人に偉そうに説教されて、お前は気分良いか?　俺だったら即座に反発するね」
「あー。でもサスケの言う事は大抵当たってるし……。いや、でも駄目か。腹が立つってばよ」
原作と違ってもっと前から修行し合う友人だし、今はナルトがアイデアを訪ねてきた。だが俺たちのように我が強い性格だと、セッキョーほど嫌な物はない。それが正論であればあるほど、そんなことができればやってみろと言いたくなるのだ。もちろん実行されても反発するけどな。
「だからこそ……か。今回の任務、なんとしてでも成功させようぜ!」
「その意気だ。よし、コレとコレでいいかな」

ナルトの決に頷きながら、買ったのは自来也が用意したのと同じゴムボールだ。想像した者も居るかもしれないが、これから螺旋丸の修行を始める。ただし、成功例ではなく第二段階の失敗例を目指すだけだ。

「なんだ？　キャッチボールでもすんのか？」

「ちげーよ。チャクラの放出を常にこの表面とか中でやるんだ。渦が造れるならどっちでもどっち向きでも良い。両手でボールを挟んでっと」

最初は気にもしてなかったナルトだが、渦という単語を聞いて興味を示したようだ。早く続きを言えと目が訴えている。

「表面でやると切り傷が出来そうだから、できれば中の方がいいな。最初は外に出ても良いから馴れておき、少しずつ中に移していけ。上手くいくとこうなる」

「うわっ!?　凄い風だってばよ!!　サスケも風遁できたのか!?」

ボールを両手で挟み、チャクラを放出させあって乱回転させる渦を作り出す。俺がチャクラを飛ばしているだけでこれなのだ、ナルトのアホみたいな出力でやったら大変なことになるだろう。もし風遁を練り込もうものなら、凄まじい嵐になりかねない。

「せっかくだからこれに火遁を混ぜてみるぞ？　お前にはまだ無理だから、先に完成させてこれは第二段階だな」

「炎の大渦が！　色が付いたんで判り易いってばよ」

　ここは原作と違うが、一朝一夕にはできないので良しとしておこう。あくまで将来に、風遁・螺旋丸を覚えるための布石だ。
「あー。全然できねー。どうやってやるんだってばよ！」
「あのなあ。俺だって時間が掛かったんだぞ？　無理に決まってるだろうが、このウスラトンカチ。……しょうがねえ、手を出してみろ。二人で分担すりゃあ、今のお前にもできるだろ」
　物凄いカンニングですまん。ナルトが思いついたコントロール様の手として、両手に加えて影分身を使う方法をフライングしておいた。この方法は急場しのぎであると同時に、経験値蓄積を兼ねているのでここで教える意味が大きいのだ。
「やった！　できた、できたってばよ！」
「そりゃ俺が相の手を入れてるんだから当然だろ。時間を掛けていいから、自分一人でできるようにす……うわっ!?」
　ナルトの勇み足とヘタッピぶりは相当なもので、このタイミングで猛烈なチャクラを入れやがった。おかげでボールは一発で割れてしまい、もの凄い音を立てて破裂。俺たちは相手の手を張り手でドつき合う格好になる。
「あ……ゴメン。その、サスケ……怪我……」
「怒ってないから気にすんな。ボールはまだあるから、今の修行の合間にやっとけ」

他人の協力で成功しといて、勇み足で大失敗。ましてやチャクラの集中させ過ぎで、俺の手もナルトの手にも焦げ跡がある。まあ性質変化を混ぜてないからこのレベルで済んでるんだけどな。

ちなみにこの修行がバレたが、螺旋丸の完成形とは方向性が全然違うのでカカシは怒る代わりに微妙な顔をしていた。おそらくは『別方向に力を振り向ければ螺旋丸ができるのになー』とか思いつつ、まだ早いとか思っているのだろう。

ある日ナルトが朝帰りをしてきた。吹っ切れた表情なのを見ると白と出逢ったのだろうか？　それだけならば美談なのだろうが、裏話を思い出したためかモヤモヤした気分になる。

誰からも必要とされず親から殺され掛け、ようやく出逢ったのが再不斬。ロクでもない奴だがそれでさえ救いになるくらいの孤立で、俺なんかがセッキョーしても無駄なくらいの絆があるはずだ。その事を思うと湿っぽくなってやれない。前にも言ったが、うちはの心は硝子だっつーの。

「とうとう術を覚えたってばよ！　……へへ、まだ動きながらじゃないとできねえけど」

「上出来だと言いたいが、動けなくなるまでやんなよ。担いでいくのは俺だぞ？」

「よーし。二人とも、明日からタズナさんの修行に付け。そろそろ再不斬も無理すれば

動ける頃だからな」
　おおよそ原作通りの流れかナルトの修業が一定成果を越えた頃に、カカシがＯＫを出した。その日の晩にイナリのガキがわめいたが、ナルトはつらそうな顔で諭していたのが微妙な差だろうか。
　なお翌日までの流れはピッタリ同じだった。強制力というより限界までチャクラを使う性格は変わってないのだろう。
「……起こす？」
「そのうち自分で起きるだろうから無理させなくて良いだろ。……いや、むしろこないだのバックアップ野郎の真似事でもさせとくか」
「それで良いんじゃない？　まだ怪しいってレベルだしな。残ってれば二人の護衛にもなるし」
　サクラが揺するモノノナルトは起きない。せっかくなので、この後の流れを紙に書いて軽く指示しておいた。起きたら森を捜索してガトーの手先が居ないかを確認し、その後にバックアップとして援軍のつもりで来いと置手紙を残したのだ。何もなければ翌日はサクラ、その次は俺とローテーションするみたいなことを書いておけば大丈夫だろう。カカシも認めたしな。
　原作通りならこの後は再不斬・白戦だ。修業が上手く行ったこともあり、以前の様な

不安は感じていない。火遁分身を組み込みハンドサインを考えた事で事前に考えることも多くなったので、まだ三つだがこれで今は十分だろう。まあ成長したら限界値もあがるので沢山作っても意味が無いのもある。

「来るぞ！」

「……霧。今日だったか」

「ナルトに手紙を残してきて正解だったな」

カカシの言葉にサクラと俺は即座に対応。工事現場に気絶した人足たちと周囲に立ち込める濃い霧か……。原作通りの流れで動きが進み再不斬たちは次々に先手を打つ構えだ。とはいえこちらは半ば予想しており、写輪眼をオンにして待てる分だけ余裕はある。

「相も変らぬ水分身ねえ。やれ。サスケ！」

「行くぞ。忍法・火産霊の術。一の式！」

周囲に現われた水分身を黒縄炎で一気に焼き払う。あらかじめ決めたハンドサインでサイズを拡張した状態で出し、タズナの爺さん込みで周囲を守ることにも成功している。もっとも範囲が広過ぎる事と、水辺とあって全ての水を蒸発できてないのが残念ではある。こういう所は水遁の独壇場だな。

「ホー。水分身を一撃で焼き払ったか。流石はうちは一族。強敵出現ってところだな、白」
「そうみたいですね」
　原作通りに連中が現われるが猿芝居をやってないので特に会話はない。そのまま流れは同じかと思ったのだが……。
「あそこまでやるとは思わなかったが……まあ先手は取った。援護くらいはやるから挨拶に行ってこい」
「はい」
「っ水喇叭か！　速い！」
　再不斬は短い印と共に息を吸い込み、牽制用に水喇叭を放ってくる。白はそれに紛れて接近し、俺は黒縄炎を圧縮して炎の籠手に変えて前に出た。
「相当な速さですね。しかしボクらは先手を二つ打っています。勝てないと思いますから、降伏してくれませんか？」
「抜かせ。依頼主を売り渡したら忍として終わりだよ」
「サスケはそいつを、サクラはそのままタズナさんの前を抑えろ。オレが再不斬を抑える」
　白の千本を俺のクナイが抑え、その間にカカシが回し込んでいく。水喇叭を放った隙

と傷の分だけカカシが速いか？　とはいえ水分身であることを警戒してカカシも前へ出きれないようだ。
「降伏してくれないのですか、残念です。しかし周囲には水遁に有利な水が、そしていま片手を塞いでいます。状況は圧倒的にボクの有利だ」
「勘違いだ。俺にとっては別に不利なフィールドでもない」
　原作と多少の差はあるが概ね同じで、こちらには対策がある。他にも何かあるかもしれないが、それほど恐れる事でもないだろう。むしろ大きく動いて依頼人狙いをさせない方が面倒だ。
「これから一方的に攻撃され続けて、同じ強がりが言えるでしょうか？」
「片手印だと!?　やはり存在したのか！　未完成だが俺もっ……」
　秘術・千殺水翔……だったかな？　周囲の水が千本になって襲い掛かって来る。俺は片手で千本をクナイで抑えつつ、もう片方の腕を軽く動かして印を結ぶフリをした。もちろんハンドサインでしかなく、炎の籠手にした黒縄炎の圧縮を解くだけだ。火遁分身が保有するチャクラを使い切ったが十分な成果と言えるだろう。
（よし！　炎とチャクラの反発力で防いだ！　これで……？）
　広がる炎の縄で水の千本を弾くが、思ったよりも蒸発させられてない。それどころかチャクラの航跡は水に残ったままだ。普通の水遁ならばもっと拡散しているはずなの

に……。

「言ったはずです。先手を打っていると！」

「っち！　お前もチャクラの反発を利用して!?」

奴は水に残したチャクラと足の裏を反発させ合い、想像以上の速度で突っ込んできた。俺は炎の籠手を無くしてしまったこともあり、仕方なくクナイを投げて飛びずさる。

「どうやら普通に競争したらボクが負けてしまうかもしれませんね。怖い怖い」

「……ちっ。前回で写輪眼の恐ろしさを見せつけ過ぎたか」

奴が次々に投げる千本へこちらは手裏剣を投げて迎撃する。どうやら奴らは水へチャクラを大量に練り込み、この戦いの為に準備していたのだろう。あるいは最初に倒した再不斬の水分身も、俺が火遁分身を保存したように奴らも保存していたのかもしれない。そう考えれば攻防一体の為に作り上げた黒縄炎が僅か二回で消えてしまったのも判る。

（ヤベエな。ゲームと違って他の人間にも心があるのを忘れてた。前回思い知ったはずなのにな）

原作と違ってこちらに写輪眼があることを連中は知っているのだ。しかも原作以上に負傷させている。何も対策しない方が嘘だろう。

「白。そのままだと何処かで逆転される。判ってるな？」
「はい。……残念です。ここまでする前に降伏して欲しかったのですが」
（っ!?　原作よりもタイミングが速ええ。くそっ間に合え！）
　速度合戦が白有利な状況なのに、再不斬は容赦なく次の秘術を要求して来た。白からは本気で残念そうな口ぶりが伺えるが、俺の方も必死で術を発動させるために集中を余儀なくさせられた。
「秘術・魔鏡氷晶」
「火産霊・二の式！」
　周囲に氷でできた無数の鏡が出現するのと、俺が手甲から伸びる赤い刀を作り上げるのは同時だった。黒縄炎で防御するだけじゃあ逆転できない。ここは攻撃用の術で状況を切り拓かねばならないだろう。
「氷遁……北国以外で使えるってことは血継限界。お前……。雪一族か！」
「そんな物は知りません。ボクは再不斬さんのモノです」
　万華鏡写輪眼で見切りながら手近な鏡に向かっていく。奴は自分を乱反射させる光のように高速で突撃して来た。その速度はもはや狙って斬れるものではない。俺が致命傷を避けて居られるのは、万華鏡の力でチャクラの流れを見切り、攻撃ポイントを見切って躱しているからだ。

「戦闘中に分析とかお前、なんか余裕だね。つーか氷遁に血継限界以外もあんの？」
「血継限界には二種類ある。チャクラを混ぜる行為を容易くするモノと、他の者には行使できない特殊なモノだ。混ぜるだけなら条件さえ整えばできる。だがコイツの動きは絶対に無理だ！」
　呆れるカカシに答えてやる。アニメ映画では普通に使っていたが、まあ北国なので混ぜ易いのだろう。最初はバーゲンセールかと思った事もあるが、オオノキが血継淘汰の塵遁を使ったり、我愛羅が努力で磁遁やら錬金を使った当たりで何となく納得した。
　要するに累代で血縁を重ね、チャクラを混ぜ易くした血の結晶が血継限界なのだ。ならばコントロールを極めた者が、条件を整えれば可能なモノもあるだろう。だが、この秘術だけはそうもいかない。万華鏡の瞳術にも似た特殊能力だと思えば白の強さの秘密なのだろう。
「確かチャクラを全身にまとう戦闘モードとか、それを極めた変化能力を聞いたことがある。おそらくはその最終系がこいつだ。氷は無理でもカカシでも似たことはできるんじゃないか？」
「なるほどねえ。……とはいえオレの雷遁モードでもこの速度は無理だぞ。どうする？」
　氷遁モード　＋　氷化の術。おそらくはこれが魔鏡氷晶の正体だ。しかしその連続

性を普通の奴が真似ることはできない。おそらく北国一の使い手でも、氷遁モードすら難しいだろう。もし高速化のために組み合わせているのが瞬身ではなく、飛雷神や転送の術だったら不可能だろう。

「決まってるだろ！　こうするんだよ！　火遁・豪火球の術！」

「火球ごときでは……炎の剣!?　で、ですが全てを融かすことはできませんよ。また作り上げれば良い話です」

豪火球が炸裂しても聞いていないが、その間に切りつけた手から伸びる赤い刀……赤火刀は氷の鏡を引き裂いた。しかし白がチャクラを練り込むと新しい鏡がその穴を補充する。確かにその場に留まって居たら難しかったろう。

「その剣、何時まで保ちますか？　見ての通り火球では傷もつきません」

「まあな。やっぱり便利遣いする術は扱いが難しいぜ。やはり火力って言うくらいだ。力押しの術じゃないと駄目か」

二の式である赤火刀は手の動きで方向を変化させる武器だ。手刀だと真っ直ぐ、拳を握ると順手の位置に移動する。そして投げつけたらその位置から分身に戻って突撃。その場に突き刺したら俺と入れ替わる代わり身として設定してあった。

攻防一体型の黒縄炎もそうだが様々な使い道ができる便利な術は、火力よりも制御力だとかコントロールを重視してある。まともにやったら倒すどころか突破は無理だろ

う。まともにやれば……だが。
「だが、そんなことは先刻承知なんだよ。……ここで質問だ。効かないと判ってるのにどうして俺は豪火球を使った？」
「……ま、まさか」
そう。そのまさかだ。豪火球は最初から視界を遮る為にしか使っていない。ナルトが良くやる分身と変化のコンビネーションを真似して、赤火刀を投げつけておいたのだ。当然、俺本体はそこにはいないし、今の状況で姿を晒すわけがない。
では、俺は何処か？　それは勿論……。
「着いたか。二人は？」
「無事だってばよ！」
もちろんナルトの元へ！　一人で倒すことが難しくとも、二人でなら容易過ぎる！

原作知識をカンニングしてナルトが現れる場所にフライングで合流しておいた。
ナルトが飛び出て鏡の真ん中に移動することを静止できる。霧越しにカカシの方を見れば、向こうは既に犬を口寄せしているようだ。再不斬が負傷している分、原作よりも流れが速く進行したのだろう。魔鏡氷晶使った時に俺が慌ててなかったのもあるだろうがな。

「ナルト。前に教えた術はモノにしたんだよな？」
「まあな。でも言った通り動きながらじゃ難しいぞ？　影分身出したら時間掛かっちまう」
原作よりも風遁が速い分、ナルトの影分身速度がやや遅い。まあ時間配分の問題なので仕方ないとはいえる。ただこの問題は想定内だ。
「俺の手を貸してやる。俺がコイツを投げたら最大風速でブッ離せ」
「Ｏｋ！　それなら問題ないぜ」
左手をかざしてナルトの前に持って行くと、ナルトはそこに自分の右手を合わせて掌を合わせる。チャクラが集中し始めたのを見て、俺はもう片方の手で略印を刻んだ。用意するのは三つ目の新術だ。
さて、一の式も二の式も便利系だったのでいまいち出力が足りない。俺が成長すればコントロール力やチャクラも変わるから火力は増えるはず。しかしこのままでは威力が足りないのは判っている。第一、純粋な攻撃用がないよな？
（そもそも……天照の代用品を探してたんだよな。なら火力全振りの術があるに決まってんだろ）
印を刻んで三の式を用意する。それは白く輝く玉が一つ。俺の右手には左目の軻遇突智で威力を封印できる最大限にまで上げ、右目の加具土命で固定化させた炎玉があっ

た。後はこれを投げつけるだけだ！
「行くぞ！　忍法・火産霊、三の式！」
「行くぜ！　忍法・渦潮隠れの術!!」
　着弾と同時に灼熱の白炎が広がり、ナルトの広げたチャクラの嵐が周囲に吹き荒れる。それは鏡の一部どころか……殆どすべてを呑み込んですらいた。
「下がれ、ハク!!」
「……これじゃあ、もう、再不斬さんお役に……すみま」
　光の渦が氷ごと白を飲み込み、原作には無い結末を呼び起こしていた。
　いや、正確には原作にあった光景が……主従を逆転して引き起こしていたのだ。腹に穴を空けた魔人が最後の気力で飛び込んでいた。
「嘘……なんで再不斬さんが……」
「馬鹿野郎。運ばせるつもりだったのに……お前がウスノロだか……ら……逃げ遅れちまっただろう、が」
　腹に穴を空けた魔人は下半身を炭化させながら白を救い出していた。正確には、救い出した気分になっていたというべきか。
「直ぐに脱出します。ちょっと待っててくださいね。無理なら交渉してでも……」
「そう……か。なら大丈夫だな。お前はゆうしゅうな、ぶ……。さむい、ハク、何処に

……居」

「ここに居ますよ」

もう目も見えず触覚も感じていない。明らかに致命傷の再不斬を大火傷を負った白が慰める。医療忍術があればギリギリで間に合うか怪しいところだ。

「どうする？　まだやるか？」

「いえ。ボクも殺してください。再不斬さんの居ない世界に意味はありません。それに……実は、息をするのも苦しくなってきて」

二人はとっくに虫の息。再不斬はとっくに死んでいてもおかしくないし、生きているとしても大人の体だからだ。子供の白では全身火傷で逃げ出せるはずもない。まして上半身だけとはいえ運べるはずはなかった。

「悪りい。サスケ、二人を頼めるか？　オレってばあいつらを止めてこねえとさ」

「オレも行って来るかね。ちょいと辛いが本当の意味での下忍卒業試験だな」

「ガトー達か。判った……こいつらは俺が……責任をもってトドメを刺しておく」

原作よりも早く進行したことで、今更ガトー達がやって来た。ナルトは涙をこらえて影分身。カカシもそれに同行して足止めに向かっていく。

「早く殺してください、お願いします。ずっと二人で居たんです……。できれば同じに……」

「判ってるよ。直ぐに送ってやる。だが、なあ。一つだけ聞かせてくれ。もし同じ地獄に逝けるとしたら、どうするよ?」

原作と違う流れでお涙頂戴は止めろよ。うちは一族の心は硝子だって言ってんだろ。だいたい、俺はこの手の話に弱いんだよ。他の連中と違って、原作読んでる分だけ背景も知ってるしな。

「涙?　きみは……優しいんですね。再不斬さんと同じ地獄なら何も怖くない……ですね。早く殺してください。この経験が、ボクからの報しゅ……」

「これは涙じゃねえよ!　つーか貧乏性の俺がただ殺す訳ないだろうが!」

俺の両目から血の涙が落ちる。加具土命の性能的に出るはずもないのだが、おそらくこれまで省エネモードで使い過ぎて、最大出力に悲鳴を上げているのだ。

「俺には天国へ連れて行ってやれるような祝福も洗礼もねえ。だが!　同じ場所に逝けるように呪ってやるよ!」

加具土命と軻遇突智を同時に使う、俺専用の術。最大でも十くらいしかつくらないのと決めたのに、いきなり圧迫しやがって!

炎の洗礼を浴びて、再不斬と白の体が火の粉に変わっていく。代わりに現われたのは火遁分身と封火法印の方陣だ。新術用に用意したモノで、三重円のド真中が空いている。

「さあ。永遠の黒炎で呪ってやる！　前たちの命は俺が預かった！」

軻遇突智で性質変化させた火の粉を火遁分身と融合させ、ソレを加具土命で二人の体に創り変えていく。時間が経てば無理だろうが、今ならば可能かもしれない。失敗したからと言って、知るもんか！

「うちはハクに、うちはザブザ。それが今日からてめえらの名前だよ！」

せいぜい役に立ってくれ。俺はそう思いながら熱くなった目を閉じた。

中忍試験編
気が付いたら差異は大きくなっていく

木の葉に帰って少しくらいは修行時間があるはずだったが、術の調整に専念を余儀なくされた。

十以上創る気の無かった独自の術が圧迫された事と、『奴ら』を何の術として再構築するかを決めなければならない。もちろんハンドサインを決める必要がある他、意識がある以上は報酬も必要だ。

「ナルト姐ちゃん最近冷たいよお～」

「修行しねえと付いていけねえんだってばよ。なにせオレは下忍でＮｏ．１の小隊だからな。また今度、コノハの術を見てやるってば」

ちなみに中忍試験編開始までの大きな差は木の葉丸の性別が違っていたくらいかな？　いや……そういえばシカマルと頻繁にあってるほか偶にシノとも出会ってたはずだ。

（あそこまで仲良かったっけ？　原作と微妙に違うせいかモヤモヤするな。シノも少し違和感があったし、まさかあいつも女の子じゃあるまいな）

シカマルは男のままだったが授業で馬鹿やる以外に仲良くなかった印象がある。シノに関しては額当ての位置が違うほか、声が若干高かったような気がする。仮にシノが女の子だったら、まさか代わりにヒナタが男なのか？　サクラも男でナルトが女の子だからバランスは取れてるが。影が薄いのまだ子供だったので気にしてなかった。

「サスケ君。注文の件は父さんに送っといたわよ。また二組分で良かったんだっけ？」

「いののお陰で助かった。そろそろ中忍試験だろ？　時間を掛けたくないからな」

思考を中断させたのはいのに頼んでいた件が終わったからだ。何が助かるかと言って目の前で伝心の術を使ってくれた事とかな。できれば追加印や法陣もあればありがたいが、それは追々探せばいい。心転身と用途が違い過ぎるので印の方は比較検証できる。火遁分身へ指示出す専用の術なら別に距離短くてもいい。

「また花を買ったのか？　おめえもマメだなあ」

「今回は白と再不斬の分だよ。首切り包丁もってきちまったしな。埋め合わせってやつだ。取りに行くついでに買い物もするから、ナルトやコノハ達も何か食ってくか？」

「ホント!?　嬉しいなあ」

これは自分で作った差異かな。サクラが剣術というか白兵戦闘そのものに興味を覚えてたので、桜花衝による剛力の事もあって首切り包丁を持ってきている。流石にでか過ぎるんで本当に使わせるかは微妙だが、決して損にはならないだろう。

「マジかよ！　じゃあじゃあラーメン……あー。菓子でも買いに行くか」
「いいの？　リーダーたちと一緒におやつ？」
「別に構わねえぜ。さっきも言ったがもう直ぐ中忍試験だからな。最後の追い込み前に気力を付けとかねえと。サクラも時間が空いたら来て構わねえぜ」
「……了解。時間が空けばそうする」
　原作だとガキどもが砂の連中ともめる為、理由を作って一緒に町中を散策することにした。もちろん忍具やら薬草を買い足したりするから買い物自体は嘘じゃねえけどな。
「あ、コレコレ。サスケってば知ってるか？　カンポーだかケンポーだが知らねえけど、シカマルに聞いたんだけそこの薬ってば高いけどよく効くらしいぜ？」
「そういや、あいつの家は森の管理をやってたっけ？」
　確かシカマルの家は薬にできる薬草の類に詳しかったはずだ。
「ねえねえ。もしかしてナルト姐ちゃん達って付き合ってる？」
「なっ、何言ってんだってばよ!?」
「はあ？　今更だろ。昔から一緒に修行してるし同じ小隊だからな。会ってない方が珍しいぜ。漢方に興味あるなら買っとくから試してみろよ。薬膳ラーメンなら食ってみたい」
　懐かしいやり取りに思わず笑みがこぼれた。そういえば原作でもこんなエピソード

があったなと思い出したのだ。まあ女の子が言ってる分、未来の乙女の会話っぽくてホッコリする。ともあれ薬草知識は無駄にならないので説明書ごと漢方薬を買っておいた。

「……アハハ！　そうだな。オレってばラーメンに関しては一言うるさいってばよ！　こんど食わせてやっからな」

「他の料理も覚えねえと将来苦労するぞ？　まあいいけどな」

それはそれとしてシカマルと会っていた理由が判ったせいか、少しスッキリした。おそらくは波の国でエセ螺旋丸を教えた時、怪我をした事を気にしていたのだろう。となるとシノもその辺だろうか？　フィールドワークで虫集めとかしてるはずだから、詳しいだろうしな。

今俺はナルトとサクラと共に受験会場に足を運んでいるこれまで原作との差異を感じなかったのは行動半径の狭さもある。波の国では護衛任務だった事もあり敵味方する事に差が生じないのだ。しかしここからは大きな差が出てくるだろう。

それこそカカシに『オビトは生きている』と忠告する機会は幾らでもあった。しかし生きているのはリンだったり人柱力として生きてたら話が変わる。というか『例の碑文』を見に行ったら黒ゼツによる修正が無かったので、修正されてないのか既に修正後

で歴史が違うのか……。まるで信じられず……俺に口出す勇気があるはずもなかった。そして今自分達がいる受験会場で新しい差異が生まれようとしている……。

「弱い者虐めが御趣味とは試験官の方々も随分とお暇ですね」

「任務だから趣味じゃねえよ。てか速攻でバラすなよ日向の跡目」

　目の前で壮絶なマウント合戦が始まっていた。リーが転がっている横で、虎徹だったか長船だったかしらないが名刀みたいな名前の中忍が日向の誰かに抑えられていた。抑えているのがヒナタにしてもネジにしても、跡目はハナビになるはずなので盛大な嫌味でしかない。

　しかしそいつは嫌味には全く取り合わず、傍らのリーにすら目を向けていない。奴が顔を向けたのはこちら側だ。

「ナルトさん。お久しぶりです。これは秘伝の塗り薬なのですがよく効くので火傷やアカギレにでも使ってください」

「ヒナタも朝から元気だってばよ」

（ヒナタかよ。こいつ。一瞬誰かと思ったぞ）

　一番驚いたのはナルトに向けた溌溂とした笑顔である。この時期のヒナタってまだウジウジしてなかったっけ？　というかアカデミーでチラっと見た時は何時も誰かの陰でビクビクしていたはずだ。何か原作との差異で急激に明るくなったのだろうか？

ナルトにコナ掛けている当たりキッカケはナルトの努力なのは同じだと思うが。
「なあ、そいつがＮｏ．１ルーキーか？　教えてくれるとありがたいんだが」
「初対面の相手に挨拶抜きとは失礼じゃないですかネジ兄さん？　そこに転がってる方を連れて施薬院にでも急いだほうが良いと思いますが」
明るいヒナタに戸惑っていると脇からネジが話しかけて来る。強い下忍に目を付けているのは原作と同じなのだろう。せっかく砂の連中をスルーしたのに、揉め事の種は尽きないらしい。
「……あまりナメるなよ宗家。リーは木の葉で認める唯一の下忍だ」
「そこに私を入れないのは構いませんがナルトさん達を無視するのはいただけませんね。ああ……こちらはネジと言って日向の分家筋です。今まで下忍Ｎｏ．１と呼ばれていた人ですよ」
「お……おう。オレもＮｏ．１を目指すってばよ……」
名家主催でのナチュラルに行われる煽り合い。どこかでリーの八門開放でも見たのだろうか？原作ではこの時点では見下していたリーをネジは認めていた。それは同時にヒナタをディスる結果になり、ナルトを歯牙にもかけない事で俺たち下級生全体をサゲている。それに負けないのがヒナタの嫌味で、『過去のＮｏ．１』と紹介することでネジをディスり返していた。

「二人ともあまり揉め事を起こすなよ。ただ、そこの連中の師匠は知っている。木の葉一の体術師でカカシのライバル。確か……霧の七人衆をヤったんだっけか？」
「褒めてくれるのは嬉しいが……。最後のは私の父だね。ネジもそこまでにしておきなさい」
　仕掛けて来るなら体術をコピーしようと写輪眼を開放して居たら、隅で伺うガイに気が付いた。ため息交じりに原作知識の一部を聞きかじりで喋っておいたら、隠れていられなくなったのか早速顔を出してくる。ただし……こちらの眼を一切視界に入れず後ろに回ったり、何かを思い出すように目を閉じているのは原作を知らなければ自然な仕草だった。
「はっ…速ええええ！カカシ先生のライバルとか木の葉一番ってのも信じられるってばよ！」
「見える範囲に気を取られてるんじゃねえよ。こんなのはごく一部だぞ。七人衆の凄さをこないだ知ったばかりだろうが」
「はっはっは。そこまで。忍びはあまり手の内を晒さない物だ。そして自慢話もね」
　写輪眼を使っていたのに動き始めも動きの終わりも全く見えなかった。体の動かし方が半端なじゃない。静も動も両方極めているからこそ、ネジにもリーにも指導ができるのだろう。

「へー、カブトさんって凄いんだ♡」
「へへ。じゃあ少しだけ可愛い後輩に教えてあげようかな。この忍識カードでね」
（ウサンくせー。原作知ってるのあるけど凄いウサン臭過ぎる）
　ガイが去った後もその後の流れはあまり変わらない。注意するという態で接近して来たカブトが男だったのを見てホっとする。しかし怪しげな事この上なく、かなり胡散臭かった。露骨に情報を引き出そうとするナルトの媚びは胡散臭いを越えて、空回りしてたが。
「そのカードに個人情報も詳しく入っているやつあるのか？」
「フフ……。気になる奴でもいるのかな」
　原作の流れは放っておいてしりたい情報に関してのみ首を突っ込む。忍者の数とかあまり覚えてないし、この時の為に四年も掛けたとか言いつつ毎回受験していることに突っ込む気はない。
「その『気になる奴』の情報を何でも言ってごらん。検索してあげよう」
「そうだな。俺はうちは一族なんだが同祖であるかぐや一族はまだ残っているか？　後は五影である風影の直系がいるならそいつを」
「ガーラ。昨日会った子はそう言ってた」

原作との差異を知りたかったので君麻呂の事を教えるかどうかと、我愛羅がどれほど知られているかをボカして尋ねてみた。するとサクラが口を出して来たのだが……どうやら昨日別れてから砂の三人に出逢ったらしい。ガキどもじゃなくていのがサクラを連れまわしたのかよ。

「……かぐや一族はうちはと同祖だったのか知らなかったな。でも残念ながら彼らは全滅しているよ。とはいえもう一人の方は名前が判っているなら早い」

「全滅か。日向と同祖の雪一族も全滅したし、どこも古族は残ってねえな」

カブトの反応からどうやら君麻呂が居るのと隠し札なのは原作通りのようだ。冷静なスパイの筈なのにちょっとした反応を示したのは、インドラの子孫であるという情報を知らなかったからだろう。

「これだね。風魔三姉妹の末姫、砂金のガーラ。任務はCランクの他はDが数えきれない。他国の忍びというか砂があまり表に出したがらないことを考えても情報が無さ過ぎる。ということはこれは錬金術師かな。ただ任務どころか攫われた時も無傷で笑いながら帰って来たらしいよ」

思わず二度見した。我愛羅が女の子だけならともかくロリ化していて、しかも三姉妹ってことはカンクロウもかよ!?　思わず突っ込みそうになったがカンクロウの名前に『二代目』カンクロウと書いてある。襲名制だったのか？　言われてみれば人形師だ

しなあ。
「サスケサスケ～。錬金術って？」
「卑金属から貴金属を作る術の事だが、チャクラを使って分離とか融合する血継限界モドキでも作ったのかもな。だがこの歳で開発できるとは思えねえ。四代目の秘術を受け継いだんだろ」
　なんか原作と順番が違うとかBランク任務受けてねえなあとか思いつつナルトに答えておく。攫われたのに笑って戻って来たというサイコ度合いにドン引きしそうになった。この辺は性別が変わろうが年齢が下がろうが同じなんだろうなあ。
「血継限界って新しく創れんのか？」
「前にも言ったろ。真似できるレベルと、その先があるってな。研究室で二種類を混ぜるだけなら難しくねえ。問題なのは三種類とか、戦場で可能かどうかだ」
「そういえば岩隠れでは三種混合の血継淘汰を目指したそうですよ」
　ナルトと俺が話していると、ヒナタが興味を引こうと塵遁の話を持って来た。話の腰を折られてムっとしたが、俺が知ってるのもおかしいので黙っておく。それを良いことにヒナタは親し気にナルトの肩を抱いて詳しく話そうとする姿勢を作った。
（こいつ原作よりも積極的だなあ。無限月読で出てきた姉御肌のヒナタぽい？）
「……ナルトさん、少し下がって」

「え、何？」
　そのままナルトと俺の間に入って来たので、最初は強引な姿勢にムカついた。しかしこの後の流れを思い出して思い留まる。よく考えたら音忍が飛び込んで来る流れなので、ヒナタは白眼でその動きを発見したのだろう。特に白眼を発動している様子はないが、俺が写輪眼に印が必要ないようにこいつも特訓したのかな。
「ヒナタ。ナルトは任せても良いか？」
「貴方に言われるまでもありませんよ。日向は木の葉にて最強です」
「何が起きてるんだってばよ？　オレにも説明を……」
　ナルトのエスコートを譲ってやると、ヒナタはキョトンと意外な顔をした。だが途中で戦意を目に灯したのを見ると、音忍の殺気と接近を感じたのだろう。
「コレが敵の外見です。先に忠告しておきますが顔を包帯で隠した奴は籠手に何か仕込んでいます。私がやりましょう」
「わわっ。誰だよコレ？　てか幻術で作った人形？」
「これは助かる。俺には三人てことくらいしか判らねえからな」
　何とヒナタは幻術で自分の見ている光景を掌に映し出した。映像投射型の簡単な幻術だが白眼との組み合わせが凶悪である。そういえば『忍者物』のナルトでは情報共有は貴重なシーンだった。紅先生が幻術士であることを考えても、この手の指導は散々

やったのだろう。
「カブトさん。情報料代わりに教えとくぜ。何処かの里の馬鹿がこっちを狙ってる。あんたも狙われてるみたいだから、髪の長い女の担当を頼む」
「ん？　ああ。そういう事か。了解」
　原作との差を知りたい事と、ヒナタから前情報をもらえた事で対戦相手を誘導しておいた。名前は忘れたが特殊な攻撃を持たないあの女ならば苦戦はしないだろう。千本に毒を塗るとか試験会場でやるはずもないしな。
「っ!?　なんか来たってばよ！　こいつらさっきの……」
「直ぐに終わる。静かにしとけ」
　飛び込んで来る音忍がまずクナイをカブトに投げつける。そこに俺が割って入り写輪眼で見切って指の間で白刃取りを行う大道芸を見せた。投げ返しても良いがそこまで技を見せる程でもないだろう。
「ナルトさんは心配する必要もありません。何も起きませんから」
「っ!?　チャクラが練れない？」
　顔に包帯を巻いた男が籠手を露わにして一閃するが、そこから先は完全に役者が違った。襲撃者が何かの術を使ったのはモロバレなのに、ヒナタの方は涼しい顔だ。相手の攻撃を受け流し、白眼でチャクラの排出口の点穴を柔拳で突き、チャクラを封じた。そ

の拳圧を飛ばしたことを理解している奴はこの場に何人居る事か。
（今のは八卦空掌か？　しかも居合拳を混ぜてやがる）
しれっと微笑むヒナタだが、原作よりも遥かに強くなっている。まだ肝心の体術を見てはいないが、白眼の使い方と拳圧の使い方を見ればその力量が伺えそうなものだ。どうしてここまで急激に強くなったか理由は判らないが、原作ほど引っ込み思案でないのなら強くても不思議はなかった。
原作との差異というかヒナタの違いに驚いたせいか、カブトが無傷だった事も、気が付けば試験官が現れた事も暫く気が付けないでいた……。

試験官である森乃イビキによる第一の試験はよく考えられたネタだと言えるだろう。点数試験は飾りでありその実は情報収集戦。そして連帯責任やカンニング前提という点で精神的に追い詰め、最終的にな不条理な二択を押し付けてしまう。
「ぺっ、ペーパーテストォオ!?」
「落ち着け。最悪、忍具の共通化と同じ方法を採れば良い。忍者にカンニングするなってことは言わないだろうし……サクラなら解けるだろ？」
「努力はする」
原作通り慌てるナルトだが、この時点では何の問題はない。カンニングＯＫである以

上は他所から答えを持ってくれば良い。以前に修業した、同じ忍具を共通化する方法で簡単にクリアできた。

「そっか。オレが回答用紙を封印すれば良いのかな？」

「ああ。私が二人分回答する」

手順としては簡単だ。ナルトが自分の回答用紙を、封印用の巻物無しで封印すればよい。巻物の補助が無いと短時間で元に戻ってしまうが、その間にサクラが口寄せして書き込んで封印を上書きすれば良いのだ。これで二人とも八点で終えられる。俺も写輪眼を使うから何の問題もない。

（だが……。真の問題はそこからなんだよな。良くできてやがらあ）

最終問題に答えられなかったら全て台無し。恐ろしいのは回答が常に同じとは限らないという事だ。うろ覚えだがアニメではイビキの親族（兄弟だったか？）が落とされている。『残る』『残らない』などの二択は設問の前提条件で簡単に変わってしまうのだ。四年分の変遷を知るカブトでも気は抜けないし、転生者の俺も同様である。

（だが弱気は禁物！　今は『他の連中』をよく確認するのが先だ！）

写輪眼で回答をコピーすれば良いので筆記試験は焦る必要はない。最終問題も『忍びの心得』を考え、特に下忍としての前提を終え中忍として相応しい判断を考えれば自ずと導き出される。ならばこの時間は、教室にいる人物を観察して『原作との差異』を確

認するべきだろう。

（まずは砂か。ガイ班と猪鹿蝶はあんまり変わらないしな）

ネジとリーが認め合っている以外はガイ班に変更はない。猪鹿蝶もいのがサクラにお熱な以外に差はなく、今の段階から注目する程じゃなかった。

（原作だとこの段階じゃあ仲良くなかった筈なんだよな。それが三姉妹と異名を取ってるのは、やはり仲が良いのか？）

まず我愛羅ならぬガーラに目を向けるとＴＳロリな以外は殆ど変わりゃしねえ。そのままテマリに目を移すと、心配そうな視線をガーラに送って無視されている。原作でも我愛羅に目を掛けていたし、年下の妹を可愛がるお姉ちゃん化しているのかもしれない。多分口に出すとウザイと言われるタイプだろう。

（しかし口元以外は原作と殆ど同じ格好なのに一番差が大きいなコイツ）

最後に大きな差があったのはカンクロウだった。二代目カンクロウを襲名しているそうだがＴＳ化している。あまり開かない目元は同じなのだが……口元も布で覆い我愛羅を思わせるクールさで不気味だった。一昔前の武術漫画に出て来る『細い目の東洋人キャラ』の様な雰囲気と言えば判るだろうか？

（だが今の間に注意すべきは性別とか外見なんて小さなことじゃねえ。誰がどんな『思考の延び』を見せるかだ。波の国で俺は白や再不斬に出し抜かれた）

原作知識があったにも関わらず、俺は波で出遅れた事があった。原作よりも鍛えていた事で油断し、逆に奴らは原作よりも一手先を用意していた。それでも勝てたのは、積み上げた準備が多かった事と俺の眼がただの写輪眼ではなく万華鏡写輪眼だったことだ。いわばチートで勝ったも同然で褒められることじゃない。

（例えばヒナタだな。あいつは覚悟を決めて性格をこの段階で変えているだけじゃない！　この会場に入った段階でナルトの為に『整理』しに来てたんじゃないだろうか？）

さっきの音忍対策にしても行動一つが洗練されている。もしサクラとヒナタによる嫁投票……じゃなくて婿投票があったらぶっちぎりでヒナタだろう。

（この世界はゲームじゃねえ。原作よりも上回るだけじゃ駄目だ。先に進んだ上で更に考え抜く必要がある。この会場に……他に居るか？　やるとしたらどんな行動だ？　それを考えるにゃ良い時間だぜ）

それこそアンコが男になっても大きく変わらないだろう。むしろ大蛇丸が里抜けしてなくて窓ガラス割るどころか……起爆札放り込んで、反応できなかった奴らを野軒並み不合格にするくらいは予想しておこう。大蛇丸が最終試験官やってたら苦労させない為にその位はしそうだしな。

（カンクロウの場合は実は傀儡で本人は外から答えを盗撮してるとかな？　そのくらいできるだろうし、トイレで入れ替われればいい。テマリは風で盗聴でもしてるか？　それ

とも音忍がそれをやっている？　次の試験対策はどうだ？　ちくしょう。時間が足りやしねえ）

残念なことに頭が冴えて来たのに時間の方がやって来る。この後は原作通りに進んでしまい、最後の問題とアンコの乱入が待っていたのだ。この日はこのまま第三の試験まで進むはず。テスト時間が貴重に思えたのは何年振りか思い出せなかった……。

大蛇丸を止めるのは……

みたらしアンコが死の森で行う第二の試験は、殆ど原作と変わりないサバイバルだった。

最初の茶番もほぼ同じ通りでナルトが啖呵を切ると、アンコと謎の草忍が気色悪い動きを見せる。クナイで警告はともかく血を舐めるとか長い舌とか気色悪過ぎだろ！

「これからどうするってばよ？」

「案があるなら聞こう」

「基本的には同期組を中心に知り合いを全部残らせる。木の葉は強いって事になるしな」

サバイバル開始と同時にナルトとサクラの質問してきたが当面の目的を用意する。前回ディスってきたネジに対抗するわけでもないが、俺はあえて原作と似て非なる道を選んでみた。原作でも結果的にガイ班と同期組は全員残ったが、俺の意思で確実にその流れを作る。

原作と違うとか違わないとか以前に、俺がどうしたいかが重要だ。そして他の連中の意思も推測しつつ、良い未来を目指すならば受け身ではダメだ。自分自身がやりたい事

の延長に現在の目的と手段を持ってくるべきだろう。俺の目標？　フフフ、秘密だ。
「具体的には？」
「このサバイバルの形式上、概ね二つの流れが想像できる。……簡単に言うと、真っ直ぐ塔を目指す奴らと、ジックリ行く奴らだ」
「へー。いや、判ってた。判ってたってばよ」
　サクラの問いは確認だろう。知ったかぶりするナルトと違って即座に頷いている。とはいえ頭の中で考えるのではなく、判り易く絵で描いておこう。第何班とかナルトは覚えてない可能性もあるしな。
「まず紅班はぶっちぎりで先行して待ち構えるはずだ。キバもシノもフィールドワークが得意だし、ヒナタの白眼は森の中でも強いしな。逆にアスマ班は確実性を狙うだろう。猪鹿蝶の必殺コンボといやあ木の葉でも伝統芸だしな」
「必殺コンボ!?　いいなー。サスケエ！　オレたちも……」
「ナルトはちょっと黙って。この話は後で確実にやる」
　この二班に関してはとても対照的だ。能力が判り易いが、それを気にしない性質なのも説明し易くて良い。しかしナルトの茶々入れを止めてくれるのはありがたいが、サクラさん目で語るのをやめてください。というかこいつ、原作で言うと内なるサクラが一番近いんじゃないかと思う。普段は出てこないが、要所でガツンと行動するし。

「あの濃いオッサンの班は？　あのネジとかいうのも白眼使えるんだろ？」
「……奴らの実力なら去年出てもおかしくはない。出す気はないなら今年出るのもおかしいから、修錬をしっかり積んできたんだろう。となると……」
「準備をしっかりやる？　食料とか罠の位置とか？」
　ナルトの問いに答えつつサクラの結論に頷いておいた。原作知識もあるがこの辺は周囲の行動で補強できる。……どうも原作との差異があると言っても、性別以外は不自然な事はあまりおこらない。白と再不斬だって状況の中で先手先手を取ろうとしただけだったしな。ならば残るはどれだけやるか、出し抜かれないようにするか、だ。
「そういう事だ。他の里の連中とかは概ね新人狩りを狙うだろう。その方が楽だし、道中で出逢った敵は里の仲間に渡せばいいし、強敵だったら巻物を賄賂に出せば良いしな」
「その新人狩りを私たちが倒す、と。了解した」
「へっへー！　シカマルとか面倒だってやらない可能性もあるしな！　……あれ？」
　オレの説明にサクラは素直に頷いたが、途中まで調子に乗ってたナルトが首を傾げる。
「カブトさんはどうなんだってばよ？　四年もやってるんだよな？」
「……あの人は多分、最初から情報屋として身を立てる気だろう。思い出してみろよ。

この試験の為に四年準備したとか言ってなかったか？」
「そういえば確かに」
　ナルトの疑問はスパイであるカブトの話だった。知り合いはみんな助けると言ったので思い出したのだろうが、原作にあった言葉を引き合いに出しておく。俺は適当に聞き流したが、サクラが頷いている以上はやはり喋ったのだろう。
「だからあの人は新人狩りではなく、新人救護に来ると思う。有望な新人に声をかけて情報を知る。あり得そうなことだろ？」
「なら何処かで会えるし、ピンチじゃなければ来ない？」
「そっかー！　なるほどなー！　そんな気がしたんだってばよー！」
　まあ序盤の相談なんかこんなところだ。後は絶好の移動コースを直進ではなく迂回しながら、動きの遅い……時間をかけてコンボを決められる相手を狙う猪鹿蝶を探せばよいだろう。

　動き始めて暫く、近くに居た事と三人がバラバラに動いている雨隠れを見つけた。こちらが見つけたというべきか、見つかったというべきか。まあやることはあまり変わらないが。
「ラッキー！　まさかいきなり見つかるとはねえ！　でも三人まとめてなのがアンラッ

キー！」
「よーし！　早速倒して巻物奪ってやるってばよ！」
逃走を開始する雨隠れの忍をナルトが追い掛け、俺たちがそれに追随する。
「待てってばよ！」
「あれは……ちょっと待て、ナルト」
「いや。サクラ、止めなくて良い。流れとしちゃこの方が好都合だ。どうせあいつは巻物を持ってない」
考えなしに突っ込むナルトと、何故か当たらずに逃げ切る雨隠れの忍。サクラは気が付いたようだが、止める事を止めておいた。
この時点で雨隠れの忍は幻術を使用しており、本体は少し離れた位置に居て幻影だけを先行させている。オレ達を仲間の元に誘導しているつもりなのだろう。おそらくはどこかで落ち合う約束をしており、こうなった場合はそこで必殺の罠に嵌める予定なのだ。
（本人と離れた位置を起点に行動を起こす……『逃げ水の術』ってとかな？　本体の位置は判るし写輪眼を使えるから『こいつらだけ』なら楽勝だな）
原作ではあれほど苦労した相手なのに、体力も精神力もバッチリなのでチャクラを幾らでも練れるから何の問題もない。このまま幻影の結界に飛び込んでも、朧分身を使わ

れても問題ないだろう。むしろ大蛇丸やカブトが近くに潜んでいないかの方が重要だ。迂闊に万華鏡を見せたくない。

「……サクラ、目を動かさずに二時の方角を見ろ。あそこに奴の本体が居る。おそらく奴の術が映像型幻術で、地形を挟んで安全を確保しながら術を使うタイプだ」

「居た。そこまで徹底しているという事は、あまり強くない？」

見抜いた斜め右上に本体が居ると告げたら、サクラもこの状況がチャンスだと理解してくれたようだ。ここまで判れば後は時間の問題。広範囲を攻撃するとか、木の上や地面の下まで考慮すれば奇襲をかけるのは難しくないからだ。

「あ……立ち止まって幻術の向きを変えた。何で気が付かない？」

「もしかしてもう一人誰かいるのかもな。複合幻術として……隠れてるとしたら……あそこか。三時の位置。ちょっと前の一時の辺り」

真っ直ぐ進んでいるはずなのに画像がループし始めた。最初はちょっとした変更だが、やがて本来は空白の部分に木々が立って移動を妨げる。その向こうに二人目が隠れているのだが、『逃げ水』で囮になる奴とコイツが連携するお陰で画像を見せられているとは思わないのだ。

（思考に幻術を流し込む精神攻撃タイプも厄介だが、こうやってみると画像系も厄介だな。違和感が生じるのが問題だが、馴れた奴ならそいつを誤魔化せる。さしずめ『石兵

八陣』ってとこか）

最低限の画像で道を誤魔化し、同時に画像の兵で意識を逸らす。投擲攻撃も並行することで更に注意を引けるだろう。画像越しに攻撃されたら人は画像に攻撃されたと思い込み易い。だが、この罠の本質はむしろ戦場を覆う広域画像の方なのだ。

移動中に通常の写輪眼で全体を把握したが大蛇丸が隠れている様子はない。原作ではこの時点では舐めプして直ぐに気付ける程度だったが、念の為にここまで注意した上で万華鏡をオンにする。すると三人目が地下に潜っているのを熱源とチャクラの痕跡で探し当てた。

「ちくしょう！　追いつけねえってばよ！」

「落ち着けナルト。あれは分身画像だ。足を止めずに聞け……本体は別のところに居る」

「うん。確認した」

準備ができた事もありナルトに声をかけ、サクラも既に手裏剣を用意している。ただここから馬鹿正直に本体を狙わない。一手間入れて安心させてから一網打尽だ。

「じゃあどうすんだよ。あれだけ逃げ足が速いと普通に殴り掛かっても逃げられちまうぞ？」

「連中の目を引き付けるために、一度あの幻術に飛び込んだ後で風遁を使え。俺が火遁

で先行するからそいつに合わせればいい。サクラも同じタイミングで手裏剣を。あえて地面に潜ってる奴の上で仕掛ける」

「了解。七班の必殺コンボ……」

ナルトに指示をするがサクラの返事はそれですか。やはり陰でノリノリだったんだな。寡黙な様でむっつりだから、やはり内なるサクラと逆転でもしてるのだろうか。

「おっけ！　んじゃ行くぜエ！　足にチャクラを練り込んでええ！」

「いくぞ。終わったら下は任せる」

「……うん」

ナルトは足にチャクラを注ぎ込み特大のジャンプを掛ける。それに合わせて俺は火遁の印を切り、サクラは手裏剣を構えて何時でも投げられる体勢を取った。雨隠れの連中からすれば、俺たちが偽の目標へ一斉攻撃を仕掛けてチャクラを無駄に浪費するように見えただろう。

「行くぞ！　火遁・豪火球の術！」

「……はあっ！」

「スカだってばー！　よっと！　そして～」

俺がいつもの火遁を合図代わりに放つと、サクラはそれを追い掛けて手裏剣の嵐を『本体に向けて』放つ。ナルトは予定通り偽者であったことを告げると、自ら掌を叩いて

次のチャクラを練り上げる。
「こっちに来る!?　馬鹿な……見抜かれただと」
「落ち着け。まだ避けられる!」
　雨忍の二人は驚きながらも飛びのいて回避しようとする。本来であれば大仰に喋る必要はないが、三人目へ問題ない事を告げる為にあえて大声でしゃべったのだ。
「本命の風遁、烈風掌!」
「これぞ連携技、七連鳳仙花ってな!!　……サクラ、行け!」
「了解」
　ナルトが違う角度から風遁を使う事で、火遁と手裏剣は軌道を変える。それは原作の鳳仙花以上の威力に強化され、逃げている雨忍二人のもとへ向きを変える。そして残る一人にサクラが着地しながら巻物を開いた。
「……口寄せ首切り包丁」
「ひっ!?　降参だ、降参!」
　アイテム収納用の巻物だから印を使わないし言葉も不要。だがサクラも何か術名を口にしたかったのか、首切り包丁の名前を唱えていた。着地と同時に大刀が地面を深く抉り、その威容の前に三人目は即座に降伏する。術の様に唱えたことで追い打ち攻撃でもあると思ったのか？

「いえーい！　上手く行ったってばよ！」
「威鋭？　でも成功して良かった」
「そうだな。肉弾戦が苦手な奴だから簡単だったが、中忍試験が終わったら次に備えて三人で特訓するか」
　雨隠の連中は二人が大怪我で一人は降伏。一度見つかると幻術士の弱い所がモロに出てしまう。イタチの様に全ての術が練り込まれている相手と違って、下忍レベルでは仕方ないと言えた。
　咄嗟の連携にしては上手く行ったが、持ち技としての連携にするならもう少し練り込めると思う。突風を起こして俺とサクラが斬り込んでも良いし、火遁を目晦ましにするならナルトとサクラ。二人でなくとも影分身と火遁分身を特攻させてサクラがトドメでも良いはずだ。状況を想定して何パターンか連携を作るのも良いだろう。

　その後は雨隠れの三人を縛り上げ食料は集めずに移動を続ける。
　前にも用意していたように収納用の巻物に色々入れてあるからな。数日なら兵糧丸でも問題ないし時間の方が惜しい。大蛇丸が探していると仮定して、まずはその手から逃れてからでも良いだろう。
「見つけたぜ！　試験会場でのこれで借りを返してやれるってもんだ！」

「焦りは禁物ですよ、ザク。ボクらが手の内を見せてないように、向こうもまだ見せてませんから。まあ、うちは一族は写輪眼でしょうけど」

だが、思いもかけない相手と遭遇した。原作ではもっと後で出会うはずの、音忍たちである。

（大蛇丸じゃないのは助かるが、このタイミングで音忍？　しかも昼間に？）

次の日も大蛇丸は現れず、最初は上手く行ったと思った。だが、妙だと思ったのは音忍たちが昼間にやって来た事だ。かなり手早く移動したので日程的にはおかしくはないが、ここまで都合が良いだろうか？　音を拾って動く奴らならば夜中に仕掛けてきてもおかしくはない。

原作では音の三人は元は能力を測るための『秤』だった。俺がどんな動きをするかを確かめるというよりは当て馬で、呪印に頼る様に追い込み暴走させて馴染ませる為の使い捨ての駒だったという感じかな。

（考え方は幾つかあるが。一つ目は原作の方が早く見つけ過ぎてイレギュラーで、元の予定はこの順番で正しいという物。つまり大蛇丸はこの後で、いま眺めている真っ最中という考えだ）

しかしコレはおかしい。原作で偶然に大蛇丸が先に見つけたのならば、『手を出さずに待つ』という事もできたはずだ。つまり原作においてはどうあがいても、ああいう感

じになるのが自然だったことになる。
（次は中忍試験前の動きの他に、雨隠れとの戦いを見ていて脅威に思ったから戦力を削りに来た？　馬鹿な、あの大蛇丸が今の俺たち程度を脅威に思うはずがない。俺も万華鏡どころか新術だってまだ使ってないしな）
　ただ可能性としたら近いのはこちらだ。というよりも大蛇丸に何かの目的があって音忍たちをぶつけたとしか思えない。だとしたら最悪を考えておいた方が良いだろう。
「あまり時間をかけて居られねえな。多分、あいつらは他の連中と組んでる。草忍か滝忍か知らねえけどな。そこで……だ」
「考えられる話だな。こちらも同期の元に向かっているわけだし」
「ずっこいってばよ」
　嘘は言ってない。大蛇丸はおそらく草忍に化けてるしな。目の前の三人以外も居るとだけサクラとナルトに伝わりゃそれで良い。
「そこで……だ。あの連中は大技でさっさと片付けて、次に行こうぜ」
「ん？　ああ、そうだな。任せておけ」
「あん？　あー。了解だってばよ！　任せとけ！」
　俺は話しながら小さくハンドサインで『任せる』とだけ送った。この状況でサインを出す意味は明らかだ。大技に紛れて移動するので、後は任せたという意味である。

「それは聞き捨てならねえなあ！　できもしねえことを口にすんなよ！」
「お前の中ではそうなんだろうな。簡単だって証拠に、こっちの手札を先にみせてやるよ！　忍法、火産霊・二の式！」
「炎の剣!?　そんなモノが何の役に……」
　しゃべってるザクとかいう男を無視して、顔に包帯を巻いた男の方へ左手で、長さを増した赤火刀を向ける。他の連中が何をしようと向きを変えはしない。その動きに心当たりがあるのか、包帯男は汗を浮かべている。
「まさか……あれだけのやり取りで」
「そうだ。お前の籠手は派手さを利用した囮なんだろ？　実際は仕込んだ音叉なり笛で攻撃する。別に香料でもできるだろうが、てめらは音忍だしな。となると残りの二人も推測できる」
「馬鹿な。これが写輪眼だと!?　いいや、ただの偶然だ！」
　いいえ、原作です。もっとも一応言い訳くらいは用意してある。ヒナタは絡繰りを見抜いて柔拳の八卦空掌でチャクラの経絡を焼いた。そして小隊というのは同じ能力を三人揃えたりはしない。
「一人は風遁の強度を使い分け援護も主力も張れる奴で、もう一人は反響音を使ったベタな幻術士。どうだ、違うか？　そこまで判っていて俺たちが負けるとでも？」

「なんか頭良いチームっぽいけど……サスケ、スゲエってばよ!?」
「ク……。ですが、知識では決定打ではありませんよ」
　一人が音波攻撃なら、それを増幅する奴が居てもおかしくないわけだ。そんな感じで推理したという態(てい)をみせるとナルトが素直に感心したことにより説得力を増し、包帯顔は渋面を滲ませる。勝負がまだってのは同意するが、こっちには別の予定があるって意味だ。
「それじゃあ時間も押してるしさっさと片付けるぞ！　火遁……豪火球の術」
「っ！　行くぜえ！　風遁、烈風掌！」
「技名は七連弾鳳仙花……だったっけ？」
　俺は威嚇に使った赤火刀を地面に刺してから豪火球を放った。サクラには一度見せたこともあり、赤火刀を地面に刺したら分身になると教えてある。もちろん大技を仕掛ける意味もあるが、俺自身は姿を消して別の場所に向かうためだ。
　ここから俺は二人と別行動。あいつらの得意術はバラしてやったり、原作と比べた互いの疲労度・負傷度や、以前からの修行も含めたら考えたら負ける心配はない。
　二人の傍に火遁分身を置いて俺はその場を離れた。
　目指すは戦いの様子をジックリ観察でき、同時に何かあったら即座に関与できる位置

だ。単純な連係プレイなら他に幾らでも良い位置があるが、俺が不利な時に『力が欲しいか？』と尋ねたり、呪印を当てるために都合の良い位置は別物である。
「さてと、あいつらが片付けるまで……増援を食い止めるのは俺の仕事だよな」
「無理よ」
俺がやって来たことで茂みの向こうから編み笠姿の三人、そのの中から髪の長い（？）が現れる。テレビを見てるとナルトの次に聞き慣れる独特のしゃがれ声。もはや親の顔より見慣れたとは言わないが、それででも外見を想像するのは容易過ぎる。
「あなた達はその辺で遊んでいらっしゃい……。ここは私一人で行くわ……」
「……」
やはり舐めプと言おうか、そもそもの目的が見分だからか。大蛇丸が化けたらしき女は配下二人を下げて不敵に笑った。
俺は静かに略印を描く。再不斬の霧隠れを参考にすることで、大げさだが判り難い印の配置。そして特定の場所に線を引き、あるいは叩く大蛇丸流の口寄せも参考にしている。
「せっかくだ。こいつの試し切りをさせてもらうぞ。忍法・火産霊、四の式！」
「……私の知らない忍術？　ふふふ、サスケくん。貴方は私を愉しませてくれるわね……」

　オレの前に紫色の炎で造られた鏡が現れる。大蛇丸はその鏡を見てニィっとわらうが、楽しみが上だったからか俺が想定していたからか殺意は死にたくなるほどには感じなかった。怯えさせて術を見れないのが残念だと思うからか、それとも俺が強くなってこの程度の殺意では動じ無くなっているのか。
（さて、機先を制したとはいえ。ここから先が面倒なんだよな）
　力量差を考えればこの時点で影分身って可能性もあるし……イザとなれば蛇の体で生まれ直せる。加えて呪印を付けさえすれば、その時点で体を乗っ取る事すらできるだろう。
「さあ、サスケくん。その術には何の意味があるのかしら？　盾には見えないし……面白ければ面白いプレゼントをあげるわ」
「要らねえよ。つか、そういうのを焼き払うための術さ」
　そう言って加具土命と軻遇突智、二つのカグヅチを使うために万華鏡をオンにする。この炎の鏡の効果として、万華鏡の存在を隠す意味合いもある。そして性質変化を使って徐々に、俺の体に馴染ませていった。
「そら、これで判るだろ？　こいつは俺の術や代謝を強化し、逆に俺を襲う敵や呪術を退ける退魔の炎だ」
「炎の中に体を……火遁のチャクラモードなの!?」

炎なのでズブリとは音がしない。腕を突っ込むと、チリチリと身を焼く感触がするが、栄養ドリンクをガブ呑みしたような高揚感に包まれる。俺のチャクラに合わせて変質させたわけだが、モデルにしたのは白の『魔鏡氷晶』と再不斬が使った水遁強化印だ。

「正解。まだまだ未完成だから自動とは行かねえがな！　代わりにこういうことができる！　火遁……紫双鳳仙花!!」

「っ！　この火力!!　そして私の知らない印を!?」

水遁を強化する追加印を参考に火を強化する印を創ってみた。今まで存在しなかったのは、単純に炎の中に飛び込んで使う馬鹿が居なかったからだ。飛んで火に居る夏の虫というが、心頭滅却しないと使えない自爆技だからである。

もちろん俺とてこの状態でなければ使えない。軻遇突智で火を自分に合わせることで安全に追加印を使い、同時に火遁分身ではなく、白の自由意思で俺を助けようとしてくれなければ、ここまで手裏剣やら火遁の援護を期待できないだろう。

「通常の鳳仙花よりも数段上の威力……。いいわ……。貴方は私の想像を超えてくれる。お礼の一つもしてあげないとね」

「だから要らねえっってんだろ。火産霊、二の式！」

大蛇丸は蛇のように体をくねらせ、笑って燃え上がる体を樹にまとわせた。ズルズルと移動しながら炎を残していくのは、俺が写輪眼に覚醒しているから誤魔化す為だろ

う。俺は先手を打つべく、再び炎の剣を呼び出した。
「ふふふ。その可愛い鏡ごと吹き飛ばしてあげる」
「……見えてるぞ。そこだ！」
僅かに動きを止めて風遁の印を組む。チャンスではあるが、既に影分身。動きながら炎の痕を樹に残したのは、動きに継続性があり、変わり身で入れ替わったことを教えない為だ。もし万華鏡を使っていなければ、俺も騙されただろう。
炎の剣を投げつけると、俺の死角に回り込もうとした大蛇丸に突き刺さる。すんでの所で避けられたが、これは牽制を兼ねた一手目であり、三の手用でもあるので問題ない。即座に火遁の印を組んで二の手を準備する。
「未完成というのは本当の様ね。そこまで長い印だと私の方が先に決まるわ。風遁・大突破！」
「そうかよ！　火遁……」
「馬鹿な……分身とはいえ、私の風で消えないですって!?」
影分身の大蛇丸が強烈な風遁を掛けるが、俺だけの炎ではないので消えはしない。加具土命の炎とはいえ火力を抑えたので確かに消えはする。だが……この炎は白と再不斬の二人を葬列した炎なのだ。二人分の火力で俺の視力を落としてくれたほどである。この程度の炎で消えたりなどはいない！

「こうなったら……」
「いいのか？　そこで隙を作っても。火遁・紫双豪火球の術」
「っ!?　離れなさい！」
本体の方が印を組み最大風速の風を吹かせようとするが、その前に俺の強化豪火球が決まる。だが、そのことに対して分身が本体に避難を促したのではない。
「……捕まえた」
「っ!?　火遁分身!?」
炎の剣として投げていた火遁分身が姿を現しながら自爆する。そこへ強化された豪火球が直撃し、周囲を火達磨にした。
「そういう事……炎の剣は武器であり、同時に分身体……」
「繰り返す必要はあんのか？　ま、そういう事だよ」
「くくく……。良いわ、良いわね！　サスケくん。貴方は……あのイタチよりも秘めた眼をしているわ」
納得する分身と、狂笑を浮かべる本体。あれだけの火力で死なないとか、こいつどういう体をしているのかと思たが……よく考えれば大蛇丸だった。それに火遁が得意なうちは一族相手である。耐火の準備をしていないといえば嘘だろう。
まさかここで、俺相手に使うとは思わなかっただけ。アンコや暗部と同時に出逢い、

最悪、三代目の介入を考えて防御用に用意していたのだろう。ズルズルと皮を捨てて脱皮しながら、大蛇丸は引き下がっていった。

「ここまでにしましょう。一応……あの三人も拾って帰らないといけないのでね……」

「お優しいこった。次に会った時に改造されてねえといいけ……ど……」

　穢土転生の生贄に使うためか、回収を兼ねて大蛇丸は音忍の方に向かう。俺もそれに追随して、ナルト達が捕まらないように追いかけた。

「てめえ！　ナルト達に手を出してみやがれ！　四方三里は丸焼けにしてやるぞ！」

「ああ……コワイコワイ。そのまま成長して頂戴な……私好みに育つまでね……」

　大蛇丸は這う様に移動しているのだが奴の方が速い。こちらの火遁チャクラモードは攻防一体だが、雷遁チャクラモードほど身体を強化してくれない。

　焦る俺を尻目に本体が三人に撤退指示をして下がり、影分身の方は最後っ屁に大突破をかましていきやがった。

「なんだったんだあいつら？　特にあの気味の悪い奴」

「大蛇丸だよ」

「三忍の一人で里抜けした？」

　ナルトは奇妙な顔をしてサクラは驚いていた。逃げられて悔しいというよりは、よくぞまあ無事で済んだというべきだろうか？　念の為に二人に呪印が無い事を確かめて、

この日は全て休息に当てた。

幾つもの三つ巴

第二の試験に関しては、最期に雨隠れの忍が居ない代わりに、ヒナタたちが罠を解除しながら出迎えてくれた。

塔に入ってイルカ先生が出てくるところまでは同じだったのだが……。そこからの変化がとても大きかった。会場に木の葉の旗が掲げられ、その周囲に今回参加する里の旗が並ぶ程度は序の口だ。奇妙なのはトーナメントが既に描かれている事である。

「厳しい第二の試験を突破したこと、まずはおめでとうと言っておこう。これより始まる第三の試験が始まる前に、一つだけ告げておきたいことがある」

言い回しが微妙に違うなと思った時、それぞれの旗に明かりが灯ってピックアップされていく。それもスポットライトで照らすのではなく、全ての旗に共通する……原作には無かった共通項だ。

（つ!?　これが正式なマークだとしたら……。三つ巴が全ての旗に？　写輪眼じゃないのか!?）

最初に略紋ではない木の葉のマークを見た時、三つ巴が追加されていたのを覚えている。てっきりうちは一族を取り込み、友好関係を築いていることをアピールする物だと思っていたのだが……。どうやら違うようだ。自意識過剰で恥ずかしいと思うべきなのだろうか？

「かつて初代様たちの時代より、何度も忍界大戦が行われてきた。その影に謎の組織がおり、見つけ出したものの……初代様たち屈強な忍びの力をもってしても抗いがたいモノであった」

そこから『先は良く知っている』からこそショッキングな話だった。どうも暁の様な組織が他にもあり、その組織とそれぞれの里が争ったらしい。結果としてはボロ負け。

「でもさでもさ、初代様たちなら勝ったんだろ？　でなきゃ里が残ってるわけねえもんな？」

「そやつらとの戦いに白と黒のバケモノ達が介入して来おった。どちらにも群がり増え続けるというな……。今の世の中の平和などその介入、そして殺し合いではなく同盟が必要だという意識によって保たれたという、危い偶然にしか過ぎぬ」

ナルトの疑問に三代目が答えるには、謎の組織に敵対する『白と黒のバケモノ』が居たおかげで漁夫の利を得たのだという。

（バケモノ……それも白と黒で無数に存在して幾らでも湧いてくる？　それってゼツ

じゃないのか？　確か……ゼツ達はカグヤが敵に備えたモノだと言っていたような……）

もしかしたら謎の組織というのはボルト時代の敵なのだろうか？　だとしたらこの世界が原作と違うのは初代火影たちの時代に、ゼツ達が壊滅したことが影響しているのかもしれない。

「謎の組織は壊滅したかもしれないし、していないかもしれない。中忍試験が合同で行われるという本当の理由。それは同盟の里にどんな忍が居り、そやつは実力的に、あるいは人格的に信用できるのか？　それを見定め、命がけで情報を収取する為の場なのだ！」

五影以上の存在が居るかもしれない。ゆえに切磋琢磨し、同時に同盟者の情報も知る必要がある。そんな感じで締めくくられ、三代目の解説は終了した。

（これは……原作よりも良い状態なのか？　それとも変化し過ぎて悪い事なのか？　くそっ。判らない事だらけだ）

ゼツが居ないというのは良い事の筈だ。しかしソレは忍界全体であって、俺たちの目の前に関しては判らない事だらけだ。大蛇丸、イタチ、そして暁はどうなっているんだ？

謎の組織に対する警告と、同盟の必要性に関して三代目は語り終わった。
そこから第三の試験を担当する試験官よりトーナメントに関して説明がされる。同時に各班に渡される番号付きのボールもまた、順番と何より数が違うような気がした。
「ゴホッ……第三の試験において試験官を任ぜられました月光ハヤテです。えー。第一の試験官や火影様の説明にありました通り、この中忍試験は実力を示す場であると同時に情報収集の場です」
「っ！　まさか……」
説明が始まって暫くして早速、砂の一人……テマリが青い顔をしている。そういえば原作でＴＯＰだったはずだが、この世界でも一番の塔入りしたのだろう。ということは他の忍の情報は何も得てないという事だ。
「よって怠けて居なければですが時間を掛けたチームには情報があるでしょうし……」
「ちょっと待ってよ！　あたし達は誰よりも早く合格したはずだけど？　そこを考慮してもらわないと！」
主に我愛羅というかガーラの血を鎮める為だったと思うのだが、まあ気分は判らないでもない。忍は裏の裏まで読めとは言うが、歴代最高の速度で合格したのにペナルティの方が大きいのではやってられないだろう。
「ゴホッ。……罠を張るなり眺めておくなり出来たと思いますが……まあ安心してくだ

さい。早く到着したチームほど実力を有益に示すチャンスが与えられます」
「そっ……それなら……。くっ。こっちの気持ちも知らないで……」
　仲間が暴走して他の連中を殺さないようにしたと言いたいのだろうが、普通は通じないよな。そういう強い事は強いけど人格に問題がある忍を用意するのも、戦略なんだしその分楽勝で通ったはずだ。ちょっとしたメリットがあるだけマシなのではないかと思う。
「このトーナメントにある枠の番号と手元のボールにある番号は連動しています。どのボールを誰が持つのかは好きに決めてください。早ければ早いほど有利に成っています」
「一番上は予選突破としてシード権ってことね？　まあ納得してあげるわ」
「ウゲ。オレらはシード権って無理じゃん。めんどくせっ」
　テマリとシカマルの言葉を受け冷静になってトーナメントを確認してみた。本戦らしき十枠の中に幾つかの番号が振ってある。Ａツリーが四名でその中に一枠のシード権、Ｂツリーが六名の中にも一枠のシード権だ。その下の予選枠に関しても、Ａツリー狙いは一回勝てば予選突破の比較的楽な場所だが、Ｂツリーの方は更にもう一試合ある場所が多い過酷な場所に分かれている。
（露骨に分かれやがるな。最初に合格した砂はＡツリーの予選突破として、二番手はお

そらくガイ班かな？　音が逃げまくって速度勝負に出たなら話しは別だが）

本来は相当なペースで抜けたはずの紅班はナルトを出迎えに残っていた。カブトが俺らを調べに来たのは原作と同じだったので、この三班が最期に回るのはある程度決まっている。合格した班の数自体は同じなので、ある程度の予想が立てられるだろう。

「カンクロウ的には……。カラクリはなるべき見せたくねーじゃん」

「ハイ。これね」

「キャハッ。じゃあこれだねっ」

早速に砂がボールの分配を始めているが、当然の様に傀儡使いのカンクロウが予選突破のシード権を持って行った。性格的に好戦的なガーラが三巡目だろうが……。しかしカンクロウの奴、自分の名前を呼称する一人称か。珍しいな……というか原作にそのタイプの一人称の奴って居たっけ？　やはりアイツ傀儡と入れ替わってるんじゃないか？

「どうするリー？」

「決まってます。ボクは一番最後で！　その方が活躍できる気がしますから！」

「……まったく、そう言うと思ったわ。ハイ」

やはりガイ班が二番手か。おそらくテンテンがシード権で抜けるだろうからネジが中間だと思う。原作とだいぶ違うが……こうなってくると面白く成って来たから不思

議な物だ。誰がどの番号なのか、トーナメントの何処に名前を入れるかで展開が変わるというのは面白い。

「サスケサスケー！　オレ達はどういう順番で行くってばよ！」

「どうせシード権とかないしな。サクラが体術メインで俺らはバランス型だ。順番は決めずにサクラに合わせて様子を見よう。どっちみち最期の危険な役は俺が行く」

「……了解」

このトーナメントが面白いのは、相性差を自分たちで求められるという事だ。原作でリーが我愛羅、テンテンがテマリにボコられていた。しかし相手さえ違えばこの二人はかなり強かったのではないだろうか？　もちろん特殊性の相性よりも実力差も重要だ。サスケもチャクラ吸収とか言う、あの時点で相性の悪い奴だったが実力差でなんとかなる相手だったしな。

トーナメントは順当に良い場所から埋まっていく。

意外というか原作通りだったのはヒナタの判断だ。彼は危険箇所にボールを入れ、有望な下忍に対して勝負を挑んだ。塔に入った順番でトーナメントの優先権が手に入るという条件に対し、最後までナルトを待とうと提案した責任を取るらしい。

「ヒナタ！　止めなさい！」

「いいえ。私がネジ兄さんの相手をします。この順番になったのは私のせいですし、修錬はちゃんと積んで居ますから」
「本気なのか？　宗家ぇぇ！」
　紅先生が止めるのも判る。ヒナタが選んだのは先に順番を埋めているネジの場所であり、彼は日向始まって以来の天才と言われている。俺から見ると原作通りに収まったと言えるのだが、驚きを隠せないでいた。しかしこの時期のネジってかなり沸点低いよね。生い立ちからしてしょうがないんだけどさ。
「オレを侮辱するなら容赦はできんぞ！」
「男子三日会わざればと言います。以前の私を見てそう認識しているのであれば間違いだと言っておきましょう」
（……ん？　なんでこっち睨むんだ？）
　ネジと話しているはずのヒナタは、不思議なことに俺の方を睨んだ。おかげでネジは更に激高しているが、心当たりがないのでどうして睨まれたのか首を傾げるばかりだ。
（しかしヒナタがネジを取ったか。まさか原作通りになるとは思わなかったが……おかげで読み易くなった。カブト班が五番目、カカシ班が六、そして紅班が七。だがヒナタがネジに挑んだことで、三周目の難易度がかなり変わって来る）
　去年の下忍最強とも言えるネジは最悪の相手であり、俺の他に原作を知る者が居ても

下から二番目の相手だ。その相手をヒナタがしてくれるならば申し分ない。最悪でも原作と同じように上忍たちの介入が期待できた。

（三周目はガーラだが……そう来るよな）

「クク……こーこっ♪」

「おいおい、マジかよ。あいつ」

ガーラは躊躇なく戦闘回数が一番多い場所を選んだ。十枠の内の二枠が埋まって居るので、残り八枠を十九人で争う事になっている。どうやっても貧乏くじを引くやつが出るのだが……。

その内の一つをガーラが率先して埋めたのだ。最終手番になるキバが青ざめるのも無理はない。せっかくヒナタがネジの場所を埋めたのに、死神の相手とあってはそうなっても仕方がないだろう。

「やりますね！　それではこちらをボクが埋めます！」

対抗するようにリーが別の難関コースを選ぶ。自分ルールで難関を選んだ方が強く成れると考えたのだろう。

（さて、どうしたもんかな？　放置してキバを死なせるのも寝覚め悪いし、どうせ本戦でぶち当たるなら最初から戦うか？　いや、原作のキバを見る限りさっさと降参するかもな）

そう思いながら最後まで悩んでいると、思いもかけぬことが起きた。ある意味で原作らしくなく、ある意味では原作らしい出来事だ。

「ボクは此処にしますが……試合開始から三分から降伏を判断します。宣言しなくとも五分に達した時点で敗北を認定なさって構いません」

「何……？」

「ホウ……そう来るとはな」

カブトの宣言にガーラが凶悪な目を向けて、代わりに三代目が感心したような目を向けている。これは原作よりも好印象であると伺えた。

「確か試合中の降伏は認められていましたよね？」

「情報集めであり実力を競い合う場でもある。それもまた選択肢の一つじゃろう」

ルールを確認してあくまで情報を抜く為だと豪語するカブトに、三代目は好意的な視線を送る。まあ判らなくもない。カードゲームであれば最弱の札で最強のカードを使わせるような物だ。しかも相手の把握する情報収集というオマケ付きである。

「……ただし、口を塞がれてから殺されても文句を言わぬように」

「それなら……構わないかな。タイムアタック♪」

同時にガーラにも一定の配慮を見せる発言をしていた。腕を競うという意味では絶対防御のあるガーラにとって、時間制限アリで誰かを倒すという経験は初めてかもしれ

ない。まさにゲームに挑む子供の様だ。
「という事はお前との勝負みたいだな」
「ちっ。あいつとの戦いよかマシだが……やるっきゃないなら、暴れてやるぜ！」
あからさまにホッとされるのは癪だが、キバはガーラを避けたことで安心したようだ。だが、うちは一族を舐めてもらっちゃ困るぜ！

トーナメントでの読み合い

トーナメントの形状と埋まり具合を見て色々と類推できることがある。
そして面白いのは試験官も三代目も『第三の試験の予選』の話をしていないのだ。原作と違い始めたことで驚きはしたが、よくよく考えればこのトーナメントは面白い題材だった。

「サスケ。良かったのか？」
「そうそう。オレらと比べて戦う回数が多くなっちまったけど」
「俺なら構わないさ。それに……戦う回数が多いという事は、中忍としてのアピール回数が増えるという事でもあるしな」
サクラとナルトが心配してくるが俺は首を振っておいた。もし予選の動きや判断も参考にしているのだとしたら、戦闘回数が多い事は無駄にはならない。何処かの世界のハンター試験が確かそんな感じの内容だったと思う。
「……？」

「どういうことだってばよ」
「大名天覧試合出場が名誉ってのは良いさ。だが班のメンバーをそこまで進ませる判断や、戦闘でのキレを評価しているかもしれねえ。そう考えると、このおかしなトーナメント表にも意味があると思わないか？」
　このトーナメント表は幾つもの三つ巴があり、シード権込みで戦闘回数が歪になっている。そしてその一部差の配置も露骨で、各班がどういう判断をしたのか一目瞭然なのだ。

「シードの1・2はまあいいさ。だが三番目から七番目まではAブロック……いや、Aツリーかな？　そこに集中し易くなる」
「そりゃ戦闘回数が少ねえってばよお」
「だが私や五番のツルギとか言う男の様な奴も居るが？」
　基本的にAツリーは一回戦闘すると天覧試合に出れる上に、普通のトーナメントだ。だからこっちに集中するのは当然だが、サクラは特に戦闘経験のあるキンとかいう音忍を選んだ。手の内を判っているから戦い易いからだ。
「あいつはカブトの班だろ？　同じようにデータ収集と見ればいいさ。そう考えればヨ

ロイってのもそうだな。後は相手の戦闘回数が多くなるのを狙っているのもあるか」
「そっかー。そういやあの人もガーラとかいう不気味な奴選んだもんな」
「砂を始めとして同じ班を避けると、こうなるか」
そんな感じでトーナメントの埋め方に特徴が出る。基本は勝ち上がってきた相手を狙ったり、チームメイトを避けて登録している。
ガーラの様に戦闘したがったり、ヒナタが責任を取ろうとした事で判り易いズレも入ったことでその差が露わになったのだ。チョウジに関しては隣のブロックでも良いはずだが、もしかしたら原作の紅班の代わりにアスマ班が砂の忍を見かけたのかもしれない。
「ってわけだ。トーナメントだけでなく的確な判断も見られてるってことなら、お前らも戦闘で気を付けろよ。自爆特攻とか勝てても点数低いんじゃ意味がねえ」
「了解した」
「あったり前だろ！　オレは余裕だぜ！」
そう言って二回と言うか踊り場で待機する為に向かっていく。と言っても俺は戦闘回数が多いから、直ぐに出番な訳だが。
予選とも言える段階で戦闘回数が多いのは三組。オレとキバ、ガーラとカブト、そし

てリーとチョウジの戦いだ。
　籤で順番を決め、最初に戦ったのはリーとチョウジ。この二人に関しては原作よりもチョウジが頑張ったが、重りを外した上で勝負が付いた。連続体術の蓮華でないから判り難いが、チャクラ自体は強烈だったので八門の一つ目は解放してたのかもな。
「偶には真面目に行こうかな?」
「キャハハ♪　あっそぼう!」
　そして次はカブトとガーラだ。カブトは兵糧丸を口にすると印を組んで手にチャクラを集めていく。ガーラの方はいつも通りに砂を展開していった。
「なんだ?　指の先に何か見えるが……」
「たぶんチャクラで造った手鉤だな。極限まで出力を絞って攻撃範囲を拡張してある」
　カブトは原作と違ってチャクラのメスを使って居ない。手甲の先から伸びる爪を作り上げ、格闘戦の補助を行っていた。サクラの質問に俺は写輪眼で見た光景をそのまま伝えた。
(偽装として大げさに使ったのか。本来なら見せなくても良い技だが、ガーラの能力を見つつ真価は隠すってとこかな)
　神経や筋肉だけを切断するメスではなく、派手な格闘戦を行いつつ手鉤の形状で使って見せれば、カブトが本来は医療忍者で繊細な動き操作をするとは気が付かれ難いはず

だ。むしろ大技を警戒させることで暗殺はし易くなっているかもしれない。
「ヒナタも同じ事を言ってたぜ。自分よりも上手く正確に出来てるって褒めてた」
「ヒナタはあの手の能力を修行中なのか。俺らだから良いけど、他の里には黙っとけよ」
どうやらヒナタはサービストークで柔歩獅双……双獅だっけ？　を習得中であることをナルトに教えたようだ。余裕なのかというと、おそらくはバレても良いと判断したのだ。第一の試験を考えれば、八卦空掌の方が厄介だからな。もし俺が信じたらラッキーだという程度の牽制だろう。
「まったく。硬くて攻めきれないな。でも……足元や中身はどうかな？」
「あれ～」
やはりというかチャクラの手鉤も砂の防御には通用していない。砂の自動防御を掻い潜るので手いっぱいだ。仕方ないので足払いから変則的な裏拳を放ったようだが……。
「おっ。スッゲー！　カブトさん、あいつを掴んで振り回してる！　凄い怪力だってばよ！」
「チャクラは巧く練るとパワーやスピードが出せるんだ。サクラもやってるだろ」
「うん」
どうやらカブトはチャクラの手鉤を引かっけて投げ技に切り変えたようだ。最初は

バランスを崩す程度から始めて、最後にはジャイアントスイング！　そこからワンハンドでダイレクトに会場の外壁にぶつける大技を見せた。
「キャハ♪　……おめめグールグル。あはは。初めて遊んでもらったよ？」
「マズイな……」
「ああ……」
　叩きつけた衝撃が効いているようだが、ガーラにはまだまだ余裕が見れた。表蓮華の様に高い場所から回転付きで落とすわけでもないので、あくまでクラっと来た程度だろう。砂のヨロイこそ剥げたが……瓢箪を構成する砂の形を崩さずにそのまま立ち上がっている。
「ハア？　うちの妹があの程度でやられる訳ないだろ？　……血が登って殺さないかだけが心配なんだから」
「そっちの意味じゃねえよ」
「っ！　ちっ。マズイじゃん。このままじゃあガーラが消化不良だ」
　テマリがむかついた様子で睨んできたが、別にガーラなんか心配していない。俺の様子から察したのかカンクロウが気が付いたようだ。よく考えれば原作でもこいつの方が頭脳派なんだよな。テマリはアレで脳筋だし。
「え？　どういうことさ。何かあるならガーラに言ってやらないと……」

「もう遅いじゃん」
「フフ……中々の強さですね。久しぶりに熱くなりそうです」
テマリが訳も判らずに首を傾げるのに対しカンクロウは首を横に振る。それらを尻目にカブトは一人独壇場にあった。この後を考えたら砂の連中が気の毒でならない。
「ボクはこの試合……棄権させていただきます」
「……!?　どうして！　これからが楽しいのに！　どうして！」
「落ち着きなさいガーラ！　いい子だからっ」
にこやかな顔でカブトが敗北宣言して、壇上には煮え切らないガーラが憤怒の表情を見せていた。今にも暴れ出しそうなガーラをテマリたちが必死で止めている。
「どうしてだってばよ！　カブトさんなら……」
「落ち着けナルト。三分目から降参を考え始め、五分経過したら負けで構わないって言ってたろ？」
「これが情報屋の実力……」
忘れていたのか驚くナルトと違い、覚えていたサクラは素直に脅威を感じてくれたようだ。砂の鎧がはげるところまでは見たので、見せてないのは瓢箪も砂製ってのと、一尾の人柱力ってことくらいかな？
ともあれこの試合で敗北したものの、カブトが一方的にガーラの秘密を暴いたのは言

うまでもない。そして……この後にガーラと戦うのは、チャクラを奪うヨロイなのだ。その事を踏まえれば、かなりのポイントが付くのではないだろうか？

　という訳で次は俺とキバの試合だ。血沸き肉躍り過ぎて隔離されているガーラには悪いが、目を付けられない内にさっさと終わらせてしまおう。人柱力でなければ『目』は合わせておきたいのだが。

「あんまり舐めてんじゃねーぞ！」

「舐めてなんかねえよ。それどころか擬獣忍法は警戒している術の一つさ」

　キバは中忍試験がピークだったと言われているが、俺はそうは思わない。単純にデザイン上の不都合に巻き込まれただけではないかと思う。リーの活躍がガイに喰われたのと似ていると言えば、判るだろうか？

　キバが覚えて居そうな術を他の忍者が使ったらそりゃ成長しなくなる。そういう事が長引いていくと、例えキバが居たら活躍するのになあ！　というシーンが来てもキバの出番なんかあるわけない。ヒナタの様にヒロイン枠なら別として。

「てめーの姉ちゃんだか兄ちゃんだかが来てたら俺は負けてたかもな」

「そ、そうか？　擬獣忍法が強いこと知ってるなんて判ってんじゃねーか……あ？　待てよ、オレは弱いってのかよ！」

真面目な話、凄まじい機動力とパワーを兼ね備え、それを二人分で使える擬獣忍法は写輪眼にとって相性が悪い。もし経験も豊富なキバの姉だったら、極めて不利だっただろう。少なくとも、今のキバみたいに睨み合ってはいないと思う。

「判ってんじゃねえか。てめーが負ける理屈はたったの一つだ。うちは一族を舐めんな！」

「速っ!?　嘘……だろ？」

俺はキバより速く行動し、キバよりも先に手裏剣を投げる。そして奴が回避する予定地点へ先にクナイを投げ、それを邪魔するであろう赤丸へ容赦なく火遁を放つ準備をした。

「くそっ！　なんでオレよりも速やっ……下がれ赤丸！」

「てめーが遅いんだよ！　火遁、豪火球の術！」

練り上げた火遁だが重視するのは速度と範囲。少々の移動力では避けれないように放ち、キバと赤丸がダメ元でダッシュするよりも、仕方なくバックしながら耐える方にシフトを切る。そしてオレは奴が予想する左右でも上でもなく、真正面から火球の中に突っ込んでいく！

「どこだ！　右か、左か……う……ウオオオ!?」

「ここだよ！　」

俺はあえて自分から声をかけ、腕でクナイを防がせてメンチを切りながら頭突きを掛ける。もちろん狙うのは打撃なんかじゃない！　そのまま奴が逃げようと選択する右方向に手裏剣を投げ、その後ろにもう一枚手裏剣を投げ込んでおく。
「解毒しなくていいのか？　体を活性化させた状態で神経毒を喰らうとフラ付くぜ？　もう赤丸の動きすら見えてねえんじゃねえのか？」
「だっだまれ！　毒なんて汚ねえ真似なんかしやがって！」
もちろん神経毒なんか使ってはいない。キバの様子がおかしいことを外野に気が付かせないため。そして何より、キバから見た赤丸の動きが速く見え過ぎる事から注意を逸らすためだ。
本来のキバは俺よりも早いはずだ。なのに何故？
それは睨み合うたびにカカシが再不斬戦で使った洞察眼・催眠眼やら透遁の応用を行っただけ。あとは幻術で多少なりとも反射速度を落とそうとしたくらいか？　それに関しては実際にどこまで反射が落ちているかは分からないが、やらないよりは良い。まあ専門家じゃない俺じゃあ、詳しい幻術とか使えないしな。タイムラグを入れるだけで精いっぱいだ。
「なんだ忍者なのに毒はダメなのか？　判った。テメー好みの体術で勝負を付けてやるぜ」

「う、嘘を吐け！　騙してまた何かする気だろう！　それとも火遁で……」
　ここから先は嘘でも幻覚でもない。正面から戦って格闘戦でカタを付けるだけだ。既に追い込んでいるし、余計な事をするよりもその方が速い。
「宣言するぜ。俺は真っ直ぐ行ってストレートで殴る。その後は連続体術でボコボコだけどな」
「だっ黙れよ！　擬獣忍法……！」
　印を組んでチャクラを手足に回しているあいだにストレートでブン殴った。そのまま態勢を崩したところに、足払いを掛けてからリーを真似た連続蹴りを食らわせていく。さっきチョウジに使ったのは連携技じゃなかったから、どうしてもパワーで追い込む技になるんだよな。
「それまで！　勝者、うちはサスケ！」
　ここで審判である月光ハヤテが待ったをかける。既にボコボコにしているし、キバが多少冷静になっても無理だと判断したのだろう。実際、キバは倒れたまま唸るだけで起き上がってはこなかった。
「写輪眼相手に目を見るなというのは基本だが、下忍には酷な事かな。しかし昔のカカシを思いだ……」
「お見事。まさかここまで真似されるとはね。さすがは本家の写輪眼」

「とはいえ経験がねーからな。再不斬戦を見てなきゃ此処まで上手く行ってねーよ」
先に声を掛けたガイを無視してカカシが祝福してくれる。別にガイを蔑ろにしたわけではないだろうが、再不斬戦の真似をされて刺激されたという所だろうか？

Ｂツリーで一回分多い試合が終わったので、そのままＡツリーの予選をやってからまたＢに戻る。その間に体力を回復しておけと言う事なのだろうが、俺には先にやっておく事があった。
Ａツリーの予選は『いのｖｓナルト』『キンｖｓサクラ』と事前情報や相性的には有利だし、『しのｖｓザク』に至っては原作と同じだからだ。
「よう、シカマル。話がある。お前の対戦相手の情報……欲しくないか？」
「なんだよ急に？　そりゃ欲しいっちゃ欲しいけどな」
用件があるのはシカマルなのだが、不思議とこっちに目線を寄こさない。まあ写輪眼でなくとも幻術を掛けてた奴を警戒するのは判るけどな。
「商談に入る前のオマケだが、あいつは特殊なギミックがあるから警戒が必要だ。それ以上の情報が欲しかったらで良い。なんだったら次に来る先輩の噂も付けるぜ？」
「っち。初見殺しかよ。聞いてなきゃヤベーやつじゃんかソレ」
突っ込んだ話をすると途端にシカマルが嫌な顔をする。この状況で話しをするとい

う事は、聞いているかどうかで難易度が変わる話だからだ。面倒くさがりである以上に、知略に冴えたシカマルにとってこの話は聞き逃せない。

「……条件は？」

「親父さんとかに伝言を頼みたいだけだよ。術の研究にちょいとな。親父さん達がダメだって言ったらそれで構わねえ」

影を使った印を組みたいのだが、影真似が特殊過ぎて単純にコピーしても意味がない。たっぷりチャクラを練っているはずだしな。

「その条件でオレが断れる分けねえだろ、この悪党！　判ったよ！　どうせ親父も頷くような内容なんだろうけどな！」

「そういってくれると助かるぜ。俺も試合を真面目に見たいしな」

影を使った特殊な印くらいなら問題ないだろう。影真似みたいに粘着性を持たせる訳でもなく、自在に動かすわけでもないのだ。大蛇丸流の簡略印では不可能なレベル……複雑な印を陰に組ませておきたいだけなのだ。

「要望の内容はこの巻物に書いてある。……まずあのドスってのは、籠手に仕込みがあって回避しただけじゃダメだ。音で三半規管をやられちまう。もちろん振動で攻撃もできるぞ」

「あー。そりゃヤベエな。ぎりぎりで避けて影真似とか絶対駄目じゃん」

知って居ればどうということはないが、知らないと危険な初見殺し。加えてシカマルの影真似は伸ばして使えなくはないが、近い方が確実ではある。しかし離れないとドス相手には危険なので、少し考えさせられる相手だ。

「まあ何とかするっきゃねえが……あの先輩は？」

「投擲術のプロフェッショナルで、白兵戦もそこそこいけるはずだ。ただ影真似を見せちまったら徹底的に離れて戦うだろうな。俺ならこんな感じで巻物を用意して、時空間忍術で山ほど武器を持ち込むね」

そう言ってもう一本巻物を取り出す。もちろんさっきシカマルの親父さんに渡してくれと頼んだ伝言とは別物だ。

「なんだよそりゃ？」

「簡単に言うと火遁で造った特殊な閃光弾だな。暫く浮かび上がらせて置ける」

影の印を考察する時の為に、加具土命の出力を落として作った特殊……というか簡単な術だ。閃光弾のように一瞬ではなく、囮に使ったり印を組んだりする時間を稼ぐことができる。もちろん自分でも使うために封印してあるが、シカマルたちとの交渉に使えるのは判っていた。

「この悪党！　てめーみたいなのはタラシっていうんだろうさ！　何すりゃ良いんだよ!?」

「毎度アリ。親父さんが話をいきなり断った時の保険になってくれりゃあ良いよ。あとこいつは口寄せ用に加工してあるから、覚えりゃ使い回せるぜ」

どうせ戦えば判る情報とはいえ、ここまで段取りを踏む以上『親がダメだといったからここまでででーす！』なんてのは論外だ。せっかくなのでシカマルにも協力してもらおう。後はまあ……こいつの頭が良いなら、こんな感じの他愛ない取引で仲良く成ってても良いしな。

ちなみに試合結果は予想通りというか、狙ったんだから負けてもらっちゃ困るけどな。

という訳で商談が終わったので景気よく次の試合にも勝ちたいところだ。実力的にはこっちの方がキバより強いのだが、相性的にはさっきの方が危険だったりする。車輪眼を使う前にボコられたら危ないからな。

Ｂツリー予選の続きは『シカマルｖｓドス』『ネジｖｓヒナタ』、少し時間を置いて二回目になる『ガーラｖｓヨロイ』と『ツルギｖｓリー』、そして『テマリｖｓサスケ』……要するに俺の試合だ。

「最初から狙っていたのか凄いな」

「そうだサクラ。怠け者に見えてシカマルは頭が良いからな」

どうやら原作と違う流れで来たこともあり、猪鹿蝶と音忍は戦っていなかったようだ。シカマルはむしろ『武器の影』に変形させられることを隠す方に苦労していた。

籠手の絡繰りを見抜いて大仰に避けるフリをして、試合場の脇にある二階の影まで誘い込む。そこからシカマル自身は何もない場所の脇で、相手だけ壁の近くという構図は原作と変わりない（試合場の縦横の差はあったが）。影真似でつないだ後は勢いよく頭突きを掛けさせて試合終了だ。

「あいつ……地味なクセして、今のはちょっと格好良かったってばよ」

「……まあな。同じことができても難しいかもな」

入れ知恵したんだぞと言いたいが、俺自身原作知識からのカンニングなので言い出せない。何となくモヤモヤしてるのはきっとそのせいだろう。それよりも次の試合が非常に気になるところだ。

この世界では男女の組み合わせが微妙に異なるが、ヒナタが男になったことでどう変わるのだろうか？　少なくとも現状では、原作よりも修練を積んで居るのは間違いがない。

「……左上に視線を動かしたのは過去の辛い体験を思い出している。そして直ぐに右下に動いたのは肉体的・精神的な苦痛を連想したからだ」

「当たってますが、肝心な理由が違いますよ」

原作と同じような流れでネジは告げたが、ヒナタがそこから復帰するのにナルトの声援を借りなかった。代わりに熱い視線でナルトを見ているが、やはりナルトの為に強くなったのだろうか？

「私は踏み出せないで何も変わらないのが怖い。そして変えられないことで負け続けている事、そして届かないことが何より恐ろしい」

（……なんでこっちを睨むんだ？　そこはネジでないとしてもナルトに決意を示すところだと思うんだが）

不思議なことにヒナタは俺を睨んでいた。その事でネジが逆上しかかっているのだが、良いのだろうか？　今にも襲い掛かりそうな目をしてるんだが。

「ネジ兄さん。勝負です」

「……いいだろう」

この辺りはあまり原作と変わらないように思える。もしかしたら腰の入れ方とか違うのかもしれないが、流石にそんなことを覚えているような記憶力はない。

二人は同時に動き出し、機先を制したのはヒナタの方だ。

「八卦空掌か！」

「追いつく為に必死で磨いた拳です！」

何もない所で大気が弾ける。ネジが放つチャクラの流れに、ヒナタが居合気味に放っ

た空掌が当たったのだ。パンパンと連続で弾けているが、ネジの眼力を持ってすれば居合に意味はない。とはいえ接近戦を挑めばネジの方が有利なはずだった。

「ヒナタ押してるってばよ！」

「いや、駄目だ。肝心のチャクラを弾かれてる。皮膚を焙る事が出来ても経絡系を攻撃できなきゃ柔拳同士の戦いには意味がないはずだ」

写輪眼で見ても撃ち込まれる空掌は肝心の場所を逸れるか弾かれていた。そのくらいはヒナタにも判っているはずだが、居合を混ぜたり混ぜなかったりする変化以外は、あまり流れを変えようがない。

「やはりこの程度か宗家の力は！」

「くっ……」

ジリジリと接近されてそこから打撃戦。普通に打ち合っているように見えるが、ネジは的確にツボを突いているように思えた。流石に点穴なんか見切れないが、原作でも可能だったネジがしくじることはあるまい。

ここまでは予想できた流れだ。ここでヒナタは終わりなのか、それとも何かしらを見せるのか？

（まさか剛拳に切り替えるって付け焼刃はねえよな。となると残るはあのへんだが）

考え方としては二つしかない。有名格闘ゲームの老師の様に柔剛を巧みに切り替え

て、ここからパワー戦に打って出る。しかしそれは考え難いし、気の遠くなるような修錬が無ければ無理だろう。
「諦めろ。オレの目は既に点穴を見切る。もはやチャクラを練ることも叶うまい」
「ネジ兄さん。その答えは……コレです！」
修錬の結果か原作よりもマシな状態ではあったが、やはり点穴を突かれていたようだ。しかし変化はここから大きく生じる。
なんとヒナタは手の周囲にチャクラを集めて放出したのだ。そういえばさっきナルトがヒナタが習得中だと言っていたような気がするが……重要なのはそこじゃない。どうして点穴を突かれたのにチャクラが練れるのかだ。
「柔歩獅双拳!?　そんな付け焼刃で……いや、どうしてチャクラが練れる！」
「簡単な推測です。ネジ兄さんなら何某かの厳しい修練を積んで居ると確信していました。そして私は父上の技を知っています。ネジ兄さんならばそのいくつかをモノにしているという、確信を抱いていました」
おそらくは点穴をヒナタの父親であるヒアシも使える。だからヒナタはそこを突かれるという予想をしたのだろう。だが……それではヒナタがネジの攻撃を受けて無事な理由が説明できない。
「馬鹿な。技が判ったからといって点穴を突かれたのに……」

「ネジ兄さんは班員の方に点穴を指突されてチャクラが練れなくなりますか？　ただの打撃では意味がない。そう返されると思いますが」

一連の言葉は最初意味が分からなかった。ハッキリいってネジには猶更だろう。だが、ヒナタがこちらを睨み、次いでナルトを見て微笑んだことで何となく理解できた。

もしかしたらヒナタはネジの攻撃タイミングを見切る……いや誘導して、その時に体の中にチャクラを溜めておいたのではないだろうか？　その流れを俺とキバとの戦いから連想し、体に溜め込むというのはナルトを見て思いついたのではないだろうか？

「ネジ兄さんと違って点穴は見切れません。しかし私の目は……時間を見切ります！」

「ほざけ！」

攻撃タイミングの見切りと、透遁によるタイミングの誘導。これらを組み合わせてネジの攻撃を、シューティングゲームの一種であるＦＰＳの様に見切ったのだろう。これで『何時』『何処へ』やったのかは分かった。となると手段だが……。やはりアレを覚えていたのか。

「見切れるというならば受けてみろ！　八卦……六十四掌！」

「……守護八卦、六十四掌！」

先に放ったのはネジであり、連続攻撃がヒナタを襲う。だがそれに対してヒナタは掌から放つ攻防一体の壁を次々に打ち立てた。それを弾きながら押し込む為にネジも

チャクラを溜めている。
　他の者には見えないだろうがチャクラを見れる俺の写輪眼には、まるで『割れるバリア』のように建てられては消えて行くチャクラの防壁が映る。ヒナタは『何時、何処へ打ち込まれる』という攻撃ポイントの見切りと攻撃タイミングの見切りを行っているのだ。普通なら防戦のヒナタ側に負担が多いはずだが、防御しつつチャクラを押し込む必要があるだけにネジの方が消耗が激しい。
「まっ……負けられるか！　こんな所で負けられるか!!」
「うそっ。ネジ、もう使うの!?」
「いえ、使わなければ消耗戦で敗北します。流石の判断です、ネジ……」
　ネジの体から膨大なチャクラが溢れ出る。しかもその勢いは留まることなく、しかも方向性を持って発せられる。先までの攻防が互角であり守り切れていただけに、惜しかった。
「これは……回天!?」
「はああ!!　もう一度だ！　八卦六十四掌！」
　至近距離から放たれる回天は攻防一体の一撃となる。吹っ飛ばされるヒナタを追撃していくネジだが、途中で審判が割って入って試合に決着がついた。
「そこまで。勝者、日向ネジ！」

「……届かなかった……ナルトさんの所まで……サスケくんの所まで」

悔しがるヒナタだが原作よりもはるかに健闘している。それどころか回天をネジがまだ使えなければ勝てていたのではないかと思う程だ。

（あと一歩……。まるで原作のサスケとイタチみたいだな。……俺にあんな戦いができるのか？）

そう思いながら俺はヒナタにどう声をかけるべきか決められなかった。ナルトの様に即座に駆け寄って声を掛けたい。健闘だったと言いたいが、素直になれない。そして中途半端な俺自身がどうすべきかを決められなかったのだ。

予選と修業の終わり

予選の残りに関しては駆け抜けていったというべきか。

まずリーとツルギの戦いはアッサリ終わった。高速の攻撃をギリギリの分身で躱してからの関節技という点ではツルギの動きは上手かったが……。八門を開かれたら極められた関節ごと持ち上げられてしまった。なんというか超人プロレスを見ている気分だった。

次の籤を引いたのは俺なので、ガーラとヨロイ戦は後で語っても良いのだが、せっかくなので済ませておく。自動攻撃する砂からチャクラを吸って有利になったように見えたが、ガーラが『お母さんを虐めるな！』とブチ切れて一瞬で終わった。人柱力からチャクラを吸い切れる訳がないので、キレなくても勝敗は変わらないと思うが。

「ヒナタの仇を取るまで負けるなってばよ!!」

「とはいえ疲労と研究されている分だけ不利なのは否めない」

「大丈夫だよ。先手は打ってあるから」

激励するナルトと心配するサクラ。二人に手を振りつつ、もう片方の手で折り畳み式の風魔手裏剣を取り出す。畳んだままクルクルと振り回し、鼻歌唄いながら試合場に向

かった。
「フン。貴様の小細工など私には効かないからな！」
「そりゃどうも。忠告しとくが対策してることを口にしない方がいいぜ？」
　さて、さっきの試合は幻術・催眠眼・透遁でゴリ押しした。それに対し砂の上忍に対策を尋ねたらしいテマリには幻術や催眠眼は効かないだろう。目線を逸らされるか、それともあのデカイ扇子を前に立て視線を遮えぎられるかして終わりだ。だからこそのこの風魔手裏剣である。
「減らず口を！　そんなモノで私を倒せると思うなよ！」
「……そうかい？　じゃあ使うのは止めとこう。逆用されても困るからな。俺は忠告にはありがたく従うタイプなんだ」
　テマリの言葉から揚げ足を取って、足元へ風魔手裏剣を放っておく。こいつはまともに使ってテマリ対策にするのではなく、テマリの選択肢を狭める為に持って来ただけだ。
　中忍試験でテマリは頭が良い所を見せたが、同時に視野の狭さも見せていた。今も転がした風魔手裏剣に注意を払うか疑念を抱いているはずだ。もちろん分身を変化させて持ち込んだら反則なので、何もしてはいないが。
（……やはりな。テマリは詰将棋タイプだ。その場の最適解を選んで最高率を目指ちま

う。これで奴の一手目と二手目は決まりだな）

テマリは決まった状態の中で高速思考し、最善手を選んでいくタイプに見える。だから原作の様に想定外の状況に弱いが、決まりきった条件では物凄く強い。近～中距離が得意なはずの風遁使いが、遠距離まで得意なのだから実力の方も相当な物だろう。

「行くぞ、薄汚い覗き屋が！」

「こっちの予定に侵入して来てんのはお前だよ！」

試合開始と同時にテマリは扇子を広げて地面に突き刺した。そのまま分身して陽動を出すことで写輪眼での幻術・催眠眼、シカマル戦で見た最後の光景を思い出すと判り易い。そしてこの動きは当然ながら俺の誘導通りだ。

俺は扇子の動きに合わせて複数の手裏剣を手順に従って投げ放つ。

「忍法・火遁鳳仙花、曲り爪紅！」

「なっ!?　手裏剣が曲がっただと!?」

過去編だったか無限月読中だったか忘れたが、イタチが手裏剣を障害物の裏に当てたシーンを覚えているだろうか？　あれを応用して鳳仙花の軌道を曲げる。分身の為に組んでいた印のままテマリは躱し、そこへ俺は新たな火遁で追い打ちをかけるって寸法

だ。奴は分身を続行しながら回避しているが、動いていない分だけ俺の方が速い！
「火遁・豪火球の術！」
「くそっ！　次から次へと！　まとめて吹き飛ばしてやる！　風遁……なんで後ろに!?」
　テマリは連続で行動したつもりでも、俺に誘導された物だ。逆に、俺は動かずにカーブを描く鳳仙花、そして回避地点へ豪火球を放った。とはいえ逃げる方向が判らなきゃ俺もここまで予想する事なんかできない。
　だからこそ、さっきの風魔手裏剣に何かあるのではないかと思わせたのだ。小道具を使った幻術を警戒して目線を隠し、回避先も風魔手裏剣の無い方向に移動し易いからな。まあ違う方向であることを考えて、こっちの二手目は範囲の広い豪火球で牽制したわけだが。

「次は風遁で自分ごとやっても問題ない火力で焼き払う。どうする？」
「……降参する。お前の勝ちだ」
　次々に先手を取ってついには背を取った。この状態で本命の火遁を受けて無事であるとは思えまい。ならば自分の周囲に自爆覚悟で風遁を使って抜け出す。そこまで予

想している事を伝えると、悔しそうにしながらもアッサリと降参した。優れた風遁使いであるテマリなら、俺の火遁の威力は想像できるだろうしな。

そして此処でアッサリ降参したことでテマリは新しい情報をくれた。最適解で動こうとするあまりに流れが予想出来てしまうのだ。

先ほども述べたがこの後の試合もアッサリ終わった。ヨロイがガーラに勝てるとは露ほども思わなかったので、瓢箪が砂であることを暴いたというか、キレさせてとっておきの砂を使わせた事に驚いたくらいだ。

その間に俺は情報を整理し、この後の展開を推測しておくことにした。原作通りに進むのかは別にして木の葉崩しが起きるのか、それとも起きずに普通の中忍試験として終わるのかを判断する。参考にしたのはテマリの行動だ。

(テマリはどうしてこの位置を選んだ？　そりゃ戦って上がって奴と戦う方が有利じゃある。だがテマリは参加者の中じゃ強い部類だし、仲間とできるだけ戦わないならもっ

と良い場所がある）
だが木の葉崩しが計画されていて、二回戦以降が無い可能性が高いのだとしたらこの判断も頷ける。予選さえ突破できれば会場内に入れる。そう考えるならば、手の内を見てから戦えるあの位置がベストだ。
そして結果的に負けてしまったものの、それでも任務を優先するなら下手に戦って怪我しない方が良いに決まってる。個人的には勝って選手枠で入りたいだろうが、大火傷を負うよりは無傷で負けて関係者枠で入る方が良いだろう。
「どうした　勝ったのに浮かない顔して」
「……この後でどう特訓しようかと思ってな」
カカシが興味深そうに尋ねて来るので、巻物に修行案を書くついでに先ほどの懸念を記しておいた。どれほど信用性が置けるか判らないし、そもそも原作知識の説明ができない。あくまで『砂が妙に温存したかのような怪しい動き』とだけ記載している。
「まあこの辺は様子見しといて今は試合に集中するっきゃないでしょ」
「ああ。予備期間があるみたいだが、覚えようと思ったら何かに特化して集中しなきゃならねえ。余計な事を考えてる暇はねえか」
戦いを挑む気なのか、あるいは大蛇丸に関する不穏な情報を掴んで様子見なのか……。その辺りの判断は上忍たちに任せよう。俺としては報告しただけでも義理を果

たしたはずだ。なので忘れて自分の事に戻るべきだな。
「とりあえず修行や作戦に専念して考えてみれば？　これはこっちで処理しておくしさ。修行内容の希望はできるだけ叶えてやるさ」
「そうしてくれるとありがたいかな？俺は今の間に第二の試験で見た情報が無いか聞いてみるよ」
　カカシはあくまで冷静に、俺らの判断を重視してくれるらしい。修行の相手や練習相手は見繕ってくれるらしいが、方針にまでは口出さないという事だ。
　俺は考えをまとめながら、さっき交渉したシカマルやら、ヒナタの見舞いを兼ねて情報収集に行った。もっとも大した話は聞けなかったし、ヒナタに関してはさっきの戦いは嫌味かと言われてしまった。まったく都合よくはいかないもんだ。
「ひとまず相手の情報やら俺たちの能力を考慮して作戦と修行内容を決めるぜ。まずナルトな」
「おう！　どんと来いってばよ！」
「了解」
　ここは判り易く同期のシノが相手のナルトを最初に選んだ。シノは虫使いだし、カンクロウの方は傀儡使いというくらいしか判らなかったからだ。俺の相手に至っては、ガーラが来るのかネジが来るのか分からない。まあ柔拳があの砂のチャクラを破壊す

るのか、木の葉崩しのタイミング次第と言えるが。

「シノは見たの通り虫使いで、チャクラを食うから接近させないのが基本的な戦い方だ。ナルトはチャクラ・コントロールをメインに、同時並行で風遁を使う修行だな」
「今までと同じってことか？　なんだかつまらねえってばよ」
「そうでもない。同時並行は結構きつい」
　シノ戦はベタな風遁戦術しかないだろう。原作で言うとテマリの戦い方に近いのか？
「自分を中心に常に風を吹かせながら、手裏剣でも小さな風遁でも良いから遠距離攻撃を続ける。右を見ながら左を見るようなもんだな」
「そのくらい……ってか無理だってばよ」
「右と左を同時に見るのは難しい……」
　当たり前だが同時並行で術を使い続けるのは難しい。追加印の中に継続時間を延ばすモノもあるが、それを使用するとしても手裏剣や攻撃用風遁は使えない。つまりは接近してはいけない相手に格闘戦を挑むか、高度なコントロールが必要になって来る。
「波の国で使った大渦をいつでも使えるようになるのが一番だが、まあこういう事もで

きるぞ」
「……影分身にやらせる？」
「おっ！　影分身ならオレにも使えるってばよ！」
　試合も終わったので、火遁分身ではなく影分身を出してやってみた。一体に松明みたいな火遁を使わせ、もう一体にちょっとした攻撃用の火遁をやらせ、自分自身は手裏剣を投げて見せる。ナルトは風遁なので範囲型の風遁で防御と同時に手裏剣を加速させるのが一番だが、実はタイミングが面倒なので難しい技術なのだ。
「あー。なんか上手く行かねえ？　範囲が小さく成ったり、自分で自分を攻撃しちまうってばよ」
「そこは要修行だな。コントロールを上手くする師匠でもカカシに教えてもらえ」
　原作よりも修行してるので何とかなりそうな気もするが、ここは自来也との出会いに期待してみる。ガマを召喚できる様に成れば随分と違うしな。とはいえナルトが女という差が、どういう事になるか不安でもあるが。
「次にサクラ。相手は傀儡使いとかしか判らなかったので、ベタな傀儡師相手の戦術を元に、今有る力を高めるのが一番だ」
「……そうか。専門家と兼業で対策が違う」
　なんというか原作との乖離が大きくなってきて、そろそろ原作知識は参考程度にした

方が良くなって気がする。特に砂の忍びは三姉妹で女性オンリーで、しかもゲームで言うと後衛が三人という変わり種だ。それだけ強いのか、勘違いで実は全般的にこなせるのかで変わって来る。

例えばカンクロウなどは原作通り傀儡のみで戦うタイプなのか、それとも他の方法……例えば仕込み傀儡を大砲の様な武器にしたタイプなのか決め手がないのだ。それこそオートで動かして、一緒に戦うのかもしれないしな。だからこそ、サクラが持つ強みを伸ばすしかない。

「傀儡の強みは本物と偽物の入れ替え、同時使用。仕込み絡繰りと、それに合わせた毒？」

「あー！　一杯過ぎて判らねーってばよ」

「そらまあそうだが、共通してるのは当たらなきゃどうって事はないことかな」

桜が列記する傀儡対策。どうやらある程度は想定していたようだ。まあ伝統的な傀儡師の衣装……みたいだしな。

「当たらなければ？」

「腕や口に仕込みがあるかもしれねえ。毒かもしれねえ。だが、そんなのは普通の忍者相手でも一緒だろ？　とにかく躱して叩く。あとは地面なり物陰なり、もし風遁も使えるなら空も時々警戒するってことかな」

「なんだ。それなら判り易いってばよ！」
参考にするのはサソリ戦だ。あっちの方が格上なのだし、やって来る幅は多い。それに対する戦術は回避からの白兵戦だったので、おそらくこれが最適解だろう。
「毒に関しては煙玉もあるから油断は禁物だが、最悪の場合、幾つか処方しておく手もあるな。散布して効く毒は割りと珍しいし」
「なるほど。毒煙を吸い込まない。吸い込んでも良いように対策……」
想定する事態は多いが、その全てに対処する必要はない。また考え方は無数にあるモノで例えば『十の瓶に毒が九と、水が一つある。瓶を一つだけ飲め』という課題があったとしよう。
この時、テマリのようなタイプは高速で正解例を探す。いろいな知識から鑑定する能力はあるはずだし、そっち方面の地頭は物凄く良いのだ。ただし、この場合に最も確実な解決法は『飲んでも問題ない毒を呑み、さっさと解毒薬・抗毒薬を使う』ということなんだけどな。
「だからサクラは体術を基本に、偶に医療忍術の真似事。避ける訓練だけなら俺らも協力できる」
「影分身使って一杯投げられるってばよ！」
「なるほど。それは助かる」

　という訳で体術を中心に鍛え、疲れたら砂の下忍・中忍が教えてもらえる毒の中で、特に煙玉を警戒すれば良い。後の攻撃はまさに、当たらなければどうという事はねえ！

「それでサスケはどんな修業をするんだってばよ!?」

「協力できる範囲で協力する」

「俺の相手はどっちが勝っても絶対防御と変則的な攻撃を持っている。攻撃力ＵＰと回避だな。離れて戦えるなら攻撃力だけでも良いっちゃ良いが」

　狭い場所で戦うならネジの方が脅威だが、天覧試合は広い場所だ。それを考えたら最初から逃げに徹することで遠距離を挑めば良い。もっと言うなら、消耗戦に移行すると人柱力であるガーラの方が有利だ。チャクラを封じても狸寝入りから守鶴に主導権移せば普通に有利だしな。

　一方で俺はネジが高速で動いた場合に不利で、逆にゆったり構えているガーラには有利だ。砂漠で戦うならともかく、この周辺で戦う以上は集められる砂の量に限りがある。守鶴の中に潜られたら勝ち目がないので困るが、狸寝入りだと外に出ているからな……。いや、この辺も原作との乖離を考えたら過信は危険か。

「遠距離から攻撃に専念する為に、俺もチャクラ・コントロールの使い方覚えて回避も訓練しながら距離を空けて戦う訓練かな?」

「ならある程度はみんなで特訓できる」

「よっしゃー！　明日から特訓だってばよ！」

瞬時にチャクラを練って、必要な場所から場所に移すのはコツが要るだろう。イタチが戻ってきた時に上忍三人を圧倒した、あのキレ味の鋭い動きができるかと聞かれたら無理だ。一つ一つの動きを個別に再現するのが精々で、流れるように行動するのはまだまだ無理だろう。この辺の経験が俺には不足してるしな。

こうして俺たちは特訓のスケジュールと内容を決め、カカシに相談して可能な事に関しては個別の師を教えてもらった。最初はみんなでチャクラ・コントロールの精密性・高速の切り替えを実現。そのコツを掴んでから反復練習を個人で可能な様にしておく。

「サスケは手裏剣影分身だけで良いのか？　なんか物足りねーって気がするってばよ」

「正確には擲弾影分身ってとこだな。火遁で造った物も投げるし」

「鳳仙花のバリエーションみたいなの？」

俺は独自メニューで白や再不斬との特訓もあるので、特に師匠は付けてもらわずに個別特訓。手裏剣影分身だけなら木の葉崩しが始まって覚えられるチャンスもあるかもしれねーが、ぶっつけ本番で試すわけにもいかない。加えてガーラが守鶴化するのが俺との試合だったら、そんな暇はないだろうしな。

「それよりもお前は大丈夫なのか？　コントロール修行だけかと思ったら、大技まで教

えてもらうって話になってるじゃねーか」
「う、うるせーってばよ！　オレだって新技覚えたいんだってば……」
「一人だけのけもの、良くない」
　ある意味で原作に近いのはナルトだった。最初はエビス先生に教えてもらうはずだったのに、いつの間にか『三忍』に教えてもらう事になっていた。何故か自来也ではなく綱手が木の葉に戻って来ていて、サクラが桜花衝を教えてもらうついでに、色々と習うらしい。
　……何というか親分じゃなくてカツユを口寄せするのか？　この差がどんな影響を与えるのかと思いつつ、自来也も戻って来る可能性もあるので今は気にしないでおく。それこそ原作と別の歴史を進んでいるのだから、原作のストーリーに固執する必要もないだろう。
「サクラはもう覚えたんだっけ？」
「といっても初歩の初歩。それも水遁じゃなくて土遁……」
　以前からちょっとずつ覚えているのは水遁だったが、白兵戦に向く術として土遁の初歩を教えてもらったらしい。体を固くして防御したり殴りつけたり、そのまま潜る為の硬身術だとか。というか桜花衝の怪力が仙術の一つである金剛力に似ているので、回避で軽身功みたいなのを覚えたら、一気に仙人というか、地仙コースまっしぐらである。

（仙人か……。こればっかりは直ぐに見つけられる相手でもないしな。俺は地道に特訓するか）

そう思いながらついつい中華系のデザインが頭に入ってしまう。白と再不斬から私服スタイルの炎も頼まれているので、チャイナとかも良いかもしれない……なとと、くだらない事を考えていた。

（そういえば東方の仙人には名前のルールあったっけ？　白は男なんだろうか、それとも女なんだろうか？　まあ仮の姿と偽名なんだからどっちでも良いか）

そんな他愛ない想像も無駄になるわけではない。白と再不斬は炎として取り込んだが、意思の主体はあいつら個人のモノだ。俺の火遁分身と違って、素直に聞いてくれるわけでもない。火遁チャクラモードみたいな簡単な呼び出しと違って、用事を頼むとしたらコミュニケーションは欠かせないのだ。

最終的に手裏剣影分身を覚えた後は、白・再不斬の切り替えに一番手間取った。自分を強化する炎の鏡と、相手を阻害する炎の霧。どちらも使い勝手の良い術であり、また火遁分身のバリエーションで二人の力を借りることができる。これがあれば有利に戦えるとはいえ、二人の能力切り替え・意思主体の切り替えに手間取ったのだ。やはりオリジナルの術をパパっと使うなど都合良くスムーズにはいかないようである。仕方ないので当面は二つのガグツチを使って切り替えるしかないだろう。

こうして俺たちは修行を終え、中忍試験における大名天覧試合に突入することになった。

第七班の天覧試合

大名天覧試合の一回戦は、Ｂツリーの『テンテンｖｓシカマル』『ガーラｖｓネジ』、少し時間を置いてＡツリーの『カンクロウｖｓサクラ』『シノｖｓナルト』の四試合。リーと俺はＢツリーで勝ち上がった相手との戦いになる。

大蛇丸が仕掛けてくるとしたら注目の高い試合が終わった後だと思うので、『ガーラｖｓネジ』かその勝者と俺が戦う試合の後だろう。時間的にも原作的にも後者……俺の試合が終わった後であると思われた。

「影が巨大化したぁ!?」

「忍法、影法師ってな」

背中で発生する閃光に従ってシカマルの影が伸び、巨人化した事でテンテンを拘束する。テンテンは気が付いていないようだが、土煙にも影が映ることで立体的に成っていた。一種のブロッケン現象を起こすことで巨人化した影が彼女を拘束したのだ。

「途中までは上手く躱してたと思ったのだが……」

「手裏剣の使い分けとか上手かったてばよ」
「多分、物の影で影真似の術が延長されるってことに気が付いて、そこで終わりにしちまったんだろうな。もったいねえ」
　序盤はサクラとナルトが言う様に、影真似の術を警戒して中～遠距離戦を行っていた。手裏剣を飛ばす速度や数を使い分け、シカマルの集中力を削っていたのだ。あれでは防御に手いっぱいで、影による拘束が不可能だと思えても仕方あるまい。
「シカマルは最初からあの術で捕まえる事を前提に追い詰めたって事かな？　使わなくても勝てるなら楽でいい……くらいには思ってそうだが」
「あー。それってばシカマルっぽいってばよ」
「なるほど。対策や切り札は思い付いてからが勝負……ということか」
　ナルト……人がせっかく解説したんだから、サクラみたいに見るべき所を見てくれ。そう思ったのだがこの無邪気さがナルトなのだろうかと自分を納得させることにした。コイツの場合はガンガン使いながらその場で閃くタイプだしな。気軽に使ってるようで深い考えがあったりと、意外性Ｎｏ．１の忍者の片鱗はこちらの世界でも見たことがある。
「次の戦いはどっちが勝つと思う？」
「どっちも絶対防御の使い手で判んねーってばよ」

「なら押し切るか、その前に包み込むかって勝負になるかな？　ネジが特定方向に放出するようなパワータイプの技を覚えてりゃあ別だが」

全方位からの攻撃を即座に防ぐネジの回天。あれは強力だが放出し続けるという行為は難しい。逆にガーラの砂を操作する能力は天敵とも言えるのだが……ここで判断を難しくさせるのは触れてはならぬ柔拳のチャクラを防ぎながら、包み込む事ができるかどうかだ。

「てーことはヒナタが使ったパンパンって弾けるみたいなのか？　やっぱりヒナタは強かったんだってばよ」

「もしかしてガーラに限ってはネジよりヒナタの方が相性が良い？」

「一応はな」

人柱力の事は確定ではないし、話すには情報が足りない。だからか少しモヤモヤした物を抱えながらガーラとネジの戦いを見守っていた。おそらく人柱力だろうから、原作におけるナルト戦の様に経絡を焼く意味がないと思える。もしかしたらネジが押し切った上で、守鶴の力を借りて逆転するのではないかと思っていた。

「それまで！　勝者、ガーラ！」

「いつの間にか足元に!?　スゲーってばよ！」

「あの瓢箪を作ってる砂だけチャクラの練り込みが半端ないな。普段から『九つ目の八

門』とでも呼べるくらいに練ってるんだろう」
　その戦いはどことなくネジと音の蜘蛛野郎（名前は忘れた）との戦いを思わせた。四方から砂時雨を撃ちながら、足元へ砂を這わせていく。やがてその砂はネジの動きを止め回天の全力が出せなくなっていったのだ。それでもネジは一時的な全力放出で砂を跳ねのけ戦い続けたが、途中で捕まってしまったという訳である。
「サスケの予測通りになったね」
「まあな。回天以外にもチャクラ放出を技として持ってたら、話は違ってたと思うが。後は最初の接近時に使ったクナイと起爆札も惜しいっちゃ惜しかった」
　ネジは最初、起爆札を使って砂の守りを散らした。散った砂で攻撃されるのは判っていたろうが、白眼で見れるのだから問題ないと踏んだのだろう。実際に砂時雨そのものは避けたり回天でなんとかしていた。もし速攻を掛けるのではなく、起爆札以外にも何か一手打っていたら話は変わっていたように思える。もちろん人柱力による柔拳破りがなければの話だが。
「サスケサスケ。サスケなら勝てるんだよな?」
「お互いに切り札を使い合って、足を止めての撃ち合い前提ならな。……。お前らの試合の方が先だろ、頑張れよ」
　心配そうに見上げるナルトだが、その額をツンと突こうとして思い留まった。自分な

んかがその仕草をしても良いのだろうかと、くだらない悩みで中断。代わり二人の試合の方が心配だと切り返してその場から逃れておくことにした。

勝負の方は相手の出方次第だ。守鶴は恐ろしい相手だが万華鏡を使えば火力で上回れる。二つのカグツチが持つ最大の強みとは形状や性質を操れることじゃない。『上限を突破』できる事だ。チャクラ同士が相殺すれば物理存在である砂を溶かすことなど普通は出来ない。だが二つのカグツチで上限を突破すれば、相殺しきれずに砂をガラスに変える事だってできるだろう。

（いわば炎遁を越えた炎遁。プラズマ遁か？　だがそいつを使うには幾つもの壁がありやがる）

万華鏡は使えば使う程に失明が近づくし、大蛇丸やダンゾウに開眼を知られてしまう。使うとしても守鶴だけを警戒すれば良い状態まで持ち込むか、開眼を知らせる事が大きな役割になる時だろう。後は……自分で名前を付けたがプラズマ遁はダサイ。適当な名前を考えないとな。

カンクロウとサクラの戦いだが、意外と言ったら失礼かもしれないが……中々に良い激戦だった。てっきりカンクロウは絡繰りを晒したくないから戦わずに棄権するかと思ったが、『試作品』を持ち込んでその許容範囲で戦ったのだ。

「このクナイ、中々のパワーじゃんよ」
「糸が止めた?」
　カンクロウは手元から鋼糸を取り出して刃の様に使った。そして防御においてはどうやったのか知らないが、縦横に編み込んでクナイや手裏剣の攻撃を巧みに防いでいる。
「でもパワーなら、こいつも負けてねえじゃん」
「籠手の付いた腕……いや傀儡か」
　カンクロウは背後に一体の傀儡を置いたまま、手元にもう一体……いや、左右一組の籠手型傀儡を口寄せした。そして本体の放つ鋼線と籠手型傀儡による時間差攻撃を見せる。
「っ!?　刺さらない。っていうか、てめえ鋼線効いてねえじゃんよ!?」
「毒が怖ければ刺さらなければ良い。最初からチャクラは防御に回してる」
　サクラは鋼線に絡めとられた段階で作戦を変え、強引にパワーでカンクロウを振り回した。土遁による防御の他は機動に回していたチャクラを、剛力に振り替えて強引に捕まえに行ったようだ。
「っち。だけど、こういうのはどうじゃんよ!」
「離した?　なのに鋼線がまだ動いてる……これが傀儡糸か」

鋼線などなくともチャクラ糸で傀儡を動かせるのだ。ならば同じ要領で鋼線を動かせば良い。よくよく考えればさっき見た鋼糸を編み込む防御も、手元で操作したら危険な上に絡み易いじゃないか。だとすればチャクラ糸で程よくコントロールしていたのだろう。

「ダメダメ。傀儡人形はバラバラにしたって、組み直せば済むじゃん。次は……」

「次はこうする」

殴りつけても籠手型傀儡で受けしかも関節部を一時的に外し、衝撃を吸収してから再度組み直す。そして本体と傀儡を巧みに入れ替える技に、サクラは翻弄されているように見えた。

だが、忘れていたのだがサクラはあれで気が短いのだ。普段は口下手なので喋らないので、内なるサクラのように寡黙なのだが……。サクラは表も裏も怒ると面倒なのが偶に瑕だ。口寄せで巻物から首切り包丁を取り出すと……。

（あれはまさか一本足打法の構えだと……野球でもする気かよ）

秘かにブチ切れていたサクラは、バラバラになる間に籠手型傀儡の片方を強引に試合会場の外へ打ち返していった。全部会場の外に出せば組み直せないし、本体とか傀儡とか関係ないだろうという算段に見える。普段は冷静なのにどうしてこういう時は力業に頼るのだろうか？　しかしこの状況を覆返すには中々悪い判断ではないように思わ

れた。
「降伏するじゃん？　こんな試合で試作品どころかカラスまで壊されたら割りに合わないじゃん」
「……勝った」
　フルスイングで鋼糸まで吹っ飛ばしていたが、指で直接持っていたら千切れていただろう。それだけのパワーがあると察したカンクロウは馬鹿馬鹿しくなって勝負から降りた。カラスとかいうもう一体の傀儡を使えば別かもしれないが……やはりこの後に備えたのだろうか？　あるいはその中に本体が入っていたのかもしれない。
「凄かったってばよー！　あ、ヒナタにもらったこの薬、サクラも使う？」
「ありがとう……」
　出迎えるナルトに喜んで見せるサクラだが、内心では思う所があったのだろう。カンクロウは余裕を残しているように見えた。籠手型傀儡だって完成して居たり、もっと多くの種類を用意して居たら勝負は負けていた可能性の方が高い。試合に勝って勝負は負けた……とでも思っている様だった。
　ナルトの試合だが……。俺は迂闊にも、ナルトが意外性Ｎｏ．１の忍者だという事を失念していた。

何のことだか判らないと思うので簡単に説明すると、天覧試合で見せた大技は口寄せでは無かったのだ。違うとしても螺旋丸だろうと思っていたのでアレには意表を突かれた。よく考えたら『九尾のチャクラ』の使い方を覚えさせる為の修行で、別に術は何でも良かったのだ。原作知識が頼りにならないのに、口寄せであると思っていた俺の方が悪かったのだろう。

それはそれとして原作とは違うシノの恐ろしさが感じられる試合でもあった。

「これでその不気味な虫も近づけねーってばよ！」

「不気味か。だが、オレにはオレを感じさせてくれる愛しい虫たちだ。何故ならば……」

ナルトが風遁でシノの虫を一蹴。しかしあえて風に逆らわない事でシノは虫を殺させていない。それどころか風に含まれたチャクラを喰って少しずつ接近するペースを速めているような気がする。

「何故ならばオレには感覚が無い。自分を実感できないオレに虫はオレ自身の在りかを教えてくれる！　そして、それはお前もだ！　ナルトオオ!!」

「っ！」

どうやら原作と違って無痛症らしいシノは、平然と傷だらけになりながらナルトに接近していく。それに対しナルトは不気味さゆえか、同期を傷つけたくないからか引き気味に回避。風遁を途切れないように使う集中力だけは向上しているが、そういう所は要

修行なのだろう。
　そしてシノは自分を犠牲にし、そして本来の使い道として虫を隠れ蓑とする方法で急接近する。
「くそっ！　こいつでどうだ！」
「風速を上げたか……。だが、まだ動ける。そしてこの風はむしろ、好ましい程だ！」
　ナルトは風を吹かせ続けながら手裏剣を投げていた。だがここに来て風速を一気に拡大。手裏剣では軌道が定まらない為か、無数のクナイをダメもとで投げる方法に切り替えた。だがその攻撃は高速ではあっても急所に刺さるわけでない。シノは虫で分身を作り上げると今度はソレを立てに加速する。
（スリップトリームか！　駄目だ大きく下がれナルト！）
　虫による分身は実体を持ちつつ、風とクナイを受け止めてくれる。本体との間に出来た隙間を利用して加速したシノは、一気にナルトに飛び付いていった。それこそクナイで切り裂かれることなど構いもせずに。
「うえ!?　キスなんかすんなよ！　気色悪るっ！」
「ふふふ……。別にオレは同性愛者ではない。オレというモノを自覚させてくれるお前を好ましく思っているがな。では、先ほどの口付けは何の為だったと思う？」
「っ！　吐き出せナルト！　毒虫……いや、そいつは！」

さっきは何とか我慢できたが、人様の試合中だというのに思わず声を出してしまった。別に女同士でキスしたから興奮しているわけではない。というか原作のイメージが強過ぎて、男同士のキスをしてしまって『オエーオエー』と掃いている姿にしか見えないからだ。

そして……ナルトが持っていたはずの大量のチャクラが急速に失われていくのが見えたからだ!!

「ぐっ……うあああ!? 喉が焼けるってばよ。っていうか虫いいい!?」

「オレの虫はチャクラを喰う。その中でもそいつらは、他人の体の中で急成長するタイプの虫だ。いわばオレのチャクラとお前のチャクラで育ったわけだが……。これがどういうことか判るか?」

ナルトが吐き出した場所から無数の虫が飛び立っていく。そいつらは現在進行形でナルトの周囲のチャクラを喰っているのだが……おかしなことがある。不思議なことに、再開された風遁を受けてもそれほど飛ばされていないのだ。

「この虫たちはナルト自身のチャクラで成長した。つまり、その風遁にも慣れているという事。もはや飛ばされたりはしない。全てを喰い尽くされない内に降参するのだな」

(え、エグイ。これが虫使いの術か)

なんか唐突に世界観が変わったような印象を受けてしまう。それほどの強烈な術で

あり、もはやナルトの風遁ではどうしようもない。それどころか急速にチャクラを喰われて身動きが取れないところまで行っている。
「ナルト！　ここで修業の成果を見せやがれ！」
「無駄だ。もはやそんなチャクラなど残っては……何っ!?」
「へへ……。何とか成功したってばよ」
　尽き掛けたナルトのチャクラだったが、急激に色の違うチャクラが発生し始めた。それは膨大なチャクラの渦でありナルト自身を覆い絡みついていく。虫たちなどそれだけで跳ね飛ばされたくらいだ。まあナルト自身のチャクラじゃないから、相性が変わったってのもあるんだろうがな。
「いくぜ！　これがオレの覚えた新術だってばよ！　忍法！　……あ、仙法だっけ？」
「なに!?」
「仙……法だと？」
　驚くシノに釣られて俺も驚愕を覚えた。本来はここで九尾のチャクラで戦うか、せいぜい口寄せする物だと思っていたのだ。綱手に習ってカツユになるか、それとも自来也に習ってガマ系になるかの差だと思っていたのだ。
　ここで仙法だと？　原作なんて当てにならねえ。そう思った瞬間である。
「まあいいや。これでも食らえ！　乱獅子髪の術!!」

（あれは自来也の!?）

猛烈な勢いでナルトノ髪が伸び、その周辺を埋め尽くしていく。風遁も同時使用されているので高速であり、かつあまりの密度なので虫もシノも避けれない。絡みつかれて思いっきり叩きつけられ、髪の濁流でグロッキー状態だった。

（そうか。本来は自然エネルギーを集める仙法なんだろうが、ナルトが持つ九尾のチャクラなら問題なく実行できるって事か。しかし……こいつはヤベエ）

ナルトは伸び放題の髪を適当なところでブツっと切断。すると異常なチャクラで生み出された髪はその殆どが消えて行く。残ったのも焼き払えるだろうが、とんでもない事実に気が付いてしまった。

（あいつ……もしかして、髪を伸ばすと少しだけクシナに似てないか？）

髪を色々弄った挙句ポニーテールにしたり、ツインテールにしたり。そんな仕草は今までのナルトに見られない物だったが、ホンの少し。ホンの少しだけ可愛く見えてしまった。というかナルトのイメージが強過ぎて盲点だったが、今成長期なんだよな。男と女で顔の造作が変わって当然。もっと言えば化粧とかで差も出るだろう。

「どうだ？　惚れ直したかよ！」

「お、おう」

「正直、見違えた。ヒナタが無事だったら何か言ったかも？」

何というかすっかりイメチェンの方が主題になってしまった。おかしい……こいつはナルトの筈なのに……クシナ似であるとしって、ちょっとだけ驚く俺が居た。

あれはナルト、あれはナルト。落ち着けあれはナルトだから恋愛対象外。

そう思う事で精神集中を掛け、脳内に残る原作イメージを思い出して煩悩を消し去っていく。というか女の子がいるからってどうってことはねえよな。ナルトだからギャップが大きかっただけで、いのだってテンテンだって原作同様の女の子だったろう。そうだ落ち着けば問題ねえ。

よく考えたら原作のお色気の術も、三代目や自来也が引っかかるくらいには可愛かったしな。俺がナルトに動揺させられるのも別におかしくはない。それに考えてみればまだ小学生だし、別に裸になってないじゃないか。そんな風に俺は何とか落ち着くことに成功した。

「サスケー！　負けんじゃねーぞ！」

「お、おう」

「あ、さっきと同じ反応……」

サクラさん、余計なツッコミは無しでお願いします。ようやく落ち付いたんだからよ。……とまあ、此処にいると流されそうになるので試合会場の方に向かう。シカマル

とリーの試合が見れないのは残念だが、順番とか考えたら仕方ねえよな。

「お母さんの力が減っちゃったから、血をたっぷり吸わせてあげないとねっ♪」

「てめえの母ちゃんは血を吸う鬼なのか？　寝言は寝て言えよ、この寝不足小娘」

俺との試合に向けてハイになってるのは原作通り。ネジとの戦いが中途半端で終わった事からか、どうやらフラストレーションがたまっているらしい。

「頑張りなよガーラ！　御姉やんが付いてるからね！」

「ウザイんだけど……どっちも」

「良いお姉さんじゃないか。戦場で眠るにゃ、ああいう人に守ってもらわないと駄目だぜ？　素直になれねえからそんなに目に隈が付くんだ」

普通の会話のフリしてナチュラルに煽ると早くもガーラはブチ切れ寸前だった。まともに射撃戦・忍術戦をするとこっちが不利なので、煽りながら冷静さを削っていく。やり過ぎると速攻で狸寝入りされて困る羽目になりそうだったが、もう原作は気にしないことにした。

「まずは小手調べだが、俺はこの千本でお前に傷を負わせる。ちゃんと砂の鎧をまとっておけよ」

「ガーラ！　その嘘吐きに騙されんじゃないよ！」
「……遊んでくれるの？　じゃあ遊ぼうか」
俺は片手に鋼鉄製の千本、もう片方に数枚の手裏剣を構える。手裏剣の方は予選でテマリに使ったのと同じ、死角を突く為の使い方をするつもりなのだが……。別に嘘は吐いてるつもりはねえんだよな。
「行くぜ？　この千本を見失うんじゃねえぞ！」
『……』
「馬鹿め！　そんなチンケな技でガーラが騙されるか！　見ろ、砂分身は自動でガードする！」
まずはゆっくりと手裏剣を死角から投げ入れる。まるで答え合わせをしているかのように、後ろの死角から跳ね返って来た手裏剣を砂から作られた分身が止めに行った。
「グ……ウア？　痛っ！」
「見えたかよ？」
「馬鹿な！　砂分身が追い付かないだけじゃなくて砂の鎧を貫通した!?」
タイミングを合わせてチャクラをたっぷりまとわせて放った千本は、砂の鎧を貫通することに成功した。俺の忠告を聞いて厚めに鎧を張っておけば無傷だったかもしれないが、咄嗟に張るレベルだと防ぎきるのは難しいのだろう。まあ、だからこそ煽ったし

千本が囮であるかのようにしゃべってたんだが。
「千本で怪我させるって言ったろ？　つーか自動防御ってのは、勝手に動くから自動なんだよ。その砂は最初に知覚した脅威にまず反応するんだ。分身になるのは驚いたがな」
　つまり反射して後ろの死角を突くと、その手裏剣を脅威と判断して砂分身は止めに行く。確かに手裏剣程度では貫通できるないだろう。だが、同時にそれは正面への砂の密度が下がるという事になる。だからこそ千本は防御を通り抜け、ガードを過信していたガーラは防御が遅れたのだ。
　いや、それでも砂の鎧は間に合った。だからこその絶対防御と言っても良い。だから俺はタップリのチャクラで貫通力を増し、言葉巧みに厚い防御を張らせないように誘導していたのだ。
「この嘘つき野郎！　可愛いガーラに傷をつけやがって！」
「予告通りだ。嘘なんか吐いてねえだろ？　だいたい……」
「キャハハハ！　凄い凄ーい！　こんなに痛たかったの初めてだよ！　次はあいつの血を吸わせてあげるからね！」
　原作の様にダメージを負ったくらいでテンションは下がらないらしい。むしろ興奮気味に周囲から砂を集め始めた。瓢箪の砂をガードに使いつつ、集めた砂を投げつけて

くる気だろう。
「まあそう来るよな。何しろ砂の硬度は掛けた圧力で発生する密度で決まるんだ」
「そんなの知らないってば！　今度はこっちから行くね！」
集めた砂を放って砂時雨に寄る攻撃を掛けて来る。俺は足にチャクラを集めて回避しながら、距離を取って一部を喉元に集めた。
「火遁、龍火の術！」
「そんなのじゃ無理無理～」
原作と違って糸を使わずに放つのでホーミングじゃないが、この術はかなりの初速を誇る。だが瓢箪の砂を直接操れば、それでも防御は奴の方が速い。砂時雨と龍火の術が飛び交い、時折に手裏剣を交えて嵐のような撃ち合いが始まった。
さっきも言ったが、ハッキリ言うと避けながら戦う俺と防御しながら戦うガーラ。気を抜くとヤバイのは俺の方で、撃ち合って有利なのはガーラの方だ。しかしあえて俺は撃ち合いに応じた。それは砂と火の物理的な差を利用する為だ。
「さてと。場も温まってきた事だし、そろそろ良いかな？」
「炎の鏡？　キレーだね」
オリジナルの術による炎の鏡を出して追加印を利用する。白とのコミュニケーションが上昇したことで、体にまとわなくとも多少は利用できるようになった。とはいえ二

つのカグツチを利用しないので、あくまで火力と規模が多少増やせるレベルでしかない。だが、それでも術の規模を上げる事に意味がある。

「もう一回忠告しとくぞ！　ちゃんと考えて防御しろよ？　女の子に火傷させて責任取れとか言われたくねーからな！」

「誰がお前なんかにガーラを嫁にやるか！」

「もーウルサイ！　黙ってて！」

炎の鏡を火遁チャクラモードとして身にまとわないので、勝手に付いてくることはない。仕方なく最小限の移動で砂時雨を回避し、写輪眼で操る為の残留チャクラにだけは気を付けておいた。

「火遁、龍火の術。そして手裏剣……擲弾影分身の術！」

「アハハ、炎の龍みたい」

「この規模の火遁、あり得るのか!?」

手裏剣影分身の要領で造った擲弾影分身で火線を増やす。だが火線が増えてもなお奴の動きは変わらない。奴を覆い隠す砂の幕が全てを防ぐ。そう『俺の思い通り』とは知らずに砂の幕がガーラを覆っていくのだ。

この結果は最初から分かっていたことだ。奴は瓢箪の砂でガードするし、チャクラと

チャクラが均衡するなら攻撃力は相殺され、砂の持つ防御力が奴を守るのだと。

つまり……この結果は俺の誘導通りだ。

「アハハ。凄かったねー。ま……だまだ……面白い事できるの？」

「……お前大丈夫かよ？　てっきり砂漠の人間は熱さに強いんだと思ってたがな。『凄い汗』じゃねえか」

ガーラは余裕の表情に見えたが凄い汗だった。服は段々と汗でグッショリ濡れ始め、小学生の体形でなければ倫理的に危険な状態だったかもしれない。俺はロリじゃないからなこの程度は問題ねえ。むしろナルトの笑顔の方が不思議とダメージがでかいくらいだ。

「あ……れ？　おかしいなあ」

「馬鹿な。ガーラがあの程度の熱で……」

「輻射熱って知ってるか？　お前は自分の砂からジワジワ攻撃されていたんだよ。その砂は勝手に周囲に漂うし、砂の鎧は直接肌に触れてるんだろ？」

砂を防御した時、チャクラに寄るダメージ自体はチャクラで相殺されている。だが熱量までが消えたわけじゃない。その熱はジワリジワリと砂に移り、少しずつガーラの集中力とスタミナを削っているって寸法だ。もちろんこの程度で普通ならば害が及ぶはずはない。特にガーラは砂漠の人間なのだ。耐性だけならそれなりにあるだろう。

しかし熱耐性というものは意思や代謝を多少保てるというだけで、人間を止められるわけではない。延々と輻射熱で焙られ続ければ、『まだ大丈夫だ』と勘違いしている間にいつしか限界を超えてしまうのだ。ガーラに豊富な経験があれば砂を内と外で使い分けて温度を遮断したんだろうが、楽勝で戦い続けた奴にそこまでの経験が無い。

「さて、ここで質問だ。普通に戦ってもその砂の鎧はスタミナを使ってたよな？　体中を自分の砂で焙られて……どれだけ体力は残ってる？　俺の方はまだまだ撃てるぜ！」

「ガーラ！　時間を掛けるとヤバイ！」

「くっ……うう……」

俺が地道に忍術戦をやった意味は二つある。一つ目は輻射熱でガーラの体力を削る為。奴は攻防一体の筈の砂を、自前の砂が防御のみと集中的に使っていたのでつい身近に残すように意識しているのだ。そしてもう一つの意味は、今更ガードを解くわけにはいかないと思わせる為だ。

この忍術合戦中に防御を解いたら大火傷を負うだろう。そう思わせて砂を一度に使わせない為にこそ撃ち合いを演じていた。もし砂漠送葬とか喰らったらそっちの方が危険だからな。

「もういっちょ手裏剣影分身行くぞ。今度は鳳仙花だ！」

「何、それ。花火……みたい……キレイ……」

俺は火遁・鳳仙花を準備し、そこから手裏剣影分身を使った。無数の炎と手裏剣が追加され、その威力から守ろうと砂がガーラに密着していく。こちらの威力が増せば増すほどに、ガーラを守るために高熱の砂が密着する。

「なんで？　まだ眠たくないのに。やだ……眠りたくな……い」

「サウナってのは度を超えると眠くなるよな。お休みお嬢ちゃん。悪夢があるなら俺が払ってやるから安心して眠りな」

このレベルの攻撃は砂の幕と砂の鎧でガードし続けしないと防ぎきれない。それでも守り切れるとは限らないが、ガーラのチャクラに加えて守鶴の力も使えばまあ何とかなるだろう。

そのまま行けば守鶴が出て来るかもしれない。だが……協力し合う人柱力と違って尾獣だけなら、写輪眼の幻術が効くかもしれない。俺はそう思って砂の幕の中に微笑むことにした。

（尾獣相手なら……そして、木の葉崩しが起きるとしたら、その時こそコツの使い道だ！）

万華鏡写輪眼。その真価は中忍試験の為だけに使うべきじゃない。だが、暴れる尾獣を止める為、そして何より……三代目の救援に向かうとしたらその時こそ、万華鏡写輪眼の出番だろう。写輪眼で無理だとしても

万華鏡写輪眼なら、そして下忍如きが関わるべきでない戦いにも、うちは一族の真価を持ってすれば状況を打開できるはずなのだから。

三代目救援作戦。それが万華鏡写輪眼を持って俺が挑むべき忍務だった。

三代目の救援作戦

気絶によってガーラ戦は終了したが、不穏当な気配を感じて万華鏡をＯＮにする。
膨れ上がる殺意に対して明確な意思の元、フルパワーで幻術を叩き込んで守鶴を黙らせた。永遠の万華鏡ではないから微妙かもしれないが、ガーラの気絶によって無軌道に暴れようとする程度の守鶴ならば何とでもなる。
もしこれが彷徨ってる尾獣なら最初からフルパワーなので無理かなとか思いつつ、今は十分な成果であると思っておこう。
「まさかガーラが！　くそっ！　この熱量じゃあ……。カンクロウ！」
「任せるじゃんよ！」
（やはりこいつは傀儡だったか）
真っ先にテマリが飛び込んできて砂の中のガーラを助けようとするが、強烈な輻射熱の為に手を出せないでいた。そこで代わりに救出したのがカンクロウだったのだが……焙られて行く間に表皮に当たる部分が剥げて行った。
やはり推測した通り傀儡だったのだろう。俺は試合が終わった事もあり炎の鏡を追随状態にしつつ、一時的に引いて兵糧丸を口にしておいた。原作での追撃戦を忘れたわ

けではないが、関与するとしたら三代目の方が重要だろう。
「なんだ!?　あれは風影様と火影様か？」
「ちっ。言わんこっちゃない。何か騒乱が始まるぞ」
　原作通りに木の葉崩しが始まった。審判を務める千本を咥えた上忍……だったよな？　が自体を把握している間にその場を離れて三代目救出に向かった。そうしないとガーラを追えと任務が与えられかねないので仕方ない。
「ちょっと待て！　お前程度が何の役に立つ！　例えお前が中忍並みの実力があったとしても……」
「うちは一族としてやるべき事を為す！　それともあんたにあの結界が解けるのか？　任務があるなら、解いた後で聞いてやるよ！」
　離れていた事が幸し、十分な助走距離を得る事ができた。振り向きざまに万華鏡写輪眼を見せつけて、うちは一族の中でも既に強者なのだと判らせておく。
　まあこの後が気にならなくも無いが、ナルト達が追撃戦に参加するのはサスケが追ったからだ。もしあの炎で出来た結界を何とかした後で向かうならば、先に合流して移動できるだろう。
「何をしに来た！　お前などが……まさか……」
「知ってるなら話は早い。この結界は俺が解除する。居るなら封印使いでも呼んでお

け。邪気の気配がする」
　暗部らしく仮面をつけた一人が制止しようとしてくるが、万華鏡写輪眼を知っているのが押し黙った。結界の解除自体は自身があるのだが、穢土転生までは間接的にしか邪らえないので、居るならば呼んでくれと告げておく。
「馬鹿め！　この四紫炎陣が下忍に解けるか！」
「てめえの常識ではそうなんだろうな。だが……うちはを貴様なんぞと同列に測るな！」
　結界の手前で音忍から罵倒されるが、反論しつつ追随している炎の鏡に万華鏡を向ける。形状変化で白の姿を取りつつ、気分転換というか知って居る者を誤魔化すために服装は忍者装束ではなく、中華系の服装にしておいた。
「……炎が人に化けやがった!?」
「そうさ。こいつは戴教の教主が一人、白天君。俺が契約した炎の化身だ。見ての通り俺の眼には炎に干渉する力がある」
　二つのカグツチ。本来の加具土命には形状変化と呪われた邪炎の力が。軻遇突智と名前を付けたもう一方には炎の性質を弄り、邪を払う白炎にも到達できる。
　そしてこの二つを兼ね備える事で、この四紫炎陣に干渉する事ができるのだ。白が持つ炎の体へ性質変化を起こさせ、結界を構成する炎に近づけていく。同時に結界の形状

自体にも干渉を起こし、動き易いように固定化させてしまうのだ。
「くくく。この結界、要は焼き尽くす炎の性質と同時に、反発することで時空間忍術を弾く性質があるんだろう？　なら同じ性質を持つ炎の体ならば問題ねえ」
「馬鹿な。そんな事できるわけがねーぜよ！」
「可能ですよ。とりあえず任務は何ですか？」
　炎の体ならば攻勢防壁としての炎の攻撃力には意味がなくなる。同時に反発力を形状固定によって一時的に無力化すればよい。この四紫炎陣は特化型の能力であるがゆえに『似た能力』に対して弱いのだ。
「三代目の援護を。俺は結界を解除してから行く。無理なら退散してくれても良いぞ」
「お安い御用」
　とはいえ炎の壁を超える経験など普通の人間にはるはずがない。同じことを俺の火遁分身でやっても無理だったろう。だがコイツは白の意識を取り込んだというか、死体と魂を呪って作り上げた存在だ。『魔鏡氷晶』で同じような事をしている白であれば、俺の援護もあって難しくはないだろう。
「さてと。見ての通り成功したな。……じゃあ結界師を一人か二人ほどブチ殺すか。暗部や上忍連中はまずは援護に徹してくれ。迂闊な接近は巻き込まれるぞ」
「言われるまでもない。さっさとやれ！」

俺は印を組んで炎の剣を出現させつつ、四人の音忍を見比べた。転生で記憶が曖昧に成っているが、こいつらくらいはだいたい覚えている。忍界大戦の連中とか殆ど覚えてないけどな。

「頭が二つに腕が六本。それと体格が妙にデカイやつか。それぞれ防御手段は持ってそうだな。……つまり犠牲者はてめーだ」

「このゲスヤローが！　動けねえ奴をなぶり殺しにする気か！」

狙いは紅一点の女忍者だ。こいつだけ耐久力が低いというか、特殊な防御がなさそうなので倒し易い。そして性格的にブチ切れ易いので結界を壊し易くもあるのだ。

原作知識がだいぶ役に立たなくなって来ているので、改めて手法を検討する。そもそも結界とは均等な術者が能力を調整しながら作り上げる物だ。ゆえに壊す方法は二つ。一つ目は言うまでも無く術者を殺す事。二つ目は単純に同調を乱してやることである。つまり、コイツを選んだのは二重の理由があるのだ。

「悪いな。そのまま何もできずに死んでくれ」

「このゲスチンが！　やってみやがれ！　その時がてめえの最後だ！」

「やめろ！　自分で結界を解く気か！　……クソ!?」

炎の剣に先ほどと同じような性質変化、結界周囲に固定化を掛ける。すると同じようにスルスルと女忍者の腹へと突き刺さっていった。それに対して敵もただではやられ

たりはしない。顔の周囲から例の呪印を増殖させ始める。
それは結果として、連中にとって最悪の形になるだろう。既に傷付いた状態で状態1への変化、こんな状況で結界のコントロールが保てるわけがない。こんな事をするくらいならば、残り三人が相当な負担覚悟で維持するべきだったと思える。
「どうする!?　もう保たねえぜよ!」
「てめーら!　全員で状態1になんぞ!　できるだけ保たせろ!　その間に体勢を整えていただく」
「……おう」
面白いことに音忍のリーダーは全員が状態1になることを決めたようだ。流石にこちらの都合に合わせてはくれないか。まあこれはこれでアリだとは思うが。
四紫炎陣が一瞬だけ膨れて、泡の様になりながら周囲から俺や暗部たちを弾き飛ばした。俺は炎の剣を離して、後は剣を構成する火遁分身に任せて態勢を整える。
「多由也!　お前は責任を取ってここで死ね!」
「ク……判ったよ!　このゲスチン共を皆殺しにして!　あ?　剣が……」
音忍のリーダーが指示すると多由也と呼ばれた女忍者は懐から何かを取り出そうとした。だがその前に、残しておいた火遁分身が正体を現したのだ。それも炎の姿を戻しながら……。

「死ぬなら一人で死にな！」
「自爆攻撃か！　しまっ……」
　火遁分身の爆発によって多由也が持っていたナニカは崩れさっていく。内側から焙られて女の方も虫の息だ。もう終わりの筈だが……こいつら状態2があるんだよな。
「大蛇丸様……申し訳ありません」
「いいのよ。サスケ君の秘めた実力が見れたのですもの。それもお為ごかしじゃない本物ののね」
　今にも結界が崩れ去ろうとしているのに大蛇丸は上機嫌だ。まあそれもそうだろう。手元にはまだ穢土転生体の火影二体。この会場に居る暗部とカカシ辺りの上忍を足しても問題なく勝てる。
　ゆえにここは浄化の炎で穢土転生を解除できるか、それとも封印術の使い手が居るのかが全てを分ける。
（俺の推測通り、穢土転生が複合忍術なら問題ねえ。その手の術は重ね掛けの為に敷居を低くしてるはずだからな）
　純粋に一つの術なら生贄一人で成立するなんて都合は良くない。だから複合忍術である可能性が高いのだ。しかし複合忍術であれば、基本となる忍術はあくまでゴーレム的な肉体構築のみ、それなら生贄は最高級の素材になるので帳尻はあう。つまりは追加

してサモン・ゴースト的な術で情報を元に魂を呼んで縛り付け、技術を備えた肉体を情報に合わせて加工しているに過ぎないのだ。魂を浄化できれば、原作通り何とでもなるだろう。

これに関してはある程度の自信があった。確か忍界大戦では封印が成功している。相当に研究しているはずのカブトの術式であるにも関わらずだ。そして二代目曰く、『この術式の利点は誰でも可能である』という事らしい。術式一つ一つはかなりランクを落として、基礎はランク6、追加術はランク7という様に術を追加で掛け易くしているのだと思われた。そして極めつけは、印さえ知って居れば自分で解除可能だという。それはつまり……コマンド・ゴーレムなりコマンド・スピリットで命令を出し直せるって事だよな。

四紫炎陣が消えていく。どうやら術のバランスが崩れて維持できなくなったらしい。それでも何とかしようとしていたのは、三代目と戦いつつ態勢を整えようとした為だろう。

「白天君！　戻って来い、斬天君と交代させるぞ！」

「……承知」

三代目の援護に回していた白を手元に戻し再不斬へと姿を切り替えていく。同時に

俺のチャクラに合わせて調律しつつ、服装は中華系でもカンフースタイルの物にしておいた。この辺がチャイナである白との差だ。不要とは思うだろうが、霧隠れの連中が居ても困るし、意識を切り替える意味でも服装の差は割りと重要である。
「あいつらを斬れば良いのか？　そうならさっさと得物を口寄せしろ」
「判ったよ。手持ちにゃ戦利品の首切り包丁しかないが良いな？」
　予め決めておいた口裏を合わせる。つでに口寄せした首切りに浄化の炎をまとわせて炎の大剣を作り上げれば完成だ。直接に再不斬に掛けるとこいつら浄化しちまうのが難点だから丁度良い。
「奇妙な格好ね。どこの国の装束かしら」
「戴教は外つ国の宗教らしいからしらねえな」
「服なんざ飾りだ。どうだっていいだろう」
　興味深そうな大蛇丸の言葉に俺は答えるが、所詮はアリバイ造りと思っている再不斬の方は取り付く島もない。誰から倒そうか、それとも俺を守って戦おうか少しだけ悩んでいるのだろう。
　どうやって大蛇丸を倒そうか、そもそも倒せるような奴じゃねえよなあとか悩んでいると、驚きの事実が判明した。やはり原作知識なんざもうサッパリ当てにならねえ！
「つれないのね。でもまあそっちが意匠替えするなら、こっちも気分を切り替えようか

しら。こんな風にね……」
「大蛇丸……その顔は……」
「大蛇丸……その服は……」
顔を変え衣装を変えた大蛇丸。その姿は驚愕に値したが、三代目と俺とでは意味が異なる。三代目は大蛇丸の顔が見知らぬ若者……他人の物であった事。そして俺の驚愕は服装が見知っている物だったことだ。
裾の長い黒衣に赤い雲の模様だと……。
「まさか……。その服、暁か！」
「あら？　よく知っているのね。その顔……知っているのは組織だけじゃないわね？　まさかそこまで知られているとは思わなかったわ。ますます興味が出ちゃう」
くすくすと笑う大蛇丸だが、そんなのに構わっている余裕はない。奴がまだ暁に所属しているのなら、今回の件は非常に難易度が上がる。大蛇丸相手というだけでも危険だが、奴らの目的が変わってないのであれば『別の意味で危険』な人物が出るのだ。
もしこの陰謀が二重性を持っていたらどうだろう？　音と風が組んで木の葉を狙うと同時に……、失敗したらそのまま風を裏切ってガーラを攫うつもりなのだとしたら！
「うふふ。それだけの頭脳を持ちながら、さっきまで戦っていたあの子を心配してるの？　妬けちゃうわね」

「どういう事だサスケ。暁はただの傭兵組織ではないのか？　何を知っておる？」
「……イタチが所属してるって噂を聞いたから調べた。……尾獣を収集してるんじゃなかったか？」
「何!?」
　大蛇丸がヒント……というか、こちらを焦らせる為に秘密を開示する。やはり俺が知っているという事を焙り出そうとしたのだろう。三代目の質問に答える事でどういう状況なのかを端的に説明していく。
　まさか大蛇丸がまだ暁だなんて思いもしなかった。しかし原作がズレ込んでいるのだ。僅か数年のズレでそんなこともあるだろう。そして……さっき俺はガーラも守鶴も眠らせてしまった。もし奴らの手の者が……たとえばカブトが狙っていたらヤバイんじゃないか？　俺のやったことは奴らの手間を省いてやっただけなのだ。
「他に何を知っているのか聞き出さなくちゃ。……いいえ、それともこのまま収穫しちゃおうかしらね？　十分に成熟しているみたいだし」
「……俺の体を奪う気か。この眼には二人分のチャクラが見える。その体は他人の物なんだろ」
「く……。げに恐ろしきは人外のモノよ」
　原作と違って大蛇丸自らのネタ晴らしが無かったようなので解説を入れたが、三代目

は少し誤解したかもしれない。尾獣を収集して中身を抜いたり、自分の中身を他人の中に入れるような連中だと思ったとか？　まあチャクラを写し取って偽者のメンバーを自在に作り出す術とかあるし、あながち外れてはいないんだが。

「初代様は他の連中を抑えて。二代目はサスケ君を」

「ちっ！　むざと掴まってたまるかよ！　火遁……鳳仙花！」

「止せ！　穢土転生に攻撃など効かぬ！」

効かぬは承知！　俺は鳳仙花のアレンジである爪紅の為に手裏剣を投げつつ、灯す炎に浄化の性質を与えた。こっちに来るのが二代目ってのは逆に都合が良い。一番危ない人だし……もし、解除できるならば好都合だからだ。

「ええい！　手裏剣影分身の術！」

「……」

ここで手裏剣影分身を掛けて、浄化の炎ごと手裏剣を追加していく。演出するのは俺の焦りであり、無数の手裏剣弾幕という手順だ。その実態は浄化の炎で二代目を焙る事。穢土転生に攻撃は効かないので、本来の二代目と違って真っ直ぐ突っ込んで来るだろうと踏んでいたからだ。

今狙うべきは二代目を倒す事じゃない！　二代目を操る術を破る事！　もちろん穢土転生が解除されたって構わない。追加印で手裏剣の数を増やすべく、チャクラを練っ

てドンドン追加していく。
「止めんか。効かんと……」
「がっ!?　クソ……」
「ふふ。知らないというのは幸せな事ね。二代目様、次はさっさと捕縛して頂戴な」
三代目の忠告もむなしく、俺は蹴り飛ばされて屋根の瓦にかろうじて引っかかるレベルだった。もちろん再不斬や暗部たちに援助する余裕などない。むしろ下忍の癖にここまで来たことに怒りを覚えているかもしれないが。
だが、さっきのタイミングならば十分に捕まえられたはず。……ということはもしかして……。

救出作戦は人柱力にこそ

瓦に捉まって何とか屋根よりの落下を逃れながら、まだ無事な事に思考を巡らせていた。さっきのタイミングならば捕まっていてもおかしくはない。

やはり穢土転生そのものか、操る為の札に影響が出たのではないだろうか？　鳳仙花には浄化の炎を灯していたし、俺の考え通りに複合術であるならば……。

術式の各段階に色々な術が絡み合っている。ならばその部分を改良する為に、邪な力を引き入れていてもおかしくはないのだ。その邪悪な力を払ったように思われた。

「あら……その術は……」

「忍法……」

「馬鹿な。死者が穢土転生を使うだと!?これではネズミ算式に敵が増えてしまうではないか！」

二代目……扉間が印を組み始めると大蛇丸は興味深そうに眺め、暗部の一人が驚愕の声を上げている。だが俺の眼にはチャクラの流れがその腕ではなく、中に還元されてい

くのが見える。
「穢土転生……の術……」
「二代目様。術を使うのは構わないけれど、サスケ君を使っちゃだめよ？　生贄は適当に見繕ってくださいな」
「火影様どうしたら……。ここれは由々しき事態ですぞ！」
　大蛇丸の静止を聞いたフリをしているが、周囲は死者を呼び寄せる物として戦々恐々としている。もし穢土転生を使える死者を呼び寄せてしまうと、どうなるかを皆知らない。だからこそ大蛇丸は悠長に眺めているのだし、暗部はこれからどうなるかを新人の様に震えているのだ。
「うろたえるな!!」
　三代目……ヒルゼンの怒号で辺りが震えた。大蛇丸は眉をしかめた程度だが、暗部の連中は一瞬だけビクっとした後で姿勢を戻した。おそらくは喝を入れられてやるべきことを思い出したのだろう。
「暁の狙いが尾獣としれた以上、これを守るのがお前たちの役目。そして何が起きようともこの里を守るのは火影であるワシの役目！　サスケ！　ナルトは任せたぞ！」
「っ！　その任務……いや忍務、確かに了解した！」
　二代目のチャクラに大蛇丸の紐が付いていないこともあり、俺は即座に了承してチャ

クラを練り始めた。ここからの逃走とガーラの元に急行する為だ。
「あら？　できるとでも思っているのかしらねえ」
「無論だ！　お前たちはサスケが移動するまでの時間を稼げ。もちろん殿軍はワシが務める！」
　挑発する大蛇丸にヒルゼンは如意棒を構える。だが影分身を行う事も無く、もちろん屍鬼封塵も行使していない。扉間はヒルゼンに向かって睨んでいるが、その目にはどこか笑みの様な印象が感じられた。
「どこかで聞いたセリフだが。言うようになったではないかサルよ！」
「ですな！　二代目様！」
「あら？　知性が……」
　ここに来て扉間もヒルゼンも覚悟を決めた笑みを見せる。それこそは火の意思を受け継いだ者の役目なのだろう。明日の為に終わる今日、里の為に燃える炎の意思。その様子を見て大蛇丸はどこか不快気な表情を見せている。
「……早く行け！」
「させないわよ！　何をしているの二代目様！　初代様もそんな奴は、さっさと絞め殺してやりなさい！」
「そうはさせっかよ！　斬天君！　一発でいい！　初代火影をぶった切れ！」

ヒルゼンが初代……柱間より伸びる木遁の拘束を強引に引き千切って防ぐのと同時に、俺は瓦から手を離しつつ再不斬に指示を出す。再不斬に持たせた首切り包丁には浄化の白炎をまとわせてある。体が火遁分身で構成された奴なら、特攻気味の攻撃でも一撃くらいは浴びせる事が可能だろう。そうなれば先ほどの二代目の様に、何とかなる可能性はあった。

そう思って屋根を遮蔽物にそのまま遁走する事にしたのだ。着地と同時にバランスよく足に配分しながら更に下の階を目指そうと……。

「木遁。屋台崩しの術！」

「何っ!?」

だが事態は驚くべき方向に動いた。柱間は何と屋根で支えきれないほどの大樹を作り出したのだ！　大樹は最上階の屋根だけではなく、建物全体を傾けて斜めにしてしまった。

「サスケ君を捕まえなさい！　そうすれば今日のヘマは帳消しにしてあげる！」

「「はっ！」」

おかげで俺を追う為に道が拓けてしまい、音忍たちが追ってくる。そいつらが即座に俺を捕まえていないのは、単に暗部が割って入ったお陰に過ぎない。

「すまねえ。恩に着る」

「良いからいけ！　それがお前の任務だ」
「ちっ。上忍相手にゃちとキツイぜよ」
呪印を開放する事で中忍の中で精鋭級のあいつらは一時的に特別上忍級まで急成長している。だが暗部は全員が上忍級だ。おそらくはこのまま状態２になって瞬間的に圧倒する気だろう。
だがその事を忠告するにしても良いアイデアを思いつかない。ならばここは距離を稼ぐことで音忍たちを焦らせるべきだろう。階下に降りながら反発するチャクラを足元に一気に集め……それを背中へとゆっくりと全身に移動させていく。
「痛ってえ！　クソが……」
建物を蹴ってとにかく高速で地面に向かい、四つん這いの態勢で四点着地。そのまま転がることで衝撃を逃がした。もっとも衝撃を殺すためのチャクラが反発し過ぎてゴロゴロ転がっちまったのは情けないが。
「来たな！　こっちだ」
「あんたは審判の……」
着地して控室の方に向かおうとして上忍に呼び止められる。楊枝代わりの千本を咥えてなかったので印象が違ったが、審判をしていた奴だった。砂の上忍と戦っていたはずだが……。

「話は聞いている。お前はあいつらを追え」
「確認するが砂の連中だけか？」
　以前から用意していた兵糧丸を巻物から取り出しながら、小袋で取り出し自分用の数粒以外はくれてやる。その時にちょっと笑いながら答えてくれたが、内容は非常に困るものだった。
「いや。裏切者にナルトも連れていかれたようだ」
「なん……だと！　それで連中は何処に行った！」
　これには驚愕もので追いかけなければ大丈夫だろうと思っていた自分が憎い。というよりもカブトあたりの手際が鮮やか過ぎる。原作知識に頼り過ぎていたと痛感する思いだ。
「こいつを使え。油女が使える奴を集めて先行している。臭いを追いながら行ってるからまだ間に合うはずだ。オレが頼むのもなんだが……。四代目の娘さんを頼む」
「判った。あんたもな！　ここは任せた！」
　兵糧丸の代わりに渡されたのは小さな竹籠に入った虫だった。どうやらナルトのチャクラを奪って生まれた虫らしい。籠から出すと目標に向かって移動するそうだ。
　しかしここであの時の虫が活きて来るとは……。何が幸するか判らないもんだな。まあシノは抜け目ないから、ヒナタあたりが追いかけると踏んでそっちにも付けている

とは思うが。
「逃がすか！　オレは羅生門を口寄せする。二人とも道を造るぞ！」
「判った。多由也の敵討ちも必要だしな」
「はっ！　辛気臭せーのは止めるぜよ！　これは奴を狩るか逃げられてオレらが喰われるかのゲームぜよ！」
　傾いた建物の屋根を音忍の中のデブが担ぎ、そこに腕が複数ある奴が蜘蛛の糸みたいなチャクラで固めてしまう。それを足場に首が二つある奴が、門を口寄せして平たんな道を作ってしまう。強固な羅生門は下から攻撃する上忍たちからの攻撃を防ぐためでもあるのだろう。
　そんな中、ギリギリで俺は会場から抜け出して行方を晦ましながら、シノの虫を追い掛けて行った。

　それから細かい事は色々あったが細かい事は除いて下忍チームと合流したあたりから話そう。
　メンバーはサクラ・シノ・ヒナタ・シカマルの四人。俺を合わせて五人だが……なんとなく我愛羅追撃戦よりもサスケ奪還編を思い出させる。
「……って訳だ。ある程度は推測混じりだがな」

「背景は理解しました。それならば猶更の事！　一刻も早くナルトさんを追い掛けましょう!!」
「いや。それでもオレは砂の連中に話を持って行った方がいいと思う」
　暁の事も含めてかいつまんで説明するとヒナタは先を急ごうとし、シカマルは逆に砂の連中を回収して行こうと提案した。
「どうしてですか！　ナルトさんが死んでしまうかもしれないんですよ!」
「理由を話せ。何故ならばオレは判断材料を持たないからな」
「同じく疑問。こんな状態で寄り道する理由を教えて欲しい」
　時間を浪費する行為に普段は優しいヒナタが怒りを覚えるが、シノとサクラは共に首を傾げている。ちなみに俺はどっちでもある。ナルトを助けなきゃと思う反面、シカマルの頭脳や砂の戦力も知っているからだ。
「相手は医療班の息子に砂の裏切りもんだぞ？　強烈な毒なり痺れ薬を持っているに決まってる。お前ら何とかできんのかよ？　逆に風遁があれば撒かれた毒や煙幕を何とかできるしな」
「……言われてみりゃあそうだな」
　俺は最初に戦力の面を考えていたが、確かにシカマルが言う様に毒の問題はキツイ。二部でのことを考えれば毒対策しているかどうかで話は変わって来るだろう。シカマ

ルは薬物にも詳しい奈良家なのもあってその辺りにいち早く気が付いたのかもしれない。

「悪いが俺を追って来る連中の懸念もある。戦力は多い方がいい」

「その辺りの内容は移動しながら話そうぜ。ヒナタじゃないが時間はまるで足りてねえ」

納得した俺はシカマルの援護をすべく砂の戦力を当てにした方が良いと告げた。直線的に向かうと追撃を受ける事もアリ、一度躱す意味もあるのだと納得させる。そして時間が押している事もあり、砂の連中が逃げ込んでいると思わしき場所を目指すことにした。

「……途中にトラップがあるので注意してください。もっともそれを潜り抜けても話を聞いてくれるかは別ですけどね」

「それでも話を付けるしかねえだろ。俺が……」

「サスケは止めとけ。俺たちの中でも一番強いんだ、能力的にも警戒するのは当たり前だろ？　面倒くせえが話さなきゃならねえだろ。オレが適当に言い包めて来る」

ヒナタの忠告に俺が行こうと言ったが、シカマルがため息つきながら代わりを申し出た。まあ試合でさんざん挑発したのは俺だしな。印象が悪いのは承知している。せめ

てガーラを熱した砂から引き剥がす時に、手でも貸してれば別だったんだろうが。
　そしてシカマルは直接の戦闘タイプじゃない。機転が利くのは試合で見せているが、自分の影を使って縛る事もアリ、相手に影を見せて居れば脅威度は判り易いのだ。逆に攻撃されそうなときは、原作で見た試合会場に浮いたテクニックで瞬間的に逃げることもできる（影で自分を持ち上げたやつ）。
「お前らも騙されたことは聞いている！　話を聞いてくれ！」
「それ以上、近寄るな！」
　両手を上げて接近するシカマルに対し、一本の手裏剣が牽制する。隠れている事に気が付かれて焦って居るはずだが、困っているのは向こうも同じはずだ。ナルトが捕まっているのを見たらしいので、話だけなら通じるだろう。
「オレらの仲間も掴まって困ってんだ！　ここは共同戦線といかないか？」
「信用できるか！　お前たちとはさっきまで戦っていたんだぞ！」
　ナルトの事を口に出したにも関わらずテマリの方は拒絶した。気持ちは判らないでもない。裏切る為に中忍試験に参加して置いて、イザ裏切ったら自分たちも切り捨てられたのだ。疑心暗鬼になって当然だろう。
「ちっ。時間がねーんだぞ！　相手に中忍どころか特別上忍クラスが居なきゃ声掛けねーッっての！　……オレが人質になる！　装備を全部取り上げてからオレを間に挟

め！　医療道具一式もあるからくれてやるよ！」
「……少し待て！」
　大胆にもシカマルは忍具を外してから座り込んだ。とはいえ忍術は使えるから信用が置けるわけではないが、治療道具の話が出た段階で考え始めたのは怪我人が居るのだろう。
「……誰か倒れてますよ。様子を見ながらブツブツ呟いているのは、相談しているのかそれとも迷っているのか。しまったな。読唇術を習っておけばよかった」
「ヒナタ。お前……案外余裕だな」
　ヒナタは白眼で見た光景を映像型幻術で投射して見せてくれる。とはいえこのことを伝えて居れば、シカマルも話を変えたはずだ。最初に告げなかったあたりヒナタもやはり焦っているのだろう。
「条件がある！　木の葉の連中に口を利け！　負傷者の治療と砂の上忍に事の次第を伝える！　お前たちの為にもなるはずだ！」
「判ったよ！　こっちにとっても好都合だからな。怪我人が居るって話だし、急ぐならこっちは話し合いは要らねえ！」
　シカマルはノータイムで話しに乗った。俺たちに相談すればまた迷って時間が掛かることもあるのだろうが、話をせずに受け入れる事を使って交渉材料に変えてしまっ

た。
「勝手に決めちまったがそれでいいな？」
「時間がねえ。俺は構わねえよ。……残って案内するとしたらサクラだな。試合で戦ったカンクロウが怪我しているみたいだし、手の内が判ってることもあるが、戦った相手と肩組んでたら見た目にも判り易い」
「判った。……ナルトをよろしく」
「当然です！　任せてください！」
　シカマルの言葉に頷きながら巻物にメモレベルながら内容を書いていく。俺たち全員の母音でも押しておけば、それなりに意味はあるだろう。
　そうしていると服を割いて作った粗末な包帯で覆われたカンクロウが出て来る。黒装束だけでは足りなかったようで、テマリの服も使ってあった。
「私が言えた義理ではないが……。カンクロウの事は頼む。代わりに何でも……」
「なんでも要らね。できる事だけ教えてくれ。それとコイツを渡しておく」
　シカマルは忍具の中から医療道具だけを取り出し、自分の服に包んでテマリの方に放り投げる。そういえば原作と違うから服をまだ着てたよなあ……とか思いつつ、『寒そうだからその服を着てな』とか言う辺りナチュラルに口説いていた。これは歴史の修正力なのだろうか？　末永く爆発してろと言いたくなった。

「……すまない。代わりに重要な事を一つ教えておこう。相手は特別上忍どころではないぞ。『赤砂のサソリ』……かつて砂を裏切った最上級の傀儡師だ」

テマリが告げる言葉は俺たちに衝撃をもたらした。そういえば大蛇丸が暁を裏切る前にはサソリと居たことをようやく思い出す。芸術家コンビの印象が強いのですっかり忘れていたのだが……。

いずれにせよ前門のサソリとカブト、後門の音忍三人。いずれも避けては通れぬ強敵だった。サクラの代わりにテマリを加えた五人で果たして倒せるのだろうか？

フェイク・フェイク・フェイク

相手にサソリが居ると聞いて、むしろ大蛇丸の巧みさを感じた。奴の目的が大筋では変わって居ないのだとしたら、暁への貢献を果たすために自ら囮になると見せつつ、邪魔なサソリの手駒を削る事ができる。もし大きな『損傷』を受けて、パートナーがイタチに変更されれば万々歳だろう。

ただサソリが関わったにしては関与の規模が小さいので、術名は忘れたが他者に自分のチャクラを分け与えて能力を貸し出す術を使っているのかもしれない。その場合はサソリ自身の損害はなくなるが、その場合は大蛇丸の功績だけが残るので何の問題も無いと思われた。

「そういえばカンクロウの傀儡が見えなかったが、破壊されたのか？　奪われたのなら影分身だけを送り込んでる可能性はあるな。傀儡使いの技には影響少ないだろうし」

「可能性はあるな。実際どうなんだ？　オレとしちゃそっちの方が楽でいいが」

「……確かに奪われた。口惜しいが仕込み情報や毒の知識は可能な限り伝えよう」

移動しながらの会話だったこともあるが、テマリの返事は何故かシカマル経由で伝えられた。やはり試合での印象が悪かったのだろう。なんだか二人の仲を取り持ってる

みたいで釈然としない。
　とはいえサソリ本人では無い可能性が高いのはありがたい。昔造った傀儡を再利用する程度なら、カンクロウも知らないバックドアがある程度だろうしな。最新型の毒とか喰らったら目も当てられない。
「改めて確認するぞ。目的はナルトとガーラの二人を助け出す事。敵を倒すのは二の次だ！　サスケを追ってる音忍に関しちゃ一度スルーして横槍を入れて済ませる。時間と最終戦に残す余力が何より重要だからな」
「当然です！」
「了解した」
「同じく」
　テマリが俺に隔意を抱いている事もあり、シカマルが仕切って指示を出す。頭脳に関してはこの中でピカ一なので申し分はない。必要アナら俺の方から情報を出してきゃいいしな。
　そういう訳で移動しながら情報を受け渡し、簡単に対策を練りながら攫われたお姫様たち……というには物騒な二人を追い掛けていく。
「音忍の三人に関しちゃ、最後に幾つか見れたから何とかなりそうだ。特殊なチャクラで一時的に底上げをするタイプで、結界忍術のエキスパートっぽいから、後は自分の所

の家系忍術で手いっぱいだと思う。その上で、音の下忍やカブトの仲間みたいな肉体改造をしてた」

「そろそろ追いつくはずだ。手短に頼む」

　これに関しては異論が出るようなことでもないので、かいつまんで説明をして行く。基本的に特別上忍級で、中忍だが特殊なチャクラで一時的に上忍以上に成れる。八門遁甲の陣をリーが使っていた事もあり、この情報に関してはおおよそ把握したようだ。

　その上で結界術と肉体改造によって、大蛇丸を守る護衛のエリートであると説明した。

「二人目は腕が六本あって蜘蛛みたいなチャクラの糸を使ってた。重い物を支えていたのでおそらくは隠遁を流せば粘着、土遁を流せば硬化くらいの変質は出来ると思う。二人目は頭が二つあって明らかに複数人で掛ける術を一人で担当していた。おそらくは実は二人で一人を装っているとか、傀儡に封じてるタイプだな」

「なるほどな。肉体改造たあ古臭いが、流石に考えてやがる。三人目と四人目は？」

　忍は混血や薬物などで地味な肉体改造を行っているが、昔はもっと強烈な事をやっていたらしい。そういう意味でダイナミックに肉体を改造する音忍は、昔ながらの方法で一代で大幅な力を手にしたタイプだと言えた。

「四人目は倒したはずだが……。三人目は見た目だけなら体格が大きく異様な怪力の持

ち主。スタンダードなタイプなのか、ちょっとした改造で特殊能力を得てるのかは分からない。もし持ってるとしたら大蛇丸を守り易いように、チャクラの吸収とかじゃねえか？　ガーラと戦ったあいつみたいな」

「ありえるな。高い基礎能力を他人のチャクラで強化するタイプか」

ひとまずこれで試験会場で見た限りにおいては全員分の説明はした。状態2に関して説明するかは迷うが、八門遁甲を例に考えている時点で段階性強化くらいには想像しているだろう。

「だいたいそんなところだ。四人目には火遁を浴びせて倒したが、特殊なチャクラを暴走するくらいの危険水域まで上げてたら生きてるレベルだと思う。とはいえベタな幻覚系だと思うから音や光に注意してりゃあ問題ねえと思う」

「おーけー。おおよその見当は付いた。それじゃ作戦を説明するぞ」

念のために状態2に関して臭わせつつ話を締めると、どうやらシカマルの方は移動しながら作戦を考えていたらしい。簡単な作戦だと期待したいが、どれだけ切れる頭なんだよと突っ込みそうになった。

「大前提はさっき言った通りナルト達の救出だ。その為にはテマリさんとサスケの二人は無事に送り届ける必要がある。二人は大規模攻撃くらいで後は突破に専念してくれ」

「テマリで良い。こいつと二人と言うのは不満だが我慢しよう」

「俺の方に異存はねえよ。二人とも無事に救出しようぜ」
　相手にサソリとカブトが居ることもあり、戦力温存の観点から俺ら二人が突破するのはまあ当然か。テマリが居なきゃ仕込み傀儡や毒の知識は得られない。風遁あれば傀儡ごと火遁で燃やせるしな。
「音忍の方は横槍入れて負傷退場ってのが一番だが、無理な場合はヒナタ中心に足止めを行う。これは傀儡使いに柔拳が向かないのと、音忍の特殊なチャクラ対策でもある」
「筋は通ってますね。悔しいですがナルトさんの事はサスケくんに任せます」
「オレはどうする？　何をすればいい？」
　シカマルの案に今のところ穴は見られない。ヒナタも不承不承ながら納得し、逆に期待するような目でシノは自分の役目を尋ねた。これまで組んだことも無い相手への理解度を見たいのだろうか？　確か原作と違って無痛症で自分を感じられないと言っていたしな。
「シノ。あんたが今回の作戦の肝だ。あんたの虫で起爆札とか忍具に紐付けて運べるか？」
「造作もない。巻き込むような使い方は困るがな」
　虫に寄る分身……いや、単純に運ぶだけか。それでも多角的に爆発や閃光を起こせるのは大きい。特に閃光はシカマルの影真似の術を飛躍的に伸ばせる。単純な防御担当

のデブを引き離せるだけでも大きいだろう。
「なら何とかなりそうだ。まずは大まかな作戦の概要を説明するぞ？　逃げながら変化で姿をシャッフルして相手の認識を撹乱する。後は足止めを装って間違った方向へ誘導する」
「了解」
白眼があれば相手のルートはおおよそ把握できる。向こうも化けている可能性があるが暫く観察すれば何とでもなるだろう。その上で斜めに駆け抜けて、向こうに発見されるという手順らしい。機動戦で撒く様に見せておいて、虫たちと忍具を各所に潜ませるという算段だとか。
こうして音忍の接近に合わせて作戦を練り、各自可能な限りの詳細を詰めて迎え撃つことになった。

シカマルの作戦そのものは上手く行った。実際にシノとシカマルが自分の姿で虫や影真似を使って足止めを行って見せて、途中で連中に見切らせる。後は二人に変化した俺とテマリが連中に置いていかれるだけだ。

「はっ！　オレ達は大蛇丸さまを護衛するエキスパート。その程度は既に見切ったぜよ！」
「鬼童丸！　さっさと片付けて来いよ！」
「くっ……」
　人数の問題があるが連中は自分の腕に自信があるから平気で分散行動を行う。俺ら二人に対して残るのは一人だけ、しかも誰が残るかは想定済みだ。
「大したものだな……」
「あん？」
「てめーの事じゃねえよ。俺らの仲間が頭良いってだけだ」
　この鬼童丸とかいう蜘蛛野郎が残るのはシカマルの予想通りの流れだった。粘着性の糸で動きを止め、何かあっても固くした糸の結界でクナイや手裏剣は簡単に弾けるから適任ではある。糸だけなら奇襲性もあるしな。
「糸で絡めるだけで向こうに行ってくれた方が楽だったんだが、そこまで都合良くはいかないか」
「……こいつまで向こうに行ったら連中が危険だろう。お前は仲間が心配じゃないのか？」
　テマリがガーラを心配しているから合わせてやったら、冷血野郎扱いされてしまっ

た。解せぬ。ここは俺の方が大人になってテマリの隔意が融けてないからなと思っておこう。

ともあれ戦闘態勢を整えるべく、偽装を兼ねて預かっている虫たちに少しずつ粘着する糸を解除してもらった。

「大した余裕ぜよ。とっ捕かまった獲物の癖してくっちゃべってる暇があるとはよお！」

「実際余裕なんだよ。お前の力で捉まる事までこいつには予想済みだ」

「あんまり派手にするなよ？　それこそ戻って来ちまう」

テマリはニヤニヤした鬼童丸に対して、シカマルに変化した自分の顔を指しながら応える。付き合う前から惚気るとか良い加減にして欲しいんだが。

「問題ない。この距離ならば扇を使わずとも届く。忍法……」

「っ!?　コイツたしか……砂の忍か！」

テマリは変化を解いて風遁にチャクラを回すのだが……。トーナメントの本戦に上がってないとはいえ、一応味方になったりガーラを捕まえる際には護衛になったりする相手だ。流石に顔くらいは覚えているのだろう。鬼童丸は咄嗟にキョロキョロと周囲を見渡した。

それまで足元を確認していた事を見ると影真似に注意を割いていたのだろうが……

ここで風遁で虫を運ぶという事に警戒対象を切り替えたのだろう。まあさっきまで虫で物を運び、影を造りながら影真似中継とかやってたしな。そうなるのも仕方ない。
「風遁・カマイタチの術！」
「はっ！　その程度！」
「……」
　鬼童丸は風遁の直撃を躱しながら間に合わない場合のみ、硬質化させた糸で自分を守る。原作では確か柔拳を防ぐために使ってた奴だ。
「俺はナルト達の援護に向かう」
「問題ない。ここはあたし一人で十分だ」
　さりげなくテマリに任せた風を装いながらその場を去る。ここでやっておかねばならない事と、やってはならない事がある。もちろんやってはならない事とはサスケであることを悟られてはならない。シカマルたちが仕切り直しの為にばらすのアリだが、ここでバレると追いつ追われつの有利不利が変わってしまうからだ。
　そしてやっておかねばならない事とは、テマリにフォローを入れて鬼童丸を倒して駆けつけられる程度の援護をせねばならない。でなければ傀儡戦で面倒なことになるからな。サスケとして行えば簡単でもシノのフリをしたままだと少し手間が掛かる。
「少し置いていく。気を付けろ。奴は決して弱くはない」

「さっさと行け！」
「チっ！　羽虫如きが！」
相変わらずこちらを見ているので、役目を終えた虫たちの大半を離すことで、鬼童丸の注意を反らしながらシノのもとへ合図を送った。
これで向こうのチームに俺の脱出が知れると同時に、もし土遁で捕まっている場合でもデブに奇襲できるはずだ。場合によっては変化を解くことで、探さねばならないと焦らせることもできるだろう。最低限のフォローを追えた事でさっさとコイツを倒して追撃する為の態勢を整えよう。
（……あの女……多由也だっけか？　居ないな。本当に倒せたのか？）
連中の会話を思い出すことで、なんとなく名前の以外も思い出して来た。口汚い女で音を使った幻術や、口寄せ召還を行ったと思うが……。追撃回避のために隠れて追っていないので、安心して行動ができる。
姿を隠しながら連中が誰も見ていないことを、通常の写輪眼だけＯＮにして確認。その後は起爆札を仕掛けながらナルト達を追い掛ける。テマリは一体時間が経過した所で、奴をこちらに追い込みながら戦闘することになっている。虫も含めて注意が多重にそがれることで戦い易くなるだろう。
（鬼童丸は遠距離戦も得意だから、矢は風を貫通して相殺にはならない。だが相殺には

ならないからこそ削り合いになる）

こいつらに関しては忘れている事も多いが、蜘蛛男が弓でネジを攻撃したり、頭二つある奴は一人がもう一人に寄生しているのは覚えている。それだけ印象深かったので、忘れても思い出し易いとも言うが。逆にデブの方は吸収能力が原作で増えたために忘れてたくらいだ。ツルギというのが使ってなかったら思い出さなかったかもしれない。

そして弓矢での攻撃は風を貫通するだろうが、風は風で普通に当たる事になる。矢にチャクラを集中させねばならない状態で防御にも回せるだろうか？　まして虫や起爆札にも注意を割かねばならない状態で。

（これで全員が相当有利な状態で戦えるはずだ。唯一の懸念はキレて最大風速で拭かせるために扇を使う事かな？　まあこれから危険地帯に飛び込む俺が心配する事でもねーか）

寄生する能力はヒナタの柔拳に相性が悪いし、逃げながら戦えば土遁でいきなり取っ捕まる事も無いだろう。音の連中はシカマルとシノが居ないと思っている事もあり、虫での奇襲を浴びせたらまず勝てる。影真似でデブの動きさえ固定すればまず負けることもないだろう。

よって懸念事項はいきなり状態2になって力尽くで突破されることだ。少々の被害を無視して強引に迫られると、シカマルの様な策士タイプは手が打てなくて困ることに

なる。もっとも……その状況で仕切り直すために、『最優先の獲物であるサスケが居ない』という状況があるわけだ。

（あの短時間で良くここまで思いついたよ。やっぱシカマルはスゲーわ）

俺はどっちかというと転生したサスケのスペック頼みといっても良い。原作に無い能力を鍛えはしているが、本物のサスケも同じくらいの事は出来るはずだ。その意味で知略を武器に影真似は脚色とすら言えるシカマルは、ある意味で俺が目指すべき場所なのかもしれない。忍の中の忍と言える卑劣様の思考や技術に至っては、足元すら及んでいないだろう。

木の葉の地形はカブトが知っているとはいえ……、人や傀儡を抱えて移動している分だけサソリたちは歩みが遅い。もちろん火の国の外に抜けるだけなら間に合わない可能性はあった。だが奴らはここで儀式をするつもりで準備を整えていたのが逆に幸いしたのだ。

具体的に言うと時間稼ぎをする為に、四方に札を張って同時に剥がさねば入れないタイプの結界を仕掛けている所だった。間に合った事にホッとする分、ここまで来て四人目の音忍お出逢ってな事に嫌な予感を覚える。

「……おや？　もう追いついてきたんですか？　それも単独で。これは想定外ですね」

「そうか？　どっちかと言えば『飛んで火に居る夏の虫ですね』と言われるんじゃないかと思ってたんだが」

カブトの表情に焦った様子はない。むしろこのくらいでなければ計画に支障が出るとでも言わんばかりの表情だ。その策士ぶりに原作で見た幾つかの構図が思い出された。

そういえばこいつダブルスパイで大蛇丸の部下だが、サソリのダブルスパイであるように装っている。とかいう面倒くさいポジションだったような気がする。となれば単純に協力しているのではなく、サソリの戦力を削る為に頑張って欲しいという所か？

「しかし四人衆は役立たずですね。もう少し時間稼ぎをしてくれるものだと思いましたが。どうしたものか……」

「知ってるか？　時間稼ぎすれば……なんて後ろ向きな策は大抵失敗するんだ。やるなら叩いて倒す気じゃねえとな。さっさと大蛇丸なりサソリに泣きついたらどうだ？」

俺の視点でどっちの部下か判るはずもないので、話の筋を見つけるために誘導してやる。もしカブトがその気なら、何らかのアクションを見せるはずだ。

それに対してカブトは兵糧丸を口に含み、四肢を縮めて姿勢を低くした。

「そうしても良いんですが、何もしないで逃げ帰るとサソリ様に殺されてしまいますからね」

「へえ……。お前は大蛇丸の部下かと思ってた……よ！」

写輪眼をＯＮにしながら接近戦から遠ざかることにした。カブトは手の先に長い爪を造って戦っていたが、実際にはメスでの暗殺向きの筈だ。もちろん原作知識との差でこいつのタイプが完全に違う可能性もあるが……医療忍者の息子ってのは変わってなかった。タイミングや考え方が多少違うだけで、やることは殆ど同じだと思う。

そのまま距離を空けたのでは嘘くさいので、足にチャクラを溜めて反発作用で飛びのきながら、一気にナルト達が捕まっていると思わしき場所に走った。するとカブトはフェイントも交えずに素直に追いかけて来る。

「どうしたんですか？　試合での貴方はもっと直情的だと思いましたが」

「言ってろよ。任務……いや忍としてやるべき忍務であれば、優先度は感情よりも上だって決まってんだろ。それともお前がイタチの事を教えてくれんのか!?」

距離的に土遁で隠れるのは不可能だろうが、普通の上忍どころかカカシ級のこいつなら他にも手段は色々あるだろう。影分身である可能性もあるが……あえてやられて退場する気ではないだろうか？　もし暁から抜けるつもりならば真の使い道が変化しているかはともかく、人柱力を渡さない方が良いのは確かだろう。

サソリの戦力を削るか貢献度を高めてイタチと組みたいから……という程度の狙いだと思われる。あくまで本命は三代目を倒して木の葉崩しをやってみたいのではない

かと思われた。
「少しくらいならば知ってますよ？　まあボクに勝てたら教えてあげても良いですが」
「あくまでお前程度が知ってる事だろ？　それじゃあ上層部に掛け合って聞けるほどじゃねえな！　火遁・鳳仙花！　連弾！」
二連射の火遁・鳳仙花を放ち、後から放つ方には手裏剣を合わせてアレンジの爪紅として放つ。ここからカブトの動きに対して手裏剣を増やして本命に見せた牽制を放つ。
カブトはさきほどまでの直線的な動きが嘘のように、軽快な動きでカーブを描いて回避。手裏剣影分身をしたとしても追いきれないほどの冴えを見せる。無駄使いするのも惜しいので影分身は中断。代わりに足にチャクラを回して適度な距離を空けた。
（おかしいな。原作の動きだともっと突っ込んで、その身と引き替えにするくらいの……。いや、ソレはこの後に使う気なのか）
曖昧に成ってウロ覚えの原作知識でもこいつの再生力が強力なことくらいは覚えている。何度もやられては出て来るからだが、それにしては今のは細心の動き過ぎた。やはり普通に戦って見せた後で適当にやられて、御自慢の再生力で『実は死んでなかったフリ』をする気なのではないだろうか？
（ああ、そうか。こいつ……俺の眼が万華鏡ってのを伝心か何かで知ったってのもあるかもな。天照とは言わねえでも、流石に直撃したらヤバイくらいは判るか）

俺は細心の動きで回避して見せたことに、あえて笑って見せた。こいつが適当に退場する気なら……こっちの上限を見誤らせた方が良いだろう。コイツとしても戦っている姿や切り札を見せて、貢献している様に見せたいだろうしな。

「時間がねえ。てめえ程度に使うのは惜しいが……。見せてやるよ！　これが俺の切り札。炎の形状変化に特化した加具土命だ！」

「それが！　うちは一族に伝わるという！」

風魔手裏剣を取り出しその周囲に炎を灯す。その一部に炎の糸を付け、威力を向上させると同時に三の太刀に使う為の制御用に変える。

「うちは流。写輪眼・手裏剣操風車。その加具土命バージョンだ！　死にな！」

「流石はうちは！　ですが見させてもらいましたよ！」

風魔手裏剣は勢いよく飛んで、その途中で不規則な軌道に変わる。これはまとわせた炎の勢いで巻き込んだ気流ごと変化する為だ。加具土命によって形状も途中で帰られるので、軌道操作そのものが行い易い。

そして途中で一度上に軌道を変えて、即座に降り注ぐ動きに変える。そこで手裏剣影分身を行使しして、無数の炎の弾丸を降らせることにした。

「天より墜ちよ！　炎遁・火狐雪崩」

「こっこれは!?　どこにも逃げ場がない!?」

名前を付けるならば炎遁・天津甕星とでも言うべきか？　とはいえ既に原作にありそうな名前だったので適当な名前を付けておいた。どこかの地方でオーロラを火狐と言ったのと、雪崩のように降り注ぐという程度でしかない。もし原作に無いなら天津甕星の方が好きな名前だしな。

「流石は……うちは」

「……天の意思は避け切れまい？　土遁で逃げれるような速度じゃねえよ。まあ生きてるならジっとしてるんだな。サソリが勝てば治療してもらえるかもだぜ」

普通ならばトドメの必要ないダメージの筈だ。慌てて地に潜っても間に合わない速度で放っている。最初から影分子ならば別として、『普通』ならばこれで死亡するはずなのだ。

そして生き残れるならば『普通』ならばここで立ち上がって挑んで来るだろう。そうして来ないという事は、やはり見逃してサソリを倒させるつもりだと思われた。

「じゃあな」

俺を見逃したカブトの策略に免じて、俺の方もあえてカブトを見逃して移動する。サソリ相手にこれ以上の消耗はしたくないしな。

サスケの忍伝

カブトを倒したことに自分でも意外なほど高揚していた。

それは原作でカカシが出来なかった事をやったからではない。結果的に奴が治癒可能なら倒して無いのは同じだからだ。ただ……あそこで原作など関係なく倒そうと思い、その決断のままに行動しきった事に満足している。

（原作を知る効率だとか、そのために齟齬を知りたいとか言い訳を付けて……。自分の決断で自分の人生を生きてなかったんだな）

サスケが原作で格上に挑んでボロボロになりながらも生き残り、時に機先を制しているのは良くも悪くも目的のために生きているからだ。その為に全力で行動し、全身全霊で生きている。

それに対して俺は再不斬や白（ハク）に先手を取られていた。二つのカグツチという切り札は同じなのに白との戦いでは先手を取られ、さっきのカブト戦では俺が先手を取った。状況に合わせて待ちの態勢だったから先手を取られ、自分の目的のために先手を取ったから先に動けただけだ。

『なんだ。楽しそうだな』

「戻ったのか。……俺は俺のするべきことを見つけたんだ。ようやくな」
　大蛇丸と三代目の戦闘が終わったのか、それとも柱間を一度で良いから斬れと言った任務を達成したのか。再不斬が俺の元に戻って来た。退散せずに報告に来るとは律義な奴だ。
『そいつは幸いなことだ。思い返せばオレにはそんな物はなかったのかもしれん。精々、大切にするんだな』
「そうさせてもらうさ。サスケ忍伝ってのがあるなら此処から始まるに違いねえ」
　再不斬は水影暗殺をしようとして失敗したそうだが……。詳しい事は聞いていないんだよな。確かマダラが先代水影に何かしたくらいは覚えているが、そいつをどうにかしようとしたのか、それとも単純に下克上がしたかったのか？
　いずれにせよ目的を見失ったこいつが俺の元に来て、代わりに俺が自分の目的を見つけたってのは皮肉ではある。
「今から敵中に飛び込むがお前の炎霧で周囲を覆ってくれ。その後に適当なところで捕まってるナルト達の救助を頼む」
『……チャクラを回せ。あの化け物めオレを子供扱いしやがって』
　炎の体であるはずなのにかなり手酷いやられ方をしたようだ。再不斬たちは霊ごと取り込んだので、術として登録した火遁分身たちと違い呼び出し直しても元の状態にな

るわけではない。火遁分身よりもはるかに強いし自立行動可能なのは凄いのだが、思わぬところに穴があったもんだ。

とはいえ穢土転生みたいな自動回復があるわけでもなし、再不斬の力は今直ぐ必要なのでチャクラを回して回復しておいた。

『……誰か来たな』

「っと。このタイミングでテマリか……さて、どうすっかな……」

ナルトを救出し次第に大火力で殲滅したい。その目的は変わっていないが手段としてもう少し別の方法を選びたくなったのだ。

『好きにしろ。ただ後悔はするな』

「……判ったよ。思いっきり行った方が人生楽しいしな」

白との出逢い以外は後悔してそうな再不斬ゆえに説得力がある気もする。問題はどう説得するかなのだが……。

ここは思いっきり正面からぶち当たってみる事にした。よく考えなくともさっきまでの俺は原作知識を念頭に、チラチラと効率良い事を狙ってたしな。テマリが信用できないと思うのも判る気がする。ならばここはある程度の情報を渡して説得した方が良いと思えてきた。

「こっちはカブトを倒したが、そっちも一応は無事な様だな」

「ああ。情報通り奇妙な術を使う奴だったが……最後はバケモノになったぞ。奴の切り札だろうから言っても仕方のない事だが……」

状態2まで接戦で戦えば危険な相手だったのかもしれないが、用意しておいた罠を使ったり相打ち前提で一足先に防御を固めればテマリの方が有利だったはずだ。見た所は傷も少ないようだしおそらくは風遁をバリアのようにして矢を躱したのだと思われた。

「そいつはすまなかった。そういえばカブトと戦っている時に気が付いたんだが、あいつここでも誰かの為に情報収集しながら戦ってたんだよな。もしかして腕利きの傀儡師は数機の傀儡をいっぺんに使えるのか？　だとしたら少し厄介だが」

「あ、ああ。……確かに砂で一番の傀儡師であるチヨ婆さまは十機まで行けるはずだ」

まずは状態2を暴けなかったことについて素直に謝る。その上で話し易いようにカブトの言動から気が付いたという触れ込みで、原作の事を交えて少しだけ予測してみた。試合でもカンクロウが傀儡の籠手を扱ってたし、俺が推測するのも変じゃない筈だ。

その上でサソリが一人でありながら複数の動きを取れるという前提で話を本格化する。

「ならサソリも同じことができるとして、一番困るのは人質で脅されることだ。奴らか

ら見れば尾獣を奪って殺す相手だが、俺たちにとっては大切な仲間であり家族だからな。だからあんたには援護よりも救出を頼みたい」

「む……。言いたいことは判るが……それで勝てるのか？」

疑いたくなるのも当然だろう。事前の話し合いではテマリが傀儡の動作を教えて、俺の火遁とテマリの風遁でゴリ押しする予定だったのだ。それがテマリを戦力に数えないのであれば不安に成っても仕方はない。

だが先ほどよりもテマリは俺の言葉を素直に聞いていた。それはテマリーがガーラを救いたいという思いと、俺がナルトを救いたいという思いは同じだからだ。その上で俺が囮になり、テマリを信じて二人を任せるという手順なのだからどちらの負担が大きいかは一目瞭然だ。

「言ったろ。これは大切な物を守る戦いだってな。なら出し惜しみ話だ。俺が普段使わないでいる、うちは切り札を全部使う。期待してくれていいぞ幻術はオマケでしかなかったってな」

「……本当なんだな？　判った。だが最後のは余計だ」

少しだけ悩んだようだが最後には納得したようで、苦笑気味に裏拳でツッコミを入れてきた。俺がリスクのある切り札を全部使ってまで二人を助けると言ったことに、テマリもわだかまりを解いたのだろう。

「それはそれとして作戦を聞かせろ。無謀なら止めるからな」
「そりゃ当然だな。まずは霧で視界を塞ぐ。コイツは戴教の教主が一人、斬天君。炎の霧を操る術と体術であんたを守るはずだ」
『……』
　作戦としては大筋で変わったりはしない。大火力に何を使うかが変化するだけだ。再不斬を紹介しながら順序立てて説明する。
「炎の霧をあんたの風遁で高速展開する。四方の視界をかなり悪くした上で一部は完全に塞ぐ。コイツの案内があれば確実に辿り着けるだろう。後は二人を担いで脱出するだけ。あんたが術を使うとしたら護衛が居るか、サソリが自棄になって撃ちまくる範囲攻撃を反らす時だけの予定になる」
「なるほど傀儡の視界そのものを封じれば多角的な攻撃も防げるという事か。判った」
　テマリは状況が定まっているとかなり思考速度が早い。おそらくはシカマルのような柔軟な思考に欠けているだけで、頭のキレそのものがかなり高いのだ。
　テマリが口にした通り作戦の基本コンセプトは視界を封じて傀儡を封じる事だ。炎の霧だから僅かずつでもダメージが入れば、罠が仕掛けてられていても誤作動するだろうしな。
「とはいえその条件で確定するのは二人の確保だけだぞ。お前は？　……いや、お前が

倒されると直ぐに追いかけられてしまうからな」
「心配してくれるのか？　そりゃありがたいが問題ねーよ。普段は避けている切り札を使うって言ったろ」
　炎は防御には向かないものの、二つのカグツチを使えば弾幕を張れるからある程度の攻撃は防げる。普通の火遁よりも火力と範囲の両方が高くなるし、炎の霧の動き自体を変化させられるからかなり安全性も高くなると言えるだろう。
　そして今回に限っては修行ですら出したくない『本当の切り札』を出しても良い状況だと思っている。というか効率よく戦う為なんかにゃ使いたくねえが、ナルト達の命が掛かってるなら最初から使う事を前提にしても良かったくらいだ。
「そこまで言うなら信用しよう。任せたぞ」
「ああ。二人を頼む」
　俺たちは拳を打ち合わせて健闘を祈り合った。そして二人を確保しているらしき場所まで辿り着くと、判れて術の準備を始める事になった。

　原作と違って洞窟ではなく谷間に結界を幾重にも張ろうとしたらしい。視線を遮る結界を張り谷の構造で音自体も遮る。その周囲にカブトが札を剥がさないと接近できなくする様にするつもりだったようだ。

洞窟ほど狭い場所じゃないが谷風は拭かない時間帯だし、粘着性も持たせた霧だから問題ない。再不斬が放つ炎の霧をテマリが風遁で押し流すと、谷間中に赤い霧が満ち始める。

「流石に作業を続行する程間抜けでもねえか」

「これほど派手にしておいて警戒するのは当然だろう。馬鹿にしてやがるのか？」

砂漠の人間はクールかつホットだ。普段は冷徹なのに妙なところで熱くなる。砂漠の砂が昼間ならば熱く夜ならば冷たくなるようなモノだろうか？

ここで見たサソリの外見は術の影響か本体に近かった。カンクロウが造っていた籠手をもう少し洗練させて翼の様に背後を守り、やはり攻防一体の端末として尻尾を垂らしている。あえて言うなら原作で最初に見たガワと中身を足したような感じだろう。もしかしたらこれから数年の間に開発するのか、あるいはすでに作っていてその余剰パーツを呼んでいるのかもかもしれない。

「そうでもないさ。此処にはイタチが居る可能性もあったからな。その為に写輪眼対策をしていただけだ。傀儡軍団が居るなら一緒に爆破してやろうかと思ったが」

「……オレはイタチのついでか？　何時までも兄貴離れのできねえガキが」

イタチへの警戒を先にしたからか、それとも御自慢の傀儡を一蹴できると言ったからかサソリは相当にお冠の様だ。眼に見えて激高してはいないもののトサカに来ている

のかもしれない。
　それはそれとしてサソリに増援は居ないのだろうか？　生贄に加えて相当なチャクラを与えなければならないとはいえ、離れた場所に送り込めるならばかなり有用な術だと思う。左目の焦点はサソリから話さないように心がけて周辺を伺ってみるが特に誰か隠れているには思えない。
「誰も居やしねえよ。人間は……な」
「だと嬉しいんだがな。ありがたいような拍子抜けするような……」
　サソリは霧を抜けて俺の正面から睨んで来るが少し奇妙ではある。サソリから見れば複数の傀儡を潜ませて、全体で俺を見れば済む話だ。炎の霧でダメージが行くとか、邪魔者への怒りがあるにしてもあえて位置をズラす必要はない。
　だが『別の事情』があり、その影響もあってこちらを警戒しているとしたらどうだろうか？　より正確にはその事情を達成するまで、『万華鏡写輪眼による瞬殺』を警戒しているとしたら……という話だ。こちらとしてもその為にという訳ではないが瞬間火力を上げるために、性質を変化させる方の左目でサソリの全体像を見ていたので間違った対応ではない。
「気にくわねえな。やはりオレ舐めて居るようだ。それも相当に……」
「いや？　最大級の警戒はして『いた』ぜ。あんたが完全な状態の赤砂のサソリだった

ら、暁でも上から数えた方が早いくらいの強者だろうからな。下忍にゃちとキツ過ぎる相手だ」

過去形でサソリの脅威度を評したことで奴の体はピクリと動いたような気がする。やはり本物の体ではなく、憑依体（？）では忍耐力も含めた再現度が低いのだろう。あるいはチャクラと魂に影響されているというべきか。

「てめえにオレの何が判る？」

「忍は動き一つで情報を晒してしまうと言うが……。国を一人で落とすと言われた、あの赤砂のサソリが俺の視線を外そうとしている？　とんだ冗談もあったもんだ。あんた、その体は影分身なり傀儡で造った偽者か何かなんだろ？　だから俺の瞳力を気にしているんだ」

奴は俺を警戒しているんじゃなく俺の眼が持つ瞳力を警戒している。特に天照のような火力系の瞳力であることを警戒しているってわけだ。そう考えれば奴の奇妙な動きにも納得ができる。

憑依体は影分身ほどじゃないが本体よりも耐久力が低く、もちろん倒されれば存在を留める術が解けてしまう。別に事情が何かは確定できないが、少なくとも俺を倒した後に儀式を続ける気ならば、継続する為に奴の憑依体は此処に居なければならないのだ。たかが下忍に本気になるのは馬鹿馬鹿しいが、かといって一瞬で燃やされては困るのだ

ろう。

「この事から導き出される結論は二つ。一つ目はイタチから万華鏡写輪眼が存在するって情報だけしか聞いていないってことだ。うちはが持つ表の切り札でしかねえのにな」

「貴様……」

ここで煽るとサソリは怒りと冷静さの両方を見せる。やはりクールかつホットだ。どんなに腹が立っても頭だけは冷静に保つのが忍びってもんだよなあ！

万華鏡写輪眼はうちはの一つ切り札だが、あくまで表の存在だ。…イタチくらいに熟達すれば万華鏡状態になった事での幻術強化だけでかなり強くなるのとはいえ、…それは所詮見せ札に過ぎない。使えば使う程に失明へ近づく特殊な瞳術。それを含めて表向きの力に過ぎない。本当の切り札は準備するだけなのに既に体が痛み始めるほどのヤバさだ。

「見せてもらおうか。その切り札ってのをな！」

「見せてやるよ！　うちはの真髄をな！」

炎の霧で徐々に周囲が燃えている事もあり、サソリはこのタイミングで仕掛けてきた。こちらは万華鏡以上の切り札があるとしても、これ以上の引き延ばしは問題だ。それに時間を置けば傀儡だって燃えてしまうだろうし、こちらの増援が到着する可能性もある。

実際にはこちらの増援は既に行動を開始しているはずだ。というか上手く行っているならばそろそろ連絡があってもおかしくはない。

（再不斬からの合図がねえ。それに霧が徐々に遠ざかってやがる。ここから推測できることはまだナルト達を確保できてない上に、無音戦闘の達人である再不斬ですら確保できないほどの相手がナルト達を抱えてやがる）

援軍が期待できない以上、ここで俺がサソリを倒すしかない。サソリとしては怒ってはいても俺なんか端から相手にはする気なかったのだろう。あくまで任務のために時間稼ぎをしているに過ぎない。うちはの力を見るなんて暇潰しでしかないのだろう。

しかしこのことが幾つかの予想を俺に立てさせた。サソリは俺ともども増援を足止めしつつ、『誰か』に色々させているという訳だ。

「さっきの続き。二つ目の情報。……それはてめえがカブトから情報を得てるって事だ。あんたは傀儡を操るのと同じ技術で奴から情報を得たな？　まずはもう片方の眼の力を見せてやろう！」

「良く回る舌だ。忍が口で語るんじゃねえ」

もっともなのでここからは眼で語ることにする。炎の霧が持つ熱量を上昇させ、気流を吹かせる事で毒霧を無効化。特に近辺の霧はちょっとしたワイヤーくらい燃やせるようにしておく。

まずは場を整える事で戦うだけでも優勢にできるようにしておく。相手は焦らせ自分はクールに、時間すらも味方につけるように誘導していく。それくらいでなければ遥かに格上のサソリには敵うまい。同時にこの状態でもサソリが焦らないのであれば、確実にナニカを実行していることになる。

「火遁・鳳仙花爪紅。そして手裏剣影分身……さっきのノリで行くなら火狐雪崩だ！」

「ちっ！　イタチみてえなことを」

鳳仙花に手裏剣を混ぜるアレンジの爪紅。それをただ放つだけではなく上に向けて放った後、手裏剣術で角度を変えて落ちてくるように調整。そこから手裏剣影分身で高速で降り注がせる。もちろん炎の性質を変化させて威力を上げてあるので当たればただでは済まない。

ただしサソリに直接降り注がせるだけではなく、霧の中も含めて拡散する様に放っておいた。奴は単独に見えて隠している傀儡を何時でも操れるからだ。

「……うっとおしい炎だ。まとわりつく上に延焼ってレベルじゃねえぞ。隠しておいた傀儡が何体か燃えちまったじゃねえか。その目、形状を変えるだけじゃねえな？　火を操って上限突破してやがるのか、それとも熱量自体を操ってるのかは知らねえが」

「じゃなければ使うかよ。ただの火遁を必殺の炎遁に変える。それがもう一つの万華鏡写輪眼だ」

天照の炎は視点を元にした遠距離着火だが延焼し難い。逆にこちらは手元を起点にする代わりに延焼し易さなども自由自在に変化させられる。眼の負担も天照に比べれな相当軽いので、持久戦型の万華鏡写輪眼だと言えるだろう。もちろん天照みたいな即効性はないので、今みたいに炎の霧で誤魔化す必要があるのだが。

こちらの攻撃に対してサソリは回避しながらカンクロウから奪った傀儡で攻撃しつつ、本人の言動通り隠していた傀儡で攻撃して来る。俺の眼はチャクラだけではなく炎の状態も見切るので、熱変化の揺らぎで不意打ちを察知できる。いわばこの炎の霧は相手にとっては視覚遮断と罠であり、俺にとっては援護用の結界みたいなもんだ。

「戴教の教主たちが使う十絶陣は五つの性質変化に陰陽を加え、己の都合の良い結界を作り上げるとか。今の術はその真似事って所だな。……だがうちはの真髄はこんなもんじゃねえぞ」

「舌で語るなと言った！」

サソリの言葉は荒いが仕事は丁寧だ。籠手とも翼ともつかぬパーツはこちらの攻撃を防ぎ、同時に爪を飛ばしてくる。尻尾もまた同様にガードに利用しつつ鋭い突きを放ち、跳ねることでサソリを高速移動させることができる。それらの動きに一切の無駄がないどころか……同時並行で周囲からワイヤーや千本が飛んでくる。サソリを巻き込むこともあれば、逆に嵐のような攻撃でも自身を巻き込まない時がある。コレクション

の百機とまともにやりあえば、今の俺では勝てなかったかもしれない。
　そして、そんなサソリだからこそ判ることがある。やはり今の戦闘は文字通りの児戯であり、『本命の罠』を待つまで子供の様子を見ながら行う暇潰しなのだ。ゆえに本気で戦ってないし、百機を使ってないのも隠している別件……本命の罠にコレクションが巻き込まれることを恐れているに過ぎないのだろう。
「むしろ舌で語ってたら都合が悪いんじゃねーのか？　写輪眼に対してベラベラしゃべって居たら何もかもバレちまうもんな！」
「っ！　貴様にオレの何が判る」
　怒ったと錯覚させる為か、それとも誘導から目をそらそうとしたのかこれまでにない密度の攻撃がやって来る。明らかに複数体の傀儡が攻撃に加わり、白兵戦を交えて射撃が飛んでくる。
「はっ！　数を増やしやがったか。だが……」
　この攻撃には俺も参ったので、仕方なく準備しているこちらの本命を使わざるを得なかった。透明な装甲を露出させるだけで体中の細胞が軋むような気がする。徐々に準備するだけで体が痛むのに、急に動かしたために攻撃が直撃したのではないかと思う程の激痛が体を走り抜けた。
「っ!?　何がが弾いた？　そいつがお前の本命か！」

「そうさ。まあ外見はともかく造形美や機能美だけならあんたの傀儡の方が上かもな。その絡繰りに関しちゃ正直脱帽するぜ。伝え聞いた人傀儡なんかよりよほどスゲーと感心する」

「ちっ！　砂の奴らか……余計な事を」

俺が用意する本命に気が付かれるのは当然なので、今度はこちらが気を散らすために声をかけた。もっとも絡繰りに対して感心してるのは本当の事だ。

傀儡は人間である必要が無く、人間を模したとしても同じような関節である必要はない。人の形をしているから違和感が無いから騙され易く、それでいて人間以上の動きをして見せるのだ。これに感心せずして何を感心しよう。

炎の霧が徐々に薄れていく。一つは術者である再不斬が離れていく事であり、もう一つは俺が利用しているためである。火力を上げるために圧縮しているせいで量が減っているのだろう。

既に残るは防壁を兼ねた遮断幕として利用している俺の近辺のみ。そろそろ決着の時だ。

「他所の里の話だ、なんでもは知らねえ。だがこれだけはハッキリと判る。人傀儡なんざ技術の一つだ。穢土転生でも構わねえくらいだしな。それに対して絡繰りの方は本

当に凄い。もし技術の進歩が遅れたとしたら、あんたが人傀儡なんぞにハマっていたせいだ」
「黙れ!!」
今度こそサソリは怒りに震える。正真正銘に自身の奥底から湧き上がる怒りであり、もし憑依ならば写し取った魂に生贄が動かされてしまったのだろう。そう思えるほどに奴のチャクラはかつてない程に荒らぶっていた。
「火を使うのはてめえだけの特権じゃねえぞ。赤秘技を見せてやろう」
「ならこちらもランクを上げるだけさ。火遁・龍炎放歌の術!」
その証拠にこちらが炎を操れると知って居るはずなのに、油と火炎で炎遁並みの火炎放射を仕掛けてきた。もちろんソレは俺に二つのカグツチを使わせる囮であり、その隙をついて窮地に陥れる為の前振りなのだろうが。
俺はあえてその挑戦に乗り、二つのカグツチを利用しないとまだ使えない術を強引に行使する。この状態ならば火遁に限り火影を越えて俺の適正はマダラ並だ。火炎で火炎を圧倒することができる。
「何度でも言うぜ。もしあんたが人傀儡の技術も使用して、新たな世代の傀儡を造って居たら……今頃はコイツを越えていたかもな」
「なんだ……それは。鋼の鬼……だと?」

俺は透明な外骨格に覆われることでサソリの攻撃をことごとく弾いた。先ほど使った肋骨や背骨で要所を守るだけではなく、外装も一部出現させて全身を守ったのだ。

現われたのは白無垢のような装甲をまとった鬼嫁。あるいは女の鬼が炎の大剣を逆手に構えた姿である。痛みに耐えて準備してなお、外骨格までしか出せないが全周攻撃すら防ぎきることができた。

「須佐能乎。これがうちは一族の切り札だ。異界に本体を置く最強鬼神ってとこか。機械なのか生命体なのかしらねえが、どっちも作れるあんたにとっちゃあまり差はねえだろう」

「なんだソレは!?」

豪刀一閃！　逆手に構えた炎の大剣が一閃する。ただそれだけで足場を切り崩し、周囲の傀儡は解け墜ちた。

だが自分だけは耐火術を持った人傀儡に防御用の術を使わせていたのだろう。一瞬だけサソリの体が耐えきったので、逃がさないに幻術で奴の関心を奪い去る。傀儡である奴に幻術は有効ではない。イタチくらい巧ければともかく、俺に出来るのはサソリが感心を持つ情報を与えることで一瞬だけ気を反らすだけだ。

用意するのは鬼神ではなく機械たる機神の姿。腕は二重関節で足は鳥足構造……磁遁で軽減した摩擦で雷遁による活性化した砲弾を撃ち込み、火遁と風遁を内蔵した柄は

あらゆるものを焼き尽くする炎遁の剣となる。俺が理想とする須佐能乎は、生前に見た漫画を参考にしている。サソリが知らない世界の知識を叩きつけることで、傀儡師でもある奴の関心を奪い去ったのだ。

「下忍程度にオレが負けるだと!?　認めんぞ!」

「違うな。繰り返して言うぜ……サソリ!　あんたの敗因は俺じゃねえ。あんた自身が技術の進歩を止めた事だ!」

　思うに忍には世代ごとに為すべき業というものがある。サソリは四代目火影がそうであるように、無数に増えた技術の中から一芸特化で自らが求めるモノを極める世代なのだ。

　サソリと大蛇丸は目的のためにむしろ逆走していると言えた。そういう意味ではこの二人のコンビは似ている。デイダラとのコンビが芸術家コンビだとするならば、永遠を……正確には失われた両親との絆を求めるコンビとでも言おうか。

「まあ……。もっと凄い物を見たかったって言う俺の感想と言うか干渉だがな。どうせここは水没するんだろ?　また逢おうぜ」

「チっ……。それも見抜いていやがったのか……。しかしさっきのは面白かったな……

そこだけは認めてやる」

妙に清々した顔でサソリは術と共に姿の『像』が解けて消えて行った。後に残るのは裏切者の見知らぬ誰かだ。ミズキ当たりだったら笑えるんだがと思っていたが、完全に知らぬ顔だったので笑うしかない。

そして痕跡を隠すために行われるであろう、大瀑布の術か何かを避けるために上を目指す。この世界にはゼツが居ないこともあり、峡谷で行われた儀式や憑依体を処分するには何かの方法が必要だ。場所的にもその為には水が一番自然だろうが……。

ここで水に巻き込まれたらそれこそ死が見える。須佐能乎を使った激痛に耐えながら必死に峡谷の上を目指した。

新しい道筋

峡谷での戦いを終えた俺は上へ上へと移動していく。須佐能乎を使った反動で体が痛むがそんなことは言っていられない。証拠隠滅にこの一帯が消失する可能性が高い。

先ほどの戦いは下忍に過ぎない俺がサソリに勝ったというよりは、暁の側が撤収準備をしていただけという方がありえる話だ。ゆえに俺は脱出を試みる為に峡谷の上を目指した。

「干柿鬼鮫だっけか？　奴が加入してるとしたらかなり説明が付くんだよな」

鬼鮫が加入しているなら水遁が一番簡単に違いない。鉄砲水は自然でも良く起きる現象だし、なんなら雨を呼べばさらに違和感は消えて行く。再不斬の使った炎の霧で上昇気流が発生しているから、もしかしたら本当に雨が降るかもしれない。

「それにしても体が痛みやがる。須佐能乎を呼んだ影響だろうが……」

転生した直後は自分には須佐能乎が使えないのではないかと思った。両目とも加具土命であり、特性と違うが同じ炎遁系の瞳術だからだ。

しかしよく考えてみれば原作ラスト付近のカカシ先生も両目が神威なのに須佐能乎を呼んでいる。特殊なチャクラなり能力強化の援護忍術でもあれば、両目が同じ瞳術で

も使えるのだろう。イタチの『両目が異なる万華鏡の持ち主に宿る』という言葉がミスリードで、特性があまりにも違う瞳術持ち主は適正が高いから勘違いしたのかもしれない。

「呼ぶための理屈は判るんだ。だがどうして体が痛むんだ？　いや……こんな事を考えている余裕なんざない……早く脱出しないと」

イタチの死因は須佐能乎の呼び過ぎと言われるくらいに、強烈な負担が掛かる。俺の場合は特殊な炎を予め展開し、それを取り込みながら呼び出したと言うのに凄まじい負荷だ。もしかしたら特殊なチャクラもまた呼び易くなるだけで、永遠の万華鏡写輪眼以外に痛みを軽減する方法はないのかもしれない。

ともあれこんな考察は今するべきじゃない。今は自分が無事に脱出して、再不斬やテマリと合流しながらナルト達を助けに行くべきなのだ。

「くそっ。意識が……遠くなる。こんな所で……。チャクラは可能な限り補充したのに……」

当たり前だが兵糧丸で何とかするにも限りはある。傷を塞ぎはしないし、傷を治療しようにも須佐能乎を呼び出した痛みなど手当てできるはずもない。専門の医療忍者ならば体力を回復できるのかもしれないが、そんな物を俺が覚えているはずも無かった。

そしてチャクラを練るために失った体力・精神力までは補充してはくれない。気付け

薬を嗅ぎはしたが徹夜続きでは限界が来るように、少しずつ限界が見え始めていた。
「やっと上まで……。どこかで……少しだけ休むか？　いや、ナルトを……探さないと……」
意識が遠くなる。失明を恐れて瞳術の使用を控えていたこともあり、万華鏡を使い慣れていない。徹夜とも違う疲労感に徐々に意識が遠のいていった。
『お前はよくやったよ。今は休め』
ふと、誰かのそんな声が聞こえたような気がした。

跳び起きながら目を覚ますと下忍仲間の全員が揃っていた。班長を務める上忍が数名おり、その傍らにサクラとカンクロウが居るのでそれなりに推測は出来る。
だが眠ってしまってその後の状況が不明な事から、俺は芸も無くカカシやサクラたちに問うしかなかった。
「ナルトは⁉　みんな無事なのか？」
「無事だから落ち着け。砂とは一時的に休戦ってことになった。オレらが救援に駆けつけてこれたのはその影響だよ」
よくよく考えてみれば、カンクロウの言葉で砂が停戦に向かえば戦力比が一変する。砂の上忍全員が納得しなくとも、前からおかしいと思っていた者や穏健派が動けばかな

り変わって来る。原作ではアスマだけだったが、カカシたちが援軍として駆けつけれたのだろう。
「そうか……なら良かった。シカマルたちの方はどうだったんだ？」
「あー。作戦は上手く行ったんだけどな。連中の無茶を少しばかり読み違えちまった。まさか味方を平然と捨て駒にするたなあ」
「首が二つある奴が曲者だった。何故ならばあいつは寄生型だという訳だ」
ナルトとガーラが最優先として主力はまあ勝てたのだろう。だが気になるのが別方向に行ってしまったシカマルたちだ。作戦の都合とはいえ、音の連中を連れて明後日の方向に移動分だけ援軍の到着が遅れただろう。
ひとまずこの段階で判るのは寄生型……双子の兄弟（？）がキーに成っていたということくらいか？
「順を追って説明するぞ？　あいつらは特殊なチャクラを使うって言ってたな？　ソレを限界以上に上げるとリスクと引き替えに化け物じみたレベルになる。そうするとあの野郎は他人に寄生できるんだが、お前が言っていた四人目に寄生してチャクラと体力を補ってたんだよ」
「四人目って俺が倒したと思ってた女か？　すまねえ。倒しきれてなかったんだな」
「気にすることはない。何故ならば予測など不可能だからだ」

いや、まあ原作でもそこまでの事はやってなかった気がする。双子の片方がキバに寄生したのは覚えているが、双子揃って……しかもこの様子だと移動中も寄生していたことになる。あるいは単純に封印の巻物でも使っていたのかもしれないが。

「最終的に白眼を恐れてヒナタを付けねらったお陰で、ヒナタが自爆気味に柔拳を身にまとって何とかなったって訳」

「なるほど。予測さえすればヒナタなら何とかなるしな。それで今も治療を受けてるのか」

寄生能力を持っているならば白眼と柔拳のコンボは天敵だ。狙い澄ませて襲い掛かった所で、まさか自爆攻撃をやられるとは思っても見なかったのだろう。あるいは俺を捕まえるのが不可能だと諦めて、ヒナタを代用に差し出して大蛇丸に勘弁してもらえるか悩んだ結果かもしれない。

「後で埋め合わせでも……」

「それは御免こうむります。私たちは可能な限りの事前情報をもらった上で役割を分担したんです。自分でも上手くやれた決断だと思うくらいですから……。サスケくんが重荷に思うのはむしろ傲慢です」

「……判った」

話を聞いていたらしいヒナタに怒られてしまった。確かに何でもかんでも俺ができ

ると思うのは傲慢だ。原作知識を全て公開できれば寄生攻撃くらいは判ったかもしれないが、その後の対処などは無理だろう。そういう意味ではヒナタが言う通り、上手く対処した皆に対する侮辱でしかない。

「カカシ。この後はどうなる？　一休みして試験再開って訳にもいかないだろう？」

「その辺はお偉いさんたちが考えてるだろうけどさ。まあ中忍試験は中断でしょ。サスケとシカマルは三代目に呼び出されて事情を聴かれて、あとはヒナタが日向宗家に呼ばれるくらいじゃないかなあ」

当たり障りのない予想だが俺も異論はない。俺たちの意見も上忍たちの意見も交えて、複数の角度から検討したいという所だろう。ヒナタに関してはいささか事情が異なるので、『嫡子としては認められんがよくやった』とか『日向の家の者であれば当然』というような話でも聞かされるのだろう。

ひとまずそうなることを予想して俺は今回の情報を一足早く再確認していった。最初の違和感はトーナメントで見た砂の連中の選択や、本戦での奇妙な温存。その事をカカシに一言入れて、万が一に備えていた……という事になるだろうか？

しかし事態は意外な方向に転がる。最初は予想通りの流れだったのだが……。

「なるほどのう。カカシたちの話ともおおむね合致するか」

「齟齬もないし、そんな所だろう。後で検討することになるであろうが概ね似たような結論になるであろうよ」

「……他に何か言いたいことがあれば、申してみるが良い。何でも良いぞ」

御意見番が無難な言葉を告げる中、三代目……ヒルゼンは何気ない様子で再度の言葉を投げた。もう既に報告すべきことは述べたので、何かしらの意見があれば言ってみろと言う事だろう。

あるいはもっと別の意図があるのかもしれない。でなければ言い出す時に僅かでも逡巡などすまい。

「……今回は砂の連中と共同作戦を取りました。里同士の事に俺なんかが口出す事じゃないとは思うが……思いますが、少しは考慮していただけるとありがたいです」

少し迷った挙句、俺は砂の連中の話をしておいた。あいつらの力を借りることで口利きとするという話をしていたはずだ。まあサクラを介して停戦を呼び掛ける段階で果たした気もするが、俺の聞きたいことは聞けないと思うので御利口さんを演じておいた。

「ふむ。それで良いのか？　お主には聞きたいことがあると思うのじゃが」

「三代目も酔狂な事を」

「じゃが下忍が口出さんでも良い話ではある。むしろどうしてこの話にしたのかという

事を聞きたくはあるがの」
　だがそんな都合の良い事をお歴々が許すはずもない。俺が葛藤を押し込んで別の話を向けたことを突っ込んできた。
　おそらくは俺がうちは一族の事に関して尋ねたいはずだ！　という思い込みがあるのだろう。俺に原作知識があると知らねばそう考えるのは当然だろう。……既に原作と違う流れが多いので完全に興味ないと言えば嘘なんだが。
「正直な話、うちは一族がどうしてああいう結末になったかについて聞きたくはあるよ。だが俺にはあんたら上層部をどこまで信じれば良いか判らねえし、あんたらも正直に話す理由がねえ。お互いに信用も実績もねえしな。だからここで聞く意味はないと判断した」
「お互い様か……それは確かに耳が痛いの」
「しかし思ったよりも冷静じゃのう」
「……」
　里の為に動く、将来の木の葉を背負って立つ男に成れば自然と耳に入って来る。そんな感じのニュアンスで伝えられれば良かったのだが、どうにも汚い言葉ばかりが吐いて出た。
　だがこれが却って良かったのだろう。御意見番たちはそれで納得したようだ。しか

し奇妙なのはヒルゼンが悩み始めたことだ。
（もしかしたらヒルゼンだけは正直に話すつもりだったのか？　でもそれなら個別に呼び出せば済む話だが……）
　三代目の仕事は忙しいが、別に個人面談ができないわけではない。俺が暴走しないと判った時点で、適当なタイミングを計れば済む話だ。逡巡どころかどうして目に見えて悩むのかが全く分からない。
　だがその答えは、思わぬ男が持って来たのだ。思えばコイツが話を誘導するようにヒルゼンに伝えていたに違いない。
　バン！　と扉を開けて強引に入って来たのは……。
「あんたは!?　まさか……」
「だが話は聞いてもらわねば困る。いや、お前にはイタチの真実を知る必要があるのだ！」
「これっ。ダンゾウよ。此処で出てきては話がこじれるばかりであろうが」
　隣の部屋で様子を伺い、話をするつもりだったのはあの男。根の長であり『忍の闇』と呼ばれる志村ダンゾウだった……。
　ダンゾウと言えば原作に置いて悲劇を幾つも生産した元凶と言える男だ。どうしてここで出て来るのかまるで見当がつかなかったと言っても良い。

改めて確認するとダンゾウの姿は少し原作と違っていた。詳細に覚えていない部分も多いが、顔の半面を大き目の眼帯で覆い右手全体を包帯で覆っている。しかも眼帯には木の葉のマークを逆さまにした紋様が描かれており、包帯は白と黒を基調として呪術めいた文字が刻まれていた。

（ダンゾウってこんな外見だったっけ？　つーか少し格好良いな。原作は不気味な修験者って感じだったが……）

何というか中二病的にスタイルがまとまっている。原作のダンゾウは不自然さを隠すために顔に包帯で、腕は義手ではなかったろうか？　確かそんな気がすると思いながら少しだけ感心していた。

とはいえ今はそんな馬鹿な事を考えている暇はない。ダンゾウがどういうつもりなのか、その言葉を信じれるのか？　それ以前に万華鏡の力で洗脳されないようにしなければならない。

「お前にあの日の真実を伝えよう。さすればイタチに対する思いも、里に対する思いも変わるはずだ！」

「……信用できねえな。だがチャンスではある。だから俺はあんたらに取引を持ちかける」

「なに?」

俺は話をそらすために取引という形を提示した。これがダンゾウと一対一で話すのだとしたら何が起きるか判ったもんじゃない。それこそ万華鏡写輪眼の力で洗脳されるだけではなく、コッソリ潜ませた部下でも良いし、情報を知らぬ俺を騙すこともできるだろう。

だが取引であり、その真偽を図るために第三者が居るならば話は別だ。ダンゾウがあからさまな嘘を吐いていれば審議問題に成るし、他の者の様子である程度は測れる。何より部下を潜ませての不意打ちや、洗脳にも対処可能だろう。

「面白い。じゃが下忍に過ぎないお主の力など不要だが?」

「俺の力じゃねえよ。うちはに伝わる瞳術の知識やら歴史の一部だ。中には木の葉の役に立つモノもある。例えば……写輪眼を移植した者に有用な知識とかな。こう言えば俺が何を警戒しているか判るだろう?」

「右目? ……まさかカカシだけではなかったのか!」

どうやら御意見番たちは乗ってくれるようだ。ヒルゼンは反応しなかったので見守っているのか、それとも幼馴染であるダンゾウを信じているのだろうか? ともあれこの流れで嫌と言えるはずもないだろう。

「まず写輪眼は深い絶望を覚えることで、万華鏡写輪眼と言う特殊な瞳術を覚えるよう

になる。移植した者も同様にな。……ここまではメリットだ」

さすがに輪廻眼の事は話せないが、それ以外はまあ問題ないだろう。同時に話すことで他の三人を誘導することにした。まずは目下で立場の無い俺から情報を話すべきだし、二代目が調べているから情報を精査しても裏が取れるだけだ。俺が嘘を言っていないって判るだけだもんな。

「デメリットは瞳術を使うたびに失明しかけたり膨大なチャクラを使う。万華鏡同士を交換することで、うちはもそれ以外の移植者も負担が大幅に軽減する。おそらくは脳に必要以上に刻まれなくなるんだろう。そして……交換した者は馴染むまで瞳術が使えなくなる」

移植した相手に関しては俺の推測だ。原作では負担が軽減するとは言っていなかった。しかし一度奪われたカカシが再度手に入れた時、失われつつあった視力は元に戻っていたように見える。原作の最後の方はあやふやなので勘違いである可能性もあるが、万華鏡写輪眼と脳のシステムを考えれば、ありえる気はしている。

「どうする？　俺からは今のところこんなところだ。これ以上は互いの同意が必要だと思うが？」

「その前に一つ補足しろ。交換に応じた場合、万華鏡に宿った固有瞳術はどうなる？　それ次第だと言っておこう」

「ダンゾウ……お主、そこまで……」
　意外にもダンゾウは話を続ける気があるようだ。しかも万華鏡写輪眼の交換を行っても良いとすら言ってくるのでヒルゼンが驚くほどだ。もっとも俺を始末すれば奪い返せるし、もう片方の眼も利用できると思っているのかもしれないが。
「固有瞳術は脳内に刻まれる。術者の精神性に則った術を覚えるから、仮に移植してもそこは変わらない。例外は普通の忍が万華鏡写輪眼を受け取った時だけで、再移植しても失われないのは同じだよ」
「ならばよかろう。ワシが預かるシスイの瞳術を失わせる訳にはいかんからな」
「うちはシスイの力じゃと!?」
　これは原作でも起きていた事象だ。サスケの天照と加具土命は変わらず、カカシとオビトの神威もまた変わりはしなかった。
　しかしシスイの件まで話してしまうのか。これには本当に驚きだ。万華鏡の力までは知られていなくとも、シスイがそういう力を持っていたのは知られているだろうに。ここで話すことが大きなリスクに成るはずなのだが……。
「ダンゾウよ。そこまで言うとは意外じゃったが……本気なのか？　所詮は下忍、当時は子供であったのじゃぞ？」
「ふん。疑うならばカカシで試してみれば良かろうよ。無事に覚醒すれば里の力にな

る」
「それは確かにそうだが……」
　こいつ本当にダンゾウかよと疑いたくなるほどに堂々としていた。これならば嘘を言わないのではないかと一瞬思いかけた方だ。しかしあまりの変貌ぶりに驚いていたし、そう思う様に既に洗脳されているのではないかという疑いもある。それだけ原作のダンゾウはやらかしていたのだ。
「この志村ダンゾウ。世間では忍の闇などと言われておるが、むしろ裏火影とすら自負している。下忍を納得させる程度の事で怯えてなどいられる物か！」
「くっ……。ならここで聞いてやる！　移植の件はそっちの気分が乗ったらで構わねえ！」
　ここで引きさがっては男が廃る……という訳でもないが、比較されてしまって後々に言葉で言い包められることもあるだろう。ここは勢いに任せて話を済ませてしまい、ダンゾウの男気に応えたフリをしておくしかない。というかうちは一族がどうして全滅したかの情報なんか、原作で知ってるからあまり興味ないしな。
　そう思っていたのだが答は意外な物だった。そしてその話は、実に納得いくモノでもあったのだ。
「うちは一族は警邏隊を任されていたのは知っているな？」

「ああ。二代目が権威と責任を担わせる事で、里に帰属する誇りを持たせると同時に……犯罪者ともども隅に追いやられているんじゃないかと、一族の連中は疑っていたよ」

ここまでは原作同様の内容だった。答え合わせの必要も無く、ヒルゼンもご意見番も黙ったままだ。しかしここからが原作と異なり、同時にイタチの『症状』を見れば納得いく話だった。

「どのタイミングの犯罪者であったかは分からん。凶行に走ると同時に体を蝕む大いなる病が蔓延ったのだ。最初は犯罪者だと思って取り締まったうちは一族が罹患するのもそう遠い話では無かった。イタチとお前が罹患していなのは、偶然ではなく宗家だからに過ぎん」

「狂暴化し、死に至る病……だと!?」

原作でのイタチは死病に冒されていた。そしてどこか攻撃的な口調で、サスケの力を引き出す為もあって挑発的な物言いをしていたはずだ。

「イタチは人知れず同族を手に掛けた後、お前の事を頼んで里の外に出た。病を克服し完全に払う方法を見つけ……同時に他の国にうちは一族が残っておらぬか探す為だ。そして暁に潜入したのも、その目的を叶えつつ奴らを殲滅する為なのだ」

「それを信じろってのかよ……。あまりにも里に都合良過ぎるだろ……」

　これを嘘だと断じるのは難しくない。だが見方の差次第で原作と違った流れならばありえる未来ではないかと思う。当初は罹患して居なかったイタチも、須佐能乎を多用することで体に負担を掛けて病に掛かってしまうのだとしたら？

「信じる必要などない！　お前もこの世の真実を知って行けば、自ずと明らかになるだろう。里の為に己の手を血に染めたイタチの決断を！　そして今もなお里の為に活動し続けるイタチの決意をな！」

「……」

　何というか話の大筋自体は間違っていないのだろう。クーデターをダンゾウとイタチが語らって勝手に始末したというよりは、無理がない気もする。だがこの話はダンゾウにとって都合が良過ぎる。

　もしかしたらトビがそうしたように嘘と真実を織り交ぜて話を誘導しているのではないだろうか？　少なくともシスイの万華鏡を有している事を知られてしまっているのだ。もっともらしい事を言わねばご意見番たちにも疑われるだろう。

「奴こそはワシの後継者として裏の火影となる素養を備えていると信じて、いや知っておる！　サスケよ！　お前もその後に続くことをワシは期待しておる」

「直ぐに信じるのは無理だ。だが裏火影うちは……って言うべきか？　そいつは目指す

ことにするよ。俺も木の葉は嫌いじゃないからな」

こうして中忍試験とそれに伴う混乱は収束した。その後に何故か『根』ではなくダンゾウの弟子とかいう危険極まりない役目が割り振られてしまった。大蛇丸に体を狙われるのと、どちらが危険なのか首を傾げる程である。

だが原作と違う話でありながら、なんとなく似た雰囲気を持つこの流れは決して嫌いではなかった。原作知識に縛られるのではなく、ＮＡＲＵＴＯ世界に関わっているという確かな手応えが感じられたからである。

後日譚。木ノ葉が茂る夏の季節

あれから何があったかを話すと長いが公的に言うと砂の話、個人的には万華鏡の話か。

まず砂との戦いは早期に中断した。このことで俺たちに援軍を送れたことも大きいが、その後の話し合いが即座に持たれたことで影響が出た。大蛇丸とサソリによる陰謀だった事もあり、砂は被害者であるという面が判り易かったからだ。原作と違って風影の死体が見つかるまで待たなくとも良かった。

詳しく話をした事で木の葉の力が相対的に大きくなり過ぎて先に攻撃しなければ……という論に傾いたことはダンゾウをはじめとして強硬派もショックだったようだ。とはいえ力なき正義はなんとやらなので、硬柔を混ぜた政策にしようという三代目の意見が通り易く成った程度だが。

「綱手姫を次の火影として、その医療技術を広く世に広める。最初は砂隠れから……という訳だ。よろしくな」

「あんたがその交流一番手とは驚いたがな」

柔かい政略面としては原作通り綱手が火影に指名されることになった。これを引退

した三代目やダンゾウ、そして自来也が相談役入りして支える予定になったのだ。渋る綱手への交渉材料として彼女が勧めたかった医療改革を充てる。これは世間的にも判り易く穏健路線だからというのもある。他の里にバラしても綱手の権威に問題ない技術だしな。

「一応はな。ただ技術交流の枠が何名か分あるだけだから、ガーラやカンクロウが来る可能性もあるだろ。私が選ばれたのは最後まで共同戦線を張ったからだな」

「政治的な理由ってことだな。こっちの窓口はシカマルになると思うぜ。あいつは薬草に詳しい奈良家の出だからな」

その一方で砂との交流が少し濃くなった。テマリを始めとして技術交流を始め、砂隠れの里にしか育たない貴重な薬草なども提供してもらう事になっている。おそらくは傀儡を使った義手の研究も始まるだろう。

「……そうか。交渉の実務ならともかくとして窓口なんて面倒くさいだけなのにな。あいつ面倒を押し付けられた訳だ」

「そんな処だろ。実際、そっちが言ったように最後まで参加したからどんな奴かも判ってるし」

この話に関しては政治的に怪しい所がある。技術交流で得をするのは砂の方だが、発展していけばいつか手に入る技術だ。他の里には技術料を払えば教えるらしいので、真

似ることもできるだろう。それに対して木の葉では手に入らない貴重な薬草や、傀儡の応用技術なんかは容易くコピーもできない。そして今までよりも深い交流を始めるという事は、イザとなれば砂の力も借り易いという事だ。連中から見れば減っていく仕事を分けてもらえるわけだから、危険度や損益さえ問題なければ乗ってくるだろうしな。

「そういえばなんで眼帯なんかしてるんだ？　この間は無事だったろう？」

「俺の切り札はリスクが大きいと言ったの覚えてないか？　視力が一気に悪くなったから、その対策だよ。まあ治ると判ったから素直に話してるんだがな」

もう一つの変化、俺個人の問題としては万華鏡写輪眼の交換を一つ分だが済ませたことだ。二代目の資料を漁った結果、うちは一族に関する情報があり、そこに万華鏡の話もあったらしい。俺の言ったことも嘘ではないと判った事で段階を進めたわけだ。

実験と言うか犠牲者にカカシが選ばれた。マダラらしき何者かが暁に居るらしいという話はイタチからダンゾウが仕入れていたので、そいつはオビトである可能性が高いと教えたのだ。おかげでカカシも立派な万華鏡持ちである。

そしてカカシが手に入れたのは原作通りに神威だった。こいつは強力だがコストの重い瞳術だったので、仮に眼に瞳術が宿る場合でも悪くない条件と言える。交換されたとしてもカカシはコストの軽い加具土命を手に入れることができるし、俺は切り札にな

り得る神威を永遠の万華鏡状態で使えるので何の問題も無いのだ。
「忍に取って視力は生命線だから本当は使いたくなかった。だがナルト達の為なら仕方ないし、今回の方法で何とかなるとは推測していたんだ」
「写輪眼を引き替えに……それほどまでのリスクを。ガーラの為にすまない」
「気にすんな。一発で失明する禁術じゃないし、言ったろナルトの為でもあるってさ」
結果として原作通り、永遠の万華鏡写輪眼になったが瞳術は変わらなかった。原作では眼を一度奪われて取り戻した終盤のカカシが神威を使いまくったが、確かそ後に失明はしなかったと思う。その辺はウロ覚えなので怪しいが、もし眼の力が安定するならばダンゾウも交換しようとするだろう。
もっとも眼の力が安定化しないとしても、ダンゾウの弟子になって木の葉に協力するならば俺の強化用に交換するかもしれない。それとは別にイタチとも交換できる可能性は残っているし、数年後を目途にすれば両眼とも永遠の万華鏡にするのは難しくないだろう。
「話は変わるがもう一つの方は誰が来ることになったんだ?」
「ひとまずは私で統一。何の能力を必要とするかで誰が来るのかが変わるな。現状ではまだ何も聞いていないに等しいからな」
重くなりそうな話を変えるために、木の葉と砂が関わっているもう一つノプロジェク

トに話を向けた。何というか視力が落ちてすまないと言われても、永遠の万華鏡を手に入れたら劇的に強くなるからな。謝られた方がむしろ困る。

「オフレコって程に秘密じゃないから少しだけ話しとくか。まずは封印術式を研究しながら大蛇丸たち暁の目的に対処する。すくなくとも穢土転生だけは何とかしないと倒した奴がまた出て来るからな、その上でまずは精鋭の一班で色々な術や技術を試す形になるだろうよ」

「封印術や技術か……。となるとガーラかカンクロウだな」

もう一つのプロジェクトというのは要するに暁対策だ。次の忍界大戦を起こして利益を得る……という前提のもとに対策を立ててある。穢土転生にしても人柱力にしても封印が有効だからな。

しかしガーラと聞いて俺は少し不安になった。あの性格はナルトとの決戦無しになんとかなるのだろうか？

「なんだ？　うちの妹が来ることに文句があるのか？」

「いやそういう意味じゃなくてな。つーかカンクロウは無視かよ。どんだけシスコンなんだ」

テマリは最初は俺の内心を探って不機嫌になっていたが……一々相手にするこちらの身にもなって欲しい。あの戦いで苦手意識を持ってくれる方がまだやり易いくらい

だ。

と、まあそんな淡い期待を抱いていても何の工作もしなきゃ成功する訳が無い。時が経ち両眼ともに永遠の万華鏡写輪眼となる頃にはガーラがちょくちょく戦闘を仕掛けて来るようになった。

「サスケ、遊ぼう！」

「毎回毎回無理言いやがって！　こっちは任務帰りだっーの！」

こちらは任務を受けて戻って来るサイクルだがガーラたちは協議とか交流に来る訳で、俺らが帰って来る頃を見計らって来訪する。なのでどうしても待ち伏せられることになるし、チャクラだって消耗しているこちらに大してガーラは万全だ。

しかも最近は戦い方を覚えたらしく、迂闊に火遁を使ったらこっちが輻射熱で大変になるような位置取りで攻撃して来た。砂の津波がこちらを押し潰さんと襲い掛かって来る！

「だが運の無い奴だ。俺が新たな力を手に入れた時に来やがるなんてな！」

「新しい力?!　どんなの見せてよ!!」

とはいえこちらも万華鏡写輪眼で失明する可能性が無くなり、そいつを基軸に据えた戦い方が形になった所だ。丁度良いと言えば丁度良い。

何と言うかイタチの印が非常に速く、卑劣様を除けばダントツだったのを思い出し

た。あれはそれだけ術を繰り返し、特に得意な忍術に関しては相当修業を積んだのだろう。天照や須佐能乎の使い方まで訓練していたとしたら、そりゃ死ぬわ……というのも判らなくもない。

「夏遁・豪火球の術！」

所詮は囮、威力など必要はない。重要なのは範囲と何もさせずに連続行動を行う為の速射性だ。万華鏡写輪眼によるコントロールで最低限の威力だけを持たせて、飛び込んで来る爆発の衝撃を与えて俺の周囲だけ後退させた。

そして今の忍術に現したように、万華鏡状態の術は夏をイメージしている。太陽というモノは過ぎれば禍になり、適度であれば恵みである。火遁と同じ韻を踏んでいるのでこの名前を付けた。後は何かのゲームの資料で、ＮＩＮＪＹＡの強者にウインター級、最上級はサマー級というのを見た覚えがあるからだが。

「ただの爆風じゃ駄目だよ♪　直ぐに……」

「だろうな。だが次はこっちだ。構えろよ！　夏遁・龍火の術!!」

「速っ!?」

連続行動前提と言う事はこちらが本命。万華鏡状態の俺なら龍火の術でも豪龍火の術並の威力が出せる。もちろん豪龍火ならばそれ以上だが、このレベルの術で抑えれば印一つで実行可能だった。

そう、基本を極めれば性質強化や精度向上の印などは不要という事になる。火遁の発現を示す印だけでちょっとしたレベルの術が発動する。後は吐息に乗せるか、体の周囲に表すかだが火遁なので当然ながら息に乗せて放つべきだろう。
「熱っ。フフ。サスケのキ～ス♪　サスケは情熱的♪」
「ばーか。そんなんじゃねーよ。たまたま頬に当たっただけだろうが」
ガーラはとっさに砂の鎧をまとい、チャクラを集中させて防ぎ切った。もっと上の術ならば押し切れたはずだが、その場合は自動防御の砂が追いつくので微妙なところだ。もっと修行が必要だな。まあ修行すればするだけ身に付くのである、楽しくない筈がない。
「うふふ。やっぱりサスケは強いねっ！　カンクロウ、アレ使おうよ。アレ！」
「ようやく出番かよ。いいじゃん、出て来いよ、悪路王！」
ガーラが声をかけると隠れていたカンクロウが顔を出してくる。そして巻物を広げると二人を覆い隠す程の巨大傀儡が現れた。
その姿は上半身が巨大な鬼であり、下半身が巨大な蜘蛛になっている。言葉だけで語るとには八本の足で攻撃してきそうだが、実際には攻撃手段は太い腕だけだ。俺も提案に関わっている範囲ならそうなっていた……というレベルに過ぎないが。
「重戦闘傀儡！　完成していたのかよ！」

「上半身だけだけどな！　それでもこいつは無敵じゃんよ！」

重戦闘傀儡は文字通り戦闘のみを目的とした傀儡だ。忍者が情報収集を主体とし、戦闘はオマケというのには反している。だがそれだけに強力な能力を秘めており、パワー型の悪路王。高速機動型のアテルイの設計までは俺も知っていた。他にも両面宿儺だとか太郎坊とか企画の名前だけは知ってるけどな。

しかし何というか、やっぱ巨大ロボというのは憧れるよな。傀儡師を守りながら戦うためとはいえ、その重厚なボディには心惹かれるものがある。俺も提案に関わったというか、余計な口を突っ込みまくってダンゾウとナルトに叱られた覚えがあった。バランスを重視するダンゾウはともかくナルトにまで怒られるのは釈然としない。

「やっちゃえ、悪路王!!」

『マ゛！』

「そんな反則技で襲ってくるんだ。未完成品をガラスに変えられても文句言うんじゃねえぞ！」

俺は傀儡が動き出す前に炎で造った紫鏡を口寄せで呼び出すと、チャクラを活性化させながらその場を離れた。

一瞬遅れて悪路王の腕が伸びて来る。確か磁遁を反発と摩擦力低下に活かすため、今

のところはガーラの協力が必須。もちろんカンクロウが操るので、外でも良いが一緒に中にいた方が安全なはずだ。
「小手調べだ。夏遁（かとん）・龍炎放歌の術！」
「何が小手調べじゃんよ！　いきなり奥義放つんじゃねえぞ！」
「凄いよ！　防御したのにおてて溶けてる！」
　伸びて来た腕ごとやったのがいけなかったのだろう。直線状にある腕を溶かして、本体にはそれほどのダメージが与えられなかった。だがコイツの真骨頂はここからだ。
　なんと！　溶けた腕が次第に再生されて元に戻ろうとしてやがる！　穢土転生にゴーレム系の術があると指摘して、外の国に再生する守り神の話を聞いたことがあると教えたんだが……どうやらそれも完成させたらしい。遺伝子情報なんぞなくとも傀儡ならば設計基を自前で用意できる。完成状態へと戻る様にすれば良いだけの事だ。
「ただの金属じゃねえ……。磁遁は摩擦低下と反発だけじゃなく装甲や筋肉の精錬にも関わってやがるな？　さしずめ小さな人柱力ってところか」
「今んところガーラが居なきゃロクに戦えもしねえし、動かすにも数人掛かりになっちまうけどな。それでも凄い性能だぜ」
「カンクロウ！　主砲使おうよ主砲！」
　待て!?　そんなモノは聞いてねえぞ!?　つーか傀儡技術を小型化に使った義手とか、

逆に大型化に使った戦艦の話をしたが……まさか合体させたのか!?
「アレはもう一人居ねえと一発切りじゃんよ。動けなくなっちまうじゃん?」
「このままじゃあ負けちゃうよお。だからねーえ」
「はっ！　来るなら気やがれってんだ！」
　……しかし物は考えようだ。木の葉と砂が共同開発した秘密兵器の真価を見れるチャンスだ。巨大な砲門ってそれだけでロマンがありやがるしな！
　俺は向こうが悩んでいる間に防御を固める。白ベースの鏡の術から再不斬ベースに切り替え、炎の霧を出して粘度を高めていった。視界を奪いながら、動きを鈍くさせる算段だ。
「可愛い妹の頼みじゃんよ。しっかたねえ。サ千代叔母さまには一緒に怒られてやんよ」
「は～い。じゃあいっくねー」
（……サ千代叔母さま?　誰だそれ?　チヨ婆じゃねえのか?）
　他愛のない疑問を持ちつつも、予定よりも早く完成した重戦闘傀儡の技術者だと思っておくことにした。カンクロウほか傀儡部隊だけでなく、他に天才エンジニアがいると知って嫌な予感がする。
　ここで俺は直観に従い、視界が悪くなったのを利用して火遁分身を出して入れ替わっ

ておいた。そのまま転がる様に態勢を低くして、さっさと逃げて置くことにする。忍術に使われる遁という言葉は本来、紛れて逃げるという意味なのだ。遁走と言う奴だな。

「口寄せ。八卦炉！」

「口寄せ。火尖槍！」

（合体技……だと!?）

呼び寄せられたのは巨大な炉心、そして巨大な筒だった。それぞれが傀儡であり、チャクラを増幅させるギミックと、火を増幅させるギミックが仕込まれている。明らかに俺を意識した造りで、一応は共同作業で造った砂と木の葉の秘密兵器という態が何とか保たれていた。

こんなオーバーテクノロジーを何処から持って来たんだと詳しく眺めたが……。

「八卦炉、最大起動じゃんよ！」

「圧力限界。いっけー！　主砲発射！」

（霧のせいで判り難いのが自業自得だが……なんで人傀儡が出してるチャクラの性質に似てやがるんだ？　……まさか）

放たれたのは火・油そして風。何処かで見たというか……俺が『誰かさん』に見せた幻覚での作業に近い物だ。

そして何より主砲が稼働する前に筒先が展開し、砂やらゴミが入ったり壊れないよう

にするギミックが誰かさん本体の動きによく似ていた。
（ヤバイ！　威力も範囲もケタ違いだ。なんてものを造りやがる……ていうか、暁を抜けたの大蛇丸じゃなくてお前かよ、サソリ!!）
俺が隠れている場所ではまだ不十分。一緒に吹き飛ばされかねないので、仕方なく豪火球を近くに放って衝撃波を発生させた。これだと自分もダメージを負うが仕方ない、死んでしまうよりマシだろう。
残る体力とチャクラで炎の剣を出し、周囲が煙やら蒸気に包まれている間に傀儡の後ろ側に回り込んでおいた。
「そこまでにしとけよ。つか上忍どもがすっ飛んで来ねえ内に逃げんぞ」
「はーい」
「ぶっ放しただけで壊れちまった。トホホじゃんよ」
逃げても後で叱られるんだろうな……。俺のせいじゃねえのに。そう思いつつも盛大に煽ってしまったのは俺なので諦めておこう。
こんな風に既に原作とはかなり乖離している。
今後の世界がどうなるかは分からないのだが……それはそれで面白いのではないかと思う事にした。